

2012  
第4号

国士館史研究年報  
楓原



学校法人 国士館

Kokushikan



2012  
第4号

国士館史研究年報  
楓 原



学校法人 国士館

Kokushikan





## 昭和戦前期の国士館



初代校長 上塚司

国士館では、時代が昭和に移る頃には、海外へも視座を広げていった。

大正後期からの政府の移民奨励策、特にブラジル移民に対する積極的保護奨励策のもと、1930(昭和5)年4月、南米ブラジル、殊に未開地アマゾンへの移民の指導者たるべき有為な人材養成を目的として国士館高等拓植学校(1年制)が設立された。初代校長には、国士館理事で、衆議院議員としても7期を務めた上塚司が就任した。

写真は、国士館高等拓植学校の第1回卒業生47名が、1931(昭和6)年4月19日、横浜港より「さんとす丸」でブラジルへ出帆する際のものである。



昭和6年4月19日 国士館高等拓植学校第1回卒業生横浜出帆(上塚芳郎氏提供)

# 国士館専門学校と教員養成

国士館専門学校では、高名な講師陣によって一級の講義が行われ、学生は勉学に励んだ。1933(昭和8)年3月には、中学校教員の資格を無試験で付与される特典(中等教員無試験検定資格)を、「剣道・柔道」に対して文部省認可を受け、第1回卒業生からその恩典に浴した。その後も1936(昭和11)年に「国語」、1938(昭和13)年に「漢文」の無試験検定資格を獲得した。



斎村五郎・金子近次共著  
『新制 剣道教科書』

斎村五郎 (1887-1969)



福岡市に生まれる。1908(明治41)年、京都武徳会立武術教員養成所卒業。同年、宮崎県立宮崎中学校剣道教師。

1912(大正元)年、武徳会本部武道専門学校剣道助教。1918(大正7)年、警視庁武道師範。

1919(大正8)年、陸軍戸山学校剣道師範。

1925(大正14)年、早稲田大学剣道師範。

1929(昭和4)年、国士館専門学校剣道科教授。戦後、GHQにより禁止されていた剣道の復活に尽力。

1964(昭和39)年、東京オリンピック開会式では、剣道界を代表して持田盛二(警視庁名誉師範)と日本剣道形を演武した。段位は範士十段。「剣聖十段」と称された。勲四等旭日小綬章。



内田周平による漢文授業

内田周平(1854-1944)

遠江(静岡県)出身。東京大学卒。学習院講師、第五高等学校(現熊本大学)教授、哲学館(現東洋大学)教授を経て、1932(昭和7)年、国士館専門学校漢文専任となる。号は遠湖。著作に『寛政三博士の学勲』など。



教員無試験検定資格の認可発表



## 松陰神社と国士館



景 松 塾 (昭和 13 年 12 月 7 日竣工)

松陰神社と国士館の関係は、創立者柴田徳次郎が吉田松陰に私淑していたことから、国士館が世田谷の松陰神社隣地に校地を構えたことに始まる。以後、その精神は教職員学生生徒に引き継がれていった。

景松塾は、1938(昭和13)年12月、国士館に理解ある諸賢の協力を得て、萩の松下村塾を彷彿させる修養道場として、国士館校内(現8号館北側付近)に建設された。建設には、職人をはじめ木材や瓦、敷石まで一切を萩から取り寄せ、松下村塾に徹底して近似するよう努めた。特に、木材や瓦は元毛利藩代官屋敷の用材が転用されている。

その後、景松塾は1941(昭和16)年に世田谷の松陰神社に寄贈・移築され、往時の松下村塾を偲ぶことの出来る史跡として、今も数多くの人々が訪れている。

# 創立九五周年を迎えて

国士館史資料室長 佐々 博雄

平成二四（二〇一二）年は、国士館が麻布笈町に誕生してから九五年目にあたる。

寒露を過ぎた一〇月一四日、大正六（一九一七）年の国士館誕生の年に生れ、国士館とともに歩んでこられた柴田梵天国士館館長が逝去された。御年九五歳。まさに国士館の生きた歴史を失った。ここに謹んで柴田梵天氏を偲び哀悼の意を表すとともに、あらためて国士館百年史編纂の重みと、その必要を感じ身の引き締まる思いである。 合掌。

さて、国士館百年史編纂事業も事業計画にしたがい、平成二六年度中に史料編の刊行を目指す作業がいよいよ本格化する。また、平成二五年は、国士館の母体となった青年大民団結成から百年になる年であり、実質的に記念すべき年を迎えることになる。国士館史資料室も、より一層気を引き締めて編纂事業に取り組み姿勢である。

資料室の活動も、本年度は、例年行っている学内行事における展示・講義支援などの諸活動に加え、さらに、写真資料や国士館大学新聞のデジタル化および資料検索システムを構築して情報公開の活動も実施した。また、これまで発刊してきた『国士館史研究年報 楓原』も、号を重ねて本号で四号となる。俗に云う三号雑誌を超えることができたのは、阿部昭前資料室長のご指導の賜物であり、執筆編集にご協力いただいた皆様のおかげである。深く感謝を申し上げるとともに、さらなる充実に努力しなければならぬ思いである。

本四号では、研究論文・研究ノート・評伝などのほか、戦前・戦中期を中心に、高等拓植（殖）学校、専門学校など国士館関連史料の翻刻・補註を掲載した。とくに、国士館敷地内に建設された模造松下村塾（景松塾）に関する史料は、現在、世田谷松陰神社内に設置されている模造松下村塾の建設に関し、その由来を知る興味ある史料である。昭和一三年一二月に竣工した景松塾は、その後、昭和一六年一月に国士館から社会教化の修養道場として松陰神社敷地内鳥居の側に移築奉納され、その後、拜殿の横に再移築され、現在に至っているものである。世田谷地域と国士館とのつながりを知るうえでも貴重な史料である。

平成二五年三月一日

## 柴田梵天先生を偲んで

学校法人国士館

理事長 大澤 英雄

柴田梵天先生との出会いは、昭和三二年国士館短期大学に三年制の体育科が設置され、私とその第一期生として入学したときである。以来、学生時代を含め、先生との思い出は数限りない。ここに在りし日の面影を偲ぶとき、私が入学する以前の昭和二〇年代、創立者に代わって、国士館の理事長、校長として空襲で廃墟と化した国士館の復興に立ち上がり、多年に亘って国士館の発展にご尽力された先生に思いを馳せ、深い感動と共に先生への畏敬の念を禁じ得ない。

先生は昭和二八年の短期大学創設、昭和三三年の大学設置、その後も続く学部学科の増設に尽瘁された。その中でも、先生から直に伺った短期大学体育科の開設に纏わる話は印象深く残っている。それは、本学体育学部長を務められた石田啓教授の夫人で、後に体育学部教授になられた石田照子先生が、柴田先生の奥様と東京女子高等師範学校の寄宿舎で寝食を共にした同級生であったことが縁で、開設準備で奔走する中、石田啓先生のご尽力を得ることになり、それが大きな力となって体育科開設を果たすことができたというものであった。柴田先生は、この話をよく披露されたが、自らの経験を基にして、人に対する恩義、長幼の序、惻隱の情といった武士道にも通じる思い遣りの大切さを教えてくださった。

ここに、改めて本当に長きにわたる先生のご教示とご指導に深甚なる謝意を表すものである。そして、近く創立百周年を迎える国士館の更なる繁栄を築かんがために努力する私たち国士館同人を、天上より励まし見守り給へと御願うと共に、先生のご冥福を心からお祈り申し上げる次第である。

平成二四年一月二八日



館長 柴田梵天 略年譜

西暦	和暦	月	略年譜
1917	大正 6	6	東京に生まれる
1934	昭和 9	3	国士館中学校 卒業
1938	13	3	早稲田大学専門部政治経済学科 卒業
1941	16	3	早稲田大学法学部 卒業
		4	国士館中学校教諭（公民） 就任
1942	17	4	国士館専門学校教授（倫理） 就任
1943	18	4	財団法人国士館理事 就任
1950	25	2	至徳専門学校校長、至徳高等学校校長 就任 （専門学校校長は昭和30年、高等学校校長は昭和34年退任）
1951	26	3	組織改編につき学校法人国士館理事長 就任 （昭和28年退任）
1955	30	3	早稲田大学大学院法学研究科修士課程修了
		4	国士館短期大学講師（法学） 就任
1960	35	6	米国ニューヨークコロンビア大学（国際法専攻） 留学 （昭和38年帰国）
1963	38	9	国士館大学政経学部政治学科教授 就任
		10	国士館大学副学長 就任
1973	48	1	学校法人国士館理事長・総長 就任
1974	49	1	経済学博士号 取得（国士館大学大学院経済学研究科）
1984	59	4	学校法人国士館理事長・総長 退任、館長 就任
2012	平成 24	10	逝去（95歳）

# 国士館史研究年報

国士館史研究年報二〇二二 — 楓原 — 第四号

## 目次

### ◆ 巻頭言

創立九五周年を迎えて……………佐々 博雄

柴田梵天先生を偲んで……………大澤 英雄

### ◆ 論文と資料紹介

#### 論文

大陸と鏡泊学園……………槻木 瑞生 13

終戦直後の国士館について……………浪江 健雄 35

#### 研究ノート

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

— 旧学制下における国士館中学校について —……………山崎 真之 57



- 1 国士館高等拓植學校設立申請認可書類 80
- 2 国士館実務學校拓植科ヲ国士館高等拓植學校へ改称ノ件ニ付書簡 112
- 3 国士館高拓便り 113
- 4 国士館高等拓植學校学則及定員改正 116
- 5 国士館専門學校教員無試験檢定許可申請書 118
- 6 国士館高等拓植學校廃止認可書 136
- 7 国士館専門學校教員無試験檢定許可申請書 136
- 8 国士館松下村塾景松塾紀要 140
- 9 国士館専門學校興亜科新設ニ付学則變更認可申請書 143
- 10 国士館専門學校興亜科廃止ニ付学則變更認可申請書 154
- 11 国士館専門學校学則中變更認可書原本 158
- 12 国士館高等拓植學校設立認可書 166
- 13 国士館高等拓植學校新設ニ付徳富蘇峰宛柴田徳次郎書簡 171
- 14 国士館専門學校学則中變更認可書原本 172
- 15 国士館高等拓植學校廃止ノ件開申 177

◆ 評伝

頭山満 (二) — 大アジア主義への傾注 — ..... 岩間 浩 179

◆ 調査報告

理事長室企画課保管資料調査報告 ..... 福原 一成 201

◆ 国士館を支えた人々

上塚 司 ..... 熊本 好宏 203

水野 鍊太郎 ..... 漆畑 真紀子 211

◆ 『国士館百年史』 編纂事業中期計画要旨 …………… 国士館百年史編纂委員会 217

◆ 平成24年度事業報告 …………… 国士館史資料室 219

## 1 国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会

- (1) 国士館百年史編纂委員会／(2) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会
- (3) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会 研究会

## 2 国士館史資料室の活動

### 1 調査・収集

- (1) 平成24年度の主たる資料調査／(2) オーラル調査／(3) 主な寄贈資料

### 2 整理・保存

- (1) 資料目録作成状況／(2) 資料保存

### 3 利用・公開

- (1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）／(2) ホームページ／(3) 教育普及活動

### 4 室の構成

### 5 活動日誌

## ◆ 関係法規

国士館百年史編纂委員会要綱／国士館史資料室規程 …………… 241

## 論文と資料紹介

### 論文

## 大陸と鏡泊学園

梶木 瑞生



はじめに

鏡泊学園とは第二次大戦中に満洲へ送られた開拓団の一つである。これまでほとんど手を触れることができなかったもので、本論では鏡泊学園の基本的な考え方を検討することをねらいとしている。

### 一 戦時中の東アジア、東北アジアをどのよう に見るか

戦後にも数多くのアジア大陸の歴史研究が行われてきた。しかし特に教育史研究については戦後という時代の流れに翻弄されたこともあって、現在でもいろいろな問

題点がある。そのすべてを指摘することはできないが、まずは鏡泊学園を理解するために必要な点を幾つか検討しておきたい。

#### 1 戦後の東アジア研究の問題点―近代学校の意味―

東アジア、東北アジアについては既に江戸期にも、多くの情報が日本列島まで入ってきていた。特に明治以降にはアジアが日本にとって重要な意味をもっていたために、日本側からも積極的にアジアの情報を獲得するために多様な活動が展開していた。例えば笹森儀助、玉井喜作などの活動はその典型である。<sup>1)</sup>その後にも満鉄調査部あるいは満洲中央銀行などの調査や、軍部その他の団体などの調査・活動が展開されて行った。多様な情報収集に力を注いでいたのは日本だけではない。ロシア、中

国、欧米なども同様である。日本の敗戦後、東アジアで行われたアジア研究の多くは、そうした情報収集の結果生まれた資料を使っている。

一九四五年以降、数多くの東アジア史研究が行われてきた。それはそれなりに、多くの成果を上げたように思われる。ただそこにはある種の特徴がみられる。その一つは、戦後のいわゆる「研究者」と言われる人々の論の多くが、「近代国家」を前提にしたものであることであった。そのために日清・日露戦争後の東アジアの歴史のほとんどを、例えば「日中関係史」などという国家関係史としてとらえようとしている。

そのために、例えばキルギス、ウイグル、チベット、あるいは朝鮮族など、国境を越えて移動して行く俗に「少数民族」と呼ばれる人々の問題や、さらに小さな単位で動いた民衆宗教の問題などは見捨てられてきた。ましてディアスポラの問題などのように、国家を越えて行く住民の生活が論議されるようになったのは近年のことである。これまでの論には「国民」の視点はあっても、国境に捕らわれないアジアの「住民」の視点は少ない。

日本人の問題でいえば、例えば戦後に大陸から「引き揚げ」た人たちの抱える問題も、多くはただ「侵略」ということばで片づけられてきた。そのために「同窓会」、

「同期会」、「同郷会」などが大量の記録を作ってきたのに、この関係の資料はほとんど読まれることがなく、その存在さえ知らない人も多い。またそれを読んでも「ほとんど」の内容がワンパターンである」などとして、検討の対象としない場合も多い。

戦後のアジア史研究は「科学的」であり、「民主的」であることを目指していた。しかし「近代国家」を前提にしているために、それは戦前の「国家主義」の視点をそのまま引き継いでいると言っても良いだろう。特に戦後の「民主主義教育学」と呼ばれる論議には、戦前の「国家主義」と戦後の「民主主義」のつながりを十分に検討していないものが多い。

「国家主義」だからと言って、また「民主主義」だからと言って、それらの論を非難するつもりはない。ただ戦後の「民主主義」が非難した戦前の「国家主義」が、そのまま戦後の「民主主義」、あるいは「民主主義教育」にも十分に生きていることは確認しておかなければならない。戦後、戦前の「軍国主義教育」、「天皇制教育」に對抗するものとして主張した考え方に、「国民教育」と呼ばれるものがある。しかし、これは国家の一員としての「日本人」、即ち「日本国民」を創り出そうとした戦前の教育学の主張と重なるものであって、異なるもので

はない。

筆者はある欧米の研究者から、「典型的な日本人の顔」というのはどのようなものか」と尋ねられたことがある。しかし日本列島にはいつの時代にも多様な民族が住んでいて、そこには多様な文化があり、各地でそれぞれのグループが、それぞれの生活をしてきた。だから現在に至っても「典型的な日本人の顔」もないし、文化や生活も多種多様である。そうした事情を踏まえて日本列島に住む多様な人を、「同じ日本人」であるとしようとしたりのが明治以降の近代国家であった。そしてその政策を実施する中核として活動した機関が、現在の学校教育につながる「近代学校」である。

近代学校で行われている教育活動は政治政策の一つであって、それを「科学的」であるとか、「進歩的」であるという評価で判断することはできない。ましてその「近代学校」の教育に比べて、江戸期の教育を「封建的」とか「遅れたもの」ということもできない。政権の中枢にいた人々にとって、「近代学校」はアジアに迫ってきた多くの近代国家や近代的権力に対抗するための手段であった。そうした国家や権力に対抗できれば、それが「封建的」であっても「遅れたもの」であっても、それでよかつたのである。

江戸期の日本列島の知識人や権力の中枢にいた人々に、「日本列島を日本という一つの国家」としてまとめなければならぬと考えさせたのは、当然のことながら強力な力を持つて迫ってきたロシアや欧米列強の存在であった。一八世紀後半ころから江戸幕府が日本の地図を作り始めたのは、列強の接近に対応して江戸幕府その関係権力が支配している範囲を明確にするためであった。そのことがあって工藤平助の「赤蝦夷風説考」（一七八三）をきっかけにして、老中田沼意次は蝦夷地調査隊を派遣することとなる。<sup>33</sup>

国境を定めて、その中に住む住人を「日本人」、「日本国民」としてまとめなければならぬとする考えは江戸期からある。しかしそれを具体的な政策として展開したのは、明治期からであった。明治二年（一八六九）に京都に設置された番組小学校は、その先駆であった。<sup>34</sup>

それを受け継いだ明治の「学制」も、戦後の学校教育も、同じ近代国家を支える一つの機関であり、活動であった。

## 2 満洲関係資料の検討―現場にいた人の視点から見た近代史―

今日私たちが見ることのできる研究資料は、ほとんどが戦前の領事館や満鉄調査部、満洲中央銀行などが作っ

たものである。ただそのかなりの部分が現地の実感を基にして作られたところに特色があるだろう。その一方で戦後に作られた資料でこうした「実感」を基にしたものと言え、大陸から帰還した人たちの思い出の記録である。<sup>(5)</sup>しかしそうしたものについては、戦後の研究者の間では資料としての評価は高くない。

戦後の研究は戦前の資料を基礎にしたものが主流である。しかし戦前の資料には、現在の視点から見ると、その視点にはある種の歪みがある。しかし同時にそこには現場で考えたという実感がある。それは戦後の研究者が持ちえない実感である。それを非難するのではなく、それを大切にすべきではないのか。視点に偏りがあっても、どうしてそうした偏りが生まれたのか、それを理解することが大切ではないか。

戦前の現場にいた人たちの視点の偏りはどうして生まれたのか。それならば自分がその時代に、その場所ですきたならば、どのように行動するだろうか。そのことを考えなければならぬ。論文の形式が整うかどうかよりも、まずは現代に生きる自分の持つ視点や感覚をはっきりと出し、自分の視点や感覚の歪みへ迫らなければならぬ。その意味では竹内好、柳田國男などから学ぶものは多い。

研究あるいは科学というのは、すべて仮説を前提とするものである。だから本来ならば実験を繰り返して事実を確認しなければならない。しかし文化系の研究では、実験で立証することができない。そのため研究者の個人的な体験や視点を意識しておかなければならない。それに合わせて戦前の資料を作った人たちの実感や、もの考え方の特色を理解する必要がある。

例えば戦前の中国で、ある村にあった学校の数の調査が行われたとする。しかしその資料に書かれた学校の数は、資料に書かれているとおりだと考えて良いのだろうか。

ある村に三つの学校があるという記録は調査した人や調査の方法によって異なる。日本の領事館から「村にある学校の数を知らせよ」という依頼や要求が来ると、村長の考え方によって数が違ってくる。そのまま正直に「三つある」と答える場合もある。また日本よりも中国の文化が高いと考えている村長は、「いや五つある」と答えて、日本の領事館の活動を見下そうとすることもある。場合によっては「日本の領事館にほんとうのことを教えられないか」と思い、「一つだ」と答えることがある。日常生活で、支配者や権力者に住民はどのように対応するか。そうした実感があれば、このことは当たり前に分かるは

ずである。

調査する人が直接にその村に調査に入ったとしても、「この学校には黒板も椅子もないからこれは学校ではない」と判断することもある。その教育施設ではかなり近代的な教育をしていますが、それとともに「論語や孟子を教えているからこれは私塾であって学校ではない」と判断する時もある。

当時の私塾から多くの生徒が、日本側が作った「近代学校」に入学している。そして優秀な成績を上げる場合が多い。「一番は「満人」。二番は朝鮮人。日本人はそれ以下だ。」と話す当時の日本側学校の卒業生がかなりいる。それなのに東アジアや東北アジアの私塾の教育が、日本の近代学校の教育を支えていたと考える研究者は少ない。そして資料に掲載されている、いわゆる「学校」の数だけを並べて論文が作られる。戦前の現地の卒業生たちから話を聞くと、しばしばそうした矛盾にぶつかる。なかなか統計数字が信用できないことがある。それならば、例えば幾つかの統計資料を比べてみることも、一つの方法であろう。そうすると同じ事柄についても、時には数十種類の数字や統計が出てくることもある。資料を丹念に見て行くと、その資料の基になった資料を印刷した時に使った活字がつぶれていて、うっかりすると別

の数字に見えることがある。そのためにそれを利用した資料の数字が、他のものと違っていたりする。それに気づかずに堂々と数字を並べて、「正しい」、「科学的」な論文としたものが数多くある。

そのこともあつて数字を比較してみると、その論文がどの資料を基にしたものか、すぐに分かる時がある。

また資料には二次資料や三次資料ばかりではなく、数多くの偽書があることは戦前からよく知られていた。そのことを意識するのも、研究という作業の初歩の初歩である。

それを意識した一部の研究者が、「オーラルヒストリー」なる試みを始めた。それはそれで文書資料だけに頼る戦後の歴史研究への批判ではあるが、事はそう簡単には行かない。

例えばある研究者は中国へ出かけていった。そして自分が宿泊しているホテルの前に立って、通りかかった人たちに声をかけて戦時中の思い出を語ってもらい、それを記録することを試みた。だがこうして聞き取った話は、簡単に資料として信頼できるだろうか。

筆者も多くの関係者から話を聞くという経験をしてきた。しかし公式の場では公式の話以上のことは聞くことができないのが普通である。公式の場を終わり、二人に



なつて食事を共にするときに、ようやく、時々本音が出てきているなど感ずることがある。そしてさらに酒を飲んで酔っ払うと、もう一つ深い話が出てくることがある。人間には何段階もの本音があることを承知していないと、なかなか事実をつかむことができない。ましてそこに込められた思いも理解できない。

国家や政策の検討も必要である。それは国家や国家の政策が、「住民」の考え方と重なることが多いからである。しかし「住民」が国家の政策を、そのまま受け入れていると考えることにも無理がある。受け入れたとしても、なぜ住民が国家や国家の政策を受け入れて「国民」として行動したのか、その理由を探る必要がある。

なぜ日本という近代国家を作らなければならなかったのか。なぜ日本人という「国民」を作らなければならなかったのか。ここで日本や日本人というカテゴリーを否定も肯定もするつもりはない。ともかくも「国民」と「住民」との違いなども、「研究者」ならば視野に入れておくべきものであろう。特に近代学校を考える時には必要である。

### 3 満洲とは何か

清朝の太祖ヌルハチが建州女直を統一してマンジュグ

ルンと名付けた。一六三五年にはホンタイジが民族名をマンジュとした。満洲とはマンジュの発音を写した漢字であるという。<sup>6)</sup>

日本では満洲が民族名であると考えられてきた。その満洲を地域名として使うようになったのは一八世紀の後半からである。満洲とは民族名である、そうした意識を持つていた日本列島の人々に、日本海の対岸に満洲と呼ばれる地域があると伝えたのはオランダ地理学研究所が作った地図である。それまでの日本では、日本海対岸のアジア地域を満洲と呼ぶことは無かった。それなのにヨーロッパから持ち込まれたアジアの地図には Mandchurie などと記されている。<sup>7)</sup> それを見て桂川国瑞や林子平など、当時、日本列島の地図を作成しようとしていた人々は「このような地域があったのか」と戸惑いを覚えたようである。そしておそらくこれは満洲族の満洲ではないか、その Mandchurie には「満洲」という字を当てるのが良いだろう、区域もシベリアからはじまって中国吉林省北部辺りまでを示すのであろう、と考えたようだ。<sup>8)</sup>

さらにそこに日本人が持つ大陸への憧れが重なって行く。日本人にはかなり前から「天竺」という大陸への憧れを示す仏教伝来のことばがあった。<sup>9)</sup> それは仏教信者に



とつて心のふるさとで、死んだらばいつか心が帰って行くところである。

日本人の大陸への憧れは、日本列島に住むかなりの人が大陸北部から渡ってきたことによるのかもしれない。また中国から伝わった仏教の教えの力もあるだろう。ともかくも天竺と満洲が重なっていると、満洲という地域名は、単に日本海の対岸地域だけでなく、さらに広がって行く。日本人独特の、シルクロードへの憧れ、チベットへの思い、あるいは軍人の大陸横断への高い評価などは、中国やロシアの国境とは関係のないものであった。

満洲と呼ばれる地域は時代によってかなり変動する。満鉄調査課の出した論文には、北はシベリアから南は南京周辺まで、東は朝鮮半島から西はモンゴルまでを「満洲」と呼ぶと主張するものがある<sup>10</sup>。これだけではなく日清・日露戦争までの日本の教科書、地図、その他には、実に多様な満洲があることを承知していなければならぬ。

中国の東北三省辺りを「満洲」と示すようになったのは、日清・日露戦争前後からである。まずは日露戦争の結果、遼東半島を中心とする「南満洲」ということが生まれる。その「南満洲」の大部分は清朝から中国の支配地域と重なっていたので、「満洲」と呼ばれる地域

が中国領であるという見方が、しだいに広がって行ったようだ。

満洲とは「豊かな国」あるいは「豊かな領土」を意味する。満洲族ということばは広大な、豊かな領土を支配している民族という、その民族の誇りを示すものであったのだろう。しかしそれにもかかわらず戦後の東アジア研究では、「満洲」ということばは侵略を意味している問題があるという論が広がる。そのために「満洲」という表現は使ってはならないことになり、それに代わって「満州」あるいは「中国東北地区」という言い方をするようになる。しかし満洲族の支配した地域は中国領とは重ならない部分が多い。それなのに戦後は「満州」ということばを使ってきたために、多くの誤解を生みだしてきた。

「満州」は「豊かな村」あるいは「豊かな地域」を意味する。その意味を込めた「満州」と呼ばれる地域は中国各地にあった。さらには現在でも、台湾にも「満州」がある。「満洲」という領域を「満州」と表現するのは、言うならばそこに住んでいた満洲族を地位の低いものと見下すことにもなるだろう。また他の地域にある満州と、どのように区別するのも問題になるだろう。

わずかなことであるが、こうした点も検討する必要がある

ある。少なくともこうしたことは、中国や日本の古地図を見て確認しなければならないし、またできることである。

## 二 満洲開拓団と鏡泊学園

### 1 満洲へ渡った日本人

明治期に近代国家としての日本の組織が作られ始める。その一方で国家の組織の中に再編成された村落などでは、それまでの社会組織が崩れて行く。社会組織が崩れて行くとそれまで村落に支えられていた生活が成り立たなくなつて、農村部などから多くの人が都市部に流れ込んで行く。そのために都市部には多くのスラム街ができる。明治末から昭和初期にかけて東京は三分の二、あるいは四分の三がスラムであったと言われる。その姿は例えば添田知道の『小説 教育者』<sup>1)</sup>の中に書き込まれている。添田の小説は、小説とはいふもののドキュメンタリーだろう。多くの人の眼には都市部は豊かな地域に映っていたが、豊かな人もいるというだけで、その「貧しさ」は戦後にまで続いて行く。

そこには近代国家ができたとはいえ、それでもなお十分な生活ができないと感じる人々がいた。そうした不満

の解決策の一つとして、その「貧しい」人々をアメリカ大陸への移民として送り出すことが試みられた。しかしそこにはかなりの壁があり、例えばアメリカで起こった「排日移民」の問題などが、「貧しい」日本人の気持ちを押しつぶして行つた。そこで考えられたのがアジアへの移民である。

もちろんアジア大陸と日本列島の人的交流は明治以前からあった。江戸期の交流については十分に分かっているが、例えば一八六〇年にはウラディヴォストーク建設に、労働者として多くの日本人が大陸に渡つたことは既に知られている。こうした人々を移民と呼ぶべきなのかどうかは問題ではあるが、ともかく多くの人が、大陸でロシアが街を建設するという情報を得て、大陸へ渡つていったことは確かである。一八八四年に作られたウラディヴォストークの人口統計によれば、総人口一〇、〇九四人のうち、ロシア人が六、二二二人、清国人三、〇一九人、朝鮮人三五四人、そして日本人は四一二人であった。この日本人の中には多くの売春婦（からゆきさん）<sup>2)</sup>がいたが、その数は「からゆきさん」ということはが生まれた東南アジア方面よりも多かったという。ともかく東北アジアへの日本人移住民は既に日露戦争以前に、シベリアだけでなくかなり奥地などにもいて、各地

で多様な仕事をしていた。<sup>13)</sup>

多くのシベリア在住の日本人は日露戦争の開戦とともに内地に戻ったと言われているが、大田寛眠などの記録（かならずしも正確とは言えない部分が多い）からみると、その土地に溶け込んでしまった人もいる。日露戦争が終わるとすぐに満鉄附属地に民間の日本人の手で日本人学校が作られるが、そのことから考えると戦争があったのにもかかわらず、シベリアを含めた満洲にも在留日本人がそれなりにいたようだ。

## 2 満洲開拓と日本人

満洲開拓が始まるのは一般には日露戦争直後と言われる。ただそれは農業だけでなかった。前掲の中井の報告には、日露戦争中に來皮溝（キャピコウ）の金鉱山開発の調査が行われたことが書かれている。このように中国東北地区及びその周辺では、多方面の経済開発が考えられていた。こうした視点は、後の「満洲開拓政策基本要綱」（一九三九、一二）に農業、林業、漁業、商業、工業、鉱業、その他が、満洲開拓の狙いとして記されているように、太平洋戦争の最後まで残って行く。<sup>14)</sup>

しかし当時の日本にとって農業開発は重要なものであった。そのために日露戦争直後の南満洲では、水田や

果樹栽培が行われる。しかし中国側の抵抗もあって、そのほとんどが上手く行かなかったという。

しかし前述したように当時の日本列島の農村には十分な生活ができない人々がいて、農村の経済を圧迫していた。また都市部には当時「ルンペン」と呼ばれていた全うな仕事に就くことができない人々があふれていた。このことが農村出身者の多かった軍関係者への強い圧力になって行く。そのためにそうした状態を解決できない政治家、経済界、軍上層部へ、若手将校たちが反抗を繰り返すようになる。当時の「右翼」と呼ばれた諸団体の活動や、戦後強い非難を受けた「軍部のわがまま勝手な行動」、また多くの人に影響を与えた「農本主義」などの基には、こうした追いつめられた日本人の気持ちがあった。そうした状況の解決策の一つとして考えられたのが移民であり、開拓団であった。

ただ日本の貧しい人たちを移住させる問題は、その数十年前に満洲へ移住してきていた漢族、あるいはすでにそれ以前にそこで生活していた「少数民族」の問題と重ねるとどのように考えたらよいのか、それは簡単ではなかった。そこには満洲で近代国家としての支配を強め始めていた中国とロシア、その支配の問題点を突いてきた欧米や日本という近代国家、それは国家の支配や軍事力

だけの問題ではなく、宗教や教育など文化に関する問題までも含む幅の広いものであった。その錯綜して混乱する問題の中で、日本の開拓団が展開されるのである。

また「五族協和」、「大東亜共栄圏」、「王道楽土」などは、複雑な東アジア、東北アジアと日本との問題を解決しようとする日本側からのスローガンであった。しかし日本人が持つアジアへの思いと、現実にはアジア大陸で生活している人々との思いの間では、かなりのズレがあった。日本側ではなぜこの夢のようなスローガンを掲げたのか。大陸側ではそれをどのように受け止め、また大陸の問題をどのように解決しようとしていたのか。例えば民国期の中国の地理の教科書にも多様な中国領土の地図やアジアの地図が掲載されている。<sup>15)</sup>そこから読み取れる国家の領土意識と、そこに住む人々の多様な地域意識を、もう一度見直して検討する必要がある。

日本で最初の開拓団は、東京から送り出されたルンペン移民の「天照園開拓団」(一九三二・一六)であった。そして一九四五年四月に送り出された「満洲松花基督教開拓団」や、同年八月八日に牡丹江に到着した常磐松開拓団<sup>16)</sup>などが最終期の開拓団であった。

その特色の一つは、農業についてほとんど知識を持たない人に、数か月の訓練をほどこして送り出したことで

ある。また農村から送り出された開拓団の訓練でも、例えば「天地返し」のように深く土地を掘るなどの農業技法を推奨したことがあった。これは日本列島では望ましいものであるかもしれないが、土地が凍っていて、しかも水分が少ない満洲の土地では問題のある技法である。ルンペン開拓団のメンバーには「俺は大陸に紙くずを拾いにきたので、農業をしにきたのではない。」と語った人がいたという。

こうした事情を見ると開拓というよりは、余分な人たちを処理するために企画されたものに近い。こうした開拓団の中で、鏡泊学園村開拓団は少し色彩が違うように思われる。

### 3 鏡泊学園村計画

鏡泊学園に関する戦前の資料はかなりのものがある。しかしそこに書かれている内容については、あの時代の社会が抱えていた問題もあるのだろうか、資料によって書かれている内容が違ふところが多い。戦後に鏡泊学園の思いを書いたものとしては『満洲鏡泊学園鏡友会誌』に掲載されたものや、水上七雄、三堀幸一、田島梧郎が個人出版したもの、あるいはガリ版で作成し、一部の人に配付したものなどがある。また戦後に作られた開拓団

史に書き込まれているものもある。

ただ戦後に鏡泊学園について正面から取り組んだ研究書はほとんどない。あるとすれば前掲の『東京満蒙開拓団』だけであろう。戦前に書かれた資料はそれなりにあるのに、戦後のものは少ないというのは、戦後の研究者にとって鏡泊学園は研究してはならないテーマの一つ、タブーであったからだ。ここにも戦後のアジア史研究の歪みがある。

鏡泊学園については公表されなかったものとして、関東軍参謀部の『鏡泊学園調査報告 其の一 其の二』(一九三五、六)などや、満鉄経済調査会の『鏡泊学園調査報告書』などがある。一般に公表されたものとしては『人柱のある鏡泊湖』(大陸開拓精神叢書 第3輯 一九四〇、五)や、『満洲日日新聞』などの新聞記事、満洲関係の雑誌記事など多くのものが残されている。また鏡泊学園閉鎖後に満洲各地の開拓団にかなりの学生が参加しているが、そのことについても各地の開拓団の記録に記されている。

そうした初期の資料の一つに『鏡泊学園村計画書』という書類がある。これは「満洲鏡泊学園原稿用紙」(二二×一二)四〇〇枚ほどに手書きで書かれたものである。ただ何時、誰によって書かれたものかは分からない。こ

の資料は筆者が関係者から入手したものであるが、その関係者以外には読まれたことはなかったようである。

この「計画書」には、「学園村建設趣旨」、「鏡泊湖地域の歴史」、「本邦移民失敗史の回顧」、「建設計画」、「鏡泊学園村の経営の方針などが書かれている。この「計画書」は右上隅がひもで綴じられていて、鏡泊学園建設の計画を一つにまとめるための原稿として清書されたもののようにある。これがその後に出版されたかどうかは今のところはっきりしない。

これには鏡泊学園のさまざまな将来計画が詳しく書かれている。しかしそれでも目次の項目には上がっているが、鏡泊湖の「自然的条件」、「経済的条件」などの現地の状況に関する部分は綴じ込まれていない。この部分だけが無くなったのか、あるいは書かれなかったのか、今のところは分かっていない。しかし綴じ方やその他の点から見ると、こうした現地状況については書かれなかった可能性がある。

これは推定であるが、作成された年はおそらく柳条湖事件の直後であっただろう。表紙には「未だ充分に推敲した訳デハナイが：大林」と書き込まれていることからすれば、その基になる文章は、創設に関わった大林一之が書いたのではないか。これを大林が学園創設者の山田

第一に見せて、意見を求めたのだろう。ともかくもこの二人が協議して、鏡泊学園村建設の企画を作ろうとしていたことを示すものだろう。

これによると日満議定書（一九三二・九）が交わされた直後に、山田たちは鏡泊湖近辺に調査隊を派遣して一週間ほど調査をさせ、その調査によって鏡泊湖地域に学園村を建てる計画を立てたという。しかしこれについては別の説もある。それによれば山田は知人の軍人と一緒に飛行機で鏡泊湖周辺を飛んで、それで学園村の位置を決めたという。飛行機の上から見ただけで、その土地にはどのような農産物が適しているのか、あるいは場合によってはそこに「排日集団」や「共産匪」がいて、学園の開拓活動を阻止するかもしれない、そうした事情がこうした調査で分かるはずもない<sup>19</sup>。

鏡泊学園村のリーダーであった山田は、その意味でかなりしも十分な調査活動をしたとはいえない。またこの「計画書」もほとんどが内地で入手できる資料を基礎にして書かれていて、十分に現地状況を承知したうえで作られたものではないようだ。その意味で山田の想いもこの計画書も、ある種の夢であったのかもしれない。

#### 4 「計画書」と現実

例えばここには当時盛んに使われた「王道楽土」などのことばが書き込まれている。そして現地の状況については、「四面は松義嶺、老嶺、老松嶺等の山系を以て囲まれ、湖水と山系の何と豊饒なる一大盆地を形成しておる」、この地は「大古文化の発祥の地」であるなど、かなりのんびりとした話が書かれている。しかしその一方で「国家の最大急務として為さねばならぬ仕事を為さんが為に満蒙移民の夢を企て、茲に理想的学園村を建設」と書かれているように、そこには内地での日本人の生活の状況や、あるいは日本への外国からの圧力など、当時の日本の状況について強い危機感を持って書かれていることも確かである。

なぜ欧米、中国、アメリカなどと険悪な関係になっただけなのに、山田たちは「王道楽土」などのんびりしたスローガンを掲げて学園村を作ろうとしたのか。それを知ることは簡単ではないが、ここではある種の推測を試みたい。

この「建設計画」には、学園村は「集団移民」であると書いている。満洲の日本人移民が集団を作って住まなければならなかったのは、一つには満洲地域には日本人以外にも多くの他民族が住んでいたことがある。後発の



日本人開拓者に対して、先行していた他民族から大きな反発を受けることは当然のことである。事実日本の勢力が強かった関東州や満鉄附属地でさえも反日運動がしきりに起こっていた。まして朝鮮半島との境界地域であった東満地区、北満地区にはかなりの軍事力を持った抗日団体が活動をしていた。鏡泊湖周辺もその一つである。

この「計画書」にも「匪賊」の出没が盛んであるという認識が書かれている。その意味で日本側開拓団にとつてかなり負担が大きかった。そうした状況に対してはそれまでのような少数の開拓民だけでは対応できないだろう。かなり大勢の人が住む大きな村、それもしつかりとした組織を持つ村を作ることが大切であった。

またそれとともに、この「計画書」では「集団移民」の組織や協力体制によって生まれる「共同経営の利益」は大きいとしている。集団の力によって「機械農業」も展開できるし、さらに農業以外にも畜産、林業、工業などにも手が出せるという。そしてそこで生まれる成果は、ただ自分たちの生活水準を上げるだけでなく、その生産物を内地に送ることで「内地農村の疲弊」も救うことができるとしている。外国の土地を「占領」したと批判することもできるが、開拓団を企画した人にとっては内地の抱える問題が大きな意味を持っていたことが推察される。

る。

このことは山東省、山西省から移住してきた漢族についても言える。自然の条件は満洲地域よりも山東、山西などの方が良いはずである。しかし当時日本側が「満人」と呼んでいた人々は、その悪い条件の中で日本人を圧倒して働いていた。それは単に「反日意識」で働いたのではないだろう。「反日意識」を支える生活条件があったのだろう。

日本と山東、山西の生活を簡単に比較したり、評価したりすることはできない。しかし日本人には日本人の、漢族には漢族の生活意識があったことも間違いない。

##### 5 学園村発想の基には何があったか

この「計画書」の第三章には「本邦移民失敗史の回顧」が書かれている。そこにはこれまでの満洲への日本移民の失敗の原因として、政治的、経済的、自然的、社会的原因などいろいろなものが挙げられているが、それらをまとめてその第七節に「過去の失敗より得たる教訓」が書かれている。その一番強調するところは、土地の商租権が確立していないために「支那人の不当なる排日」運動があつて、満洲の治安の維持ができなかったことが強調されている。そして「満蒙の如き原始的の土地開発に

は、「完全なる統制による密接なチームワークが必要」であるとしている。

この「チームワーク」構想の基には、どのようなイメージがあったのだろうか。

これについては、まず現地の抗日運動に対抗する手段であったことは間違いないだろう。

次に飛躍した表現と思われるかもしれないが、それまでの日本列島の伝統である「村」あるいは「仲間」のイメージがあったのではないだろうか。例えば次のようなことである。

一人や二人の人たちだけでは遠くから田畑に水を引いてきて、大規模な農業を展開することはできない。また釣竿一本で魚を取るよりも、大勢の人の手を借りて大きな網で魚を掬う方がはるかに多様な水産物を味わうことができるし、生活も豊かになる。その生活の豊かさを求めることが仲間としての「村」の始まりである。

人間というものは、常に他人に対して違和感をもって生きている。そのことは当たり前のことであるだけに、例えば漢族や朝鮮族ではそれに対抗するために「一族」のつながりを重視する。それを日本人の場合には地域のつながりとして考える。地域には「一族」よりも違和感を持つ人が多数いるのは日本列島では自然のことであっ

た。しかもその違和感を持つ人々を、時には数百人、数千人とまとめることができる、大きな力になった。日清、日露の戦争はそうした多数の人のまとまりの意味を日本人に伝えたのではないか。

しかしそうは言ってもそのことは簡単ではない。人間をまとめるにはリーダーも、組織も必要である。場合によっては組織が住民を統制しなければならないことさえある。その基礎として仲間意識を作り、仲間意識の上に「村」という統制組織が始まるのである。

共同作業をするために「村」の住民は仲間意識を創り出さなければならぬ。そのために、時には飲食を共にし、時には和歌や俳句の会を開き、また神輿を担いで年一度の祭りをする。こうした会や行事は仲間づくりに欠かせないものである。また村の僧侶に導かれて皆で同じ神社仏閣を参拝し、その僧侶の指導で「お経」を唱える。さらに私塾や寺子屋で難しい漢文を学ぶことも、すべて共通の思い出を創り出すためのものである。その意味で、私塾や寺子屋という教育組織も、何か新しい知識を教えるもろうことが主たる狙いではなく、仲間作りをする場所であった。成績よりも同じ師匠に学んだという思いが大切である。開拓村にかならず神社を作り「東方遙拝」をしたのは、多様な宗派の開拓民をまとめるためである。



知識とはすべて過去の経験から生まれる。過去とは全く違うこれからの未来の生活に、これまでの過去の知識が役立つという保証はない。だから成績の良し悪しが問題ではなく、まずは仲間を作り、仲間と知識や技術のやりとりをすること、そのために村で祭りを行い、村のこどもの教育施設を作ること、それが大切と考えたのである。ただその政策が上手くいったかどうかは、また別問題である。

何が起こるか分からない未来の世界へ立ち向かうには、仲間とその仲間をまとめるリーダーが必要である。しかしテストで良い成績を上げた者が、「村」の将来を背負える良いリーダーになるとは必ずしも言えない。しかしリーダーの判断が当たらなくても、「村」はまとまっていかなければならない。山田や大林の計画が不十分であっても、それを基礎にして先へ行くことが、鏡泊学園という仲間意識を生んだのである。

組織と仲間は重なるものであるが、全く同じではない。仲間と仲良くするとともに、同時に自分の意志に反して組織やリーダーに従わなければならないこともある。そこには常に矛盾がある。しかし山田や大林を尊敬して行くことが自分たちを支えることにもなる。

鏡泊学園「村」の建設には、こうした伝統的な仲間意

識を基礎とした「村」のイメージが生きていたのではないか。日露戦争から昭和前半にかけては、伝統的な仲間意識が「近代国家」という組織に変わって行く時期である。だから近代の「国家」の組織やリーダーと、伝統的な「お国」「ふるさと」という仲間意識が重なっていた時代である。現代とは、「国家」という組織意識が優先しているから、「あなたのお国はどこですか」という問いかけさえ聞いたことがない人がいるし、その意味が分からない人も多い。

地域の仲間としてのつながりが仲間を守り、新しいものを作りだす。日本人開拓者の生活を守り、新しい生活を生み出すために「開拓村」、「学園村」を意識したのでろう。

## 6 鏡泊学園村の成立

関東軍も満洲、特に鏡泊湖地域の「匪賊」、「反日意識」、そうした事情を懸念して「過早に開園するが如きは適切ならず」として、最初は学園村を鏡泊湖周辺に作ることに反対していた。<sup>20</sup>山田たちはその反対を強引に押し切つて、鏡泊学園村を作ることになった。ほとんど開拓について十分な技術や力を持っていない学生たちを、東京の国士館高等拓植学校や敦化満鉄農業試験場で、農業実習、

軍事訓練、中国語の訓練をわずか数か月行つて現地に送り出す。最後まで中国語が話せない学生もいて、それだけの訓練にかなり無理があったことも間違いない。こうした訓練の状況については他の開拓団でも似たようなものであった。

それでも鏡泊学園の学生たちが持つていた山田に対する深い尊敬の念は、まさに伝統的な仲間としての「村」の意識であった。鏡泊学園鏡友会会長の結城吉之助は、同会会員の三堀幸一の追悼文に「尊師・山田悌一先生」と記している<sup>21)</sup>。生きて行くための仲間という集団あるいは組織の重さを、学生たちは意識していたのだろう。鏡泊学園は「大亜細亜主義」を心に持ち、「五族協和、王道楽土の建設」という大業を実現するための実践的学校であったという<sup>22)</sup>。

大陸には多様な民族、種族が住んでいて、漢族でさえも多くの民族、種族の集合体であることを考えると、こうしたことはまさに空想であり、夢であつたらう。当時の大陸に住む人から見れば、こうしたことは理解できないものであつたから「侵略」を誤魔化すものと感じたであろう。しかし多様な民族や種族、一族や集団が常に衝突を繰り返してきた大陸と、多民族、多文化でありながら「村」や「お国」を基盤として意識していた日本

列島では、かなりものの感じ方に違いがある。「大東亜共栄圏」、「王道楽土」、「五族協和」などは戦後の感覚から見ればその内容は「あいまい」であるというだけでなく、当時の大陸の状況から見ればおかしな表現でもある。しかし、良くて悪くても、もう一度そうした表現を生み出した基盤と向き合つて見る必要もあろう。むしろ「侵略」の一言ですませてしまつては、日本列島の歴史を見ることにはならないだろう。

## 7 「ふるさと」 満洲

こうした地域を基礎にした仲間意識は鏡泊学園だけではない。かなり無理をして内地から送り出された他の開拓団員の多くは、自分のふるさとを満洲に作るつもりでいたという。「満洲からの引き揚げ」ということがよく使われる。しかし日本人の「引き揚げ」は、日本の技術が中国へ伝わることを恐れたアメリカの政策により強行されたものである。確かに「在満日本人」の中には技術を伝えるために「抑留」された人もいたが、また自ら進んで残留した日本人も多い<sup>23)</sup>。そして日本人であることすら止めた人もかなりいる。

「在満日本人」であつた方の中には、「俺は日本人だ。だが日本国民ではない。」と強く主張される人もいた。

差し出された名刺の肩書きには「在日奉天人」となっていた人もいた。また「在日日本人」となっていた人もいた。おそらく今は日本列島で生活しているが、自分の故郷は満洲であると言いたかったのだろう。遺言書に「満洲へ散骨して欲しい」と書き残す人も多い。これは何も満洲だけのことではない。カナダへ移住した日本人の子弟の学校、「カナダ日本人学校」の建物は今でもあるが、そこに通う日本人生徒は今はいないという。こうした日本人のディアスポラはどうして起こったのだろうか。「侵略」ということばだけで考えるのならば、簡単であり過ぎるだろう。

## 8 学園の解散とその後

学生たちが鏡泊湖に入ったのは一九三四年の春、三月である。その年の五月に大廟嶺の事件が起こる。山田悌一は一緒に行動していた数人の学生や兵隊とともに、「匪賊」に襲われて死んでしまう。山田の死によって学園村は崩壊する。翌年一月末、鏡泊学園は第一回の卒業式を行い、そして学園は解散した。その後学生たちは他の開拓団へ移籍するなどして、各地へ散って行く。しかしむしろこれからが鏡泊学園の満洲開拓の開始であった。

田島悟郎は前掲のもの以外に『鏡泊誌 鏡泊学園外

史』、『鏡泊誌 その二』というガリ版刷りの手記を書いている。これは一九四四年の春に起きた、いわゆる「鏡泊湖事件」に関する記録である。

学園が解散しても鏡泊湖に残留した学生がいた。田島もその一人である。最初は三〇名ほどであったが、やがて半数ほどに減って行く。残留者は山田の理想を引き継いで学園村を作ろうと望んでいたという。田島の『鏡泊誌 その二』には、「馬賊姿」の「若き日の山田悌一先生」の写真が掲載されている。これを見ても、田島も山田の想いを理想としていたことが分かる。

「鏡泊湖事件」とは、鏡泊村の村長をはじめとした部落の長や幹部、合計四三名が日本の警察隊によって逮捕された事件である。当時、東辺道とか東満と呼ばれた朝鮮半島に近い地方には、「匪賊」、「共產匪」などと呼ばれた抗日運動団体が数多くあった。しかもその多くが住民と繋がっていて、住民は密かに抗日運動を支援していたと言われている。

日本側の武器も日露戦争で使われた三八式歩兵銃などかなり古いものであった。しかし抗日団体の武器はさらに古く、火縄銃であったり、弾丸を製造できないために銃に釘を詰めて発射するなど、武器としては程度の低いものであった。それでも住民には日本軍に反発する気持

ちがあつて、取り締まるにも住民の協力が得られない。そのため地域の統制もできないだけでなく、日本側にもしばしばゲリラ攻撃による死傷者が出ていた。

「鏡泊湖事件」とは、日本側を積極的に支援しない住民に信頼を持てなかつた軍部が、抗日運動を取り締まるために十分な問題も証拠も見つけないままに、住民の幹部を逮捕したことに始まる。かなり強引な取り調べもあつたようだ。そして事態はそれらの幹部に死刑判決を出すまで進んで行く。

「検査された人たちのほとんどが呢懇の間柄」であつた田島は、住民からの連絡を受けて救援に動く。田島は「共に匪賊の難を受けたことや又これを撃退したこともある」という。その思いから「満洲国のやり方について、私はある種の抵抗を感じていた。」そして「これでは一種の弾圧政策だ。満洲国が掲げていた亜細亜解放、民族協和、王道楽土の看板は偽りとなる。」と考えたという。その結果として田島は日本側の官庁や協和会などの諸機関に働きかける。「原住民ともすっかり朋友(ボンユウ)になつてしまい、そろそろ鏡泊湖の主(ヌシ)になりかけています。」と鏡泊学園の一員であることを強調して、死刑を取りやめさせるところまで行く。死刑を取りやめさせることができたところで「満洲建国の精神未だ亡び

ずか」と思ったという。

満洲国の建国は日中関係としては中国の領土を奪うものであつた。その一方で満洲に住む日本人にとつては、一〇年や二〇年しかかるだろうが、「満人」、「鮮人」と共に故郷を作る作業でもあつた。いや、日本列島という故郷を捨てて、別の故郷を作る仕事であつた。田島の墓碑には、田島の気持ちを受け取つた子息が「満洲」ということばを書き込んでいる。日本という国家組織も必要であつただろう。だが、同時に「満系」、「鮮系」を含めた満洲という故郷を意識していたと言ふべきだろう。

その後田島は多様な道を歩くが、日本の敗戦を迎えると、それまで田島が支援した地元の人たちから支援を受けて帰国することになる。帰国後は長崎に行き、再び開拓に入る。

戦後、田島は再度鏡泊湖を訪ねることができ、その時は当時の関係者と心から喜びあえたという。さらに田島にとつて、鏡泊学園の生徒募集に応募した時の想いも、学園閉鎖後に鏡泊湖で再度鏡泊学園を作る時の想いも、最後まで変わることはなかつた。

幾多の関係者から話を聞いて、江戸時代だ、敗戦だと、時代で歴史を区切ることのむなしさを感じる。また国境で区切るアジアの社会の研究のありかたにも疑問を感じ

る。中国にディアスポラした日本人の多さ、日本にディアスポラした多くの中国人や朝鮮人、その人たちの心を見なくて歴史研究があるのだろうか。それが一つの結論である。

## おわりに

ある知人から言われたことがある。「研究とは常に仮説である。だから学問にはいつも実験がつきまとうのだ。」と。これまでの研究の歴史を見てくると、「正しい」、「先進的だ」、「科学的だ」と言われていたものが、いつの間にか「古臭い」、「保守反動だ」、「間違いだ」などと言われるようになる事がしばしばある。だからその知人の言うとおり、まさに研究は「仮説」を前提にしたものである。ただ文化系の研究をしている者としては、「文化系の研究に実験なるものがあるだろうか」という疑問も持った。

そして「実験」によって実証できないのならば、まずは「自分の研究の歪みを意識して明らかにしておくかなければならない」と思うようになった。「客観的な事実」を追い回すだけでなく、それを「客観的だ」と思っている自分の視点を、できるだけ明らかにしておくことが「客

観的」ではないのだろうか。資料を見てそれを批判するのではなく、その資料の視点の特色を見ることも必要ではないだろうか。その意味で、資料についても研究についても、その人の視点、また自分の視点は何だったのかを意識したいと思っている。

## 註

- (1) 横山武夫『笹森儀助翁伝』（今泉書房、一九三四年三月）、大島幹雄『シベリア漂流 玉井喜作の生涯』（新潮社、一九九八年）その他。
- (2) 武内房司『越境する近代東アジアの民衆宗教』（明石書店、二〇一一年二月）など。
- (3) 海野一隆『地図の文化史』（八坂書房、一九九六年二月）その他。
- (4) 京都市小学校創立三十年記念会『京都小学三十年史』（一九〇二年一月）。
- (5) 玉川大学教育博物館外地資料室、愛知県春日井市立図書館所蔵資料など。
- (6) 三上次男・神田信夫『民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史』（山川出版社、一九八九年九月）。
- (7) PAR J. HENRY『MONDE ENTIER』（二八三五年）など。

- (8) 船越昭生『鎖国日本にきた「康熙図」の地理学史的  
研究』（法政大学出版局、一九八六年四月）など。
- (9) 法隆寺蔵「五天竺図」（一三六四年）など。海野一  
隆『地図の文化史』（八坂書房、一九九六年二月）参  
照。
- (10) 満鉄調査課『調査資料 第七十七編』（南満洲鉄道、  
一九二八年三月）。
- (11) 添田知道『小説 教育者』（一九四二年九月）。
- (12) 倉橋正直『北のからゆきさん』（共栄書房、一九八  
九年三月）。
- (13) 水谷魁曜『清国行日記』（一九〇〇年）、中井喜太  
郎『成鏡道経済事情視察報告書』、秀トンコリ『評  
伝 太田覚眠老師 そのルーツを訪ねて』など。
- (14) 東京の満蒙開拓団を知る会『東京満蒙開拓団』（ゆ  
まに書房、二〇一二年九月）。
- (15) 上海商務印書館『中華新興図』（一九二六年五月）、  
中華書局『最新本国地図』（一九二〇年四月）、白眉  
初『中華民国建設全図』（一九三一年八月）、世界興  
地学社『中華最新形勢図』（一九三八年一月）など。
- (16) 東亜局『日本基督教団満洲第二開拓村 編成促進委  
員会記録』など。
- (17) 前掲註（14）。
- (18) 『鏡泊学園村計画書』。
- (19) 満洲日日新聞社発行の『人柱のある鏡泊湖』（一九四  
〇年五月）には、「敦化から軍用トラック一台に警  
備兵を同伴して現地向けて出発し、途中鶴見枝隊  
の掩護の下に、鏡泊湖の風光を初めて目のあたりに  
みたのである。」と書かれている。
- (20) 関東軍参謀部第三課『鏡泊学園調査報告 其の一』  
（一九三五年六月）。
- (21) 三堀幸一『雲山万里の鏡泊湖―血と涙の湖畔の12ヶ  
年―』（一九九三年二月）。
- (22) 田島梧郎『大陸生活の思い出』『健康と長寿』（一九  
九三年六月）。
- (23) 呉万虹『中国残留日本人の研究』（日本図書センター、  
二〇〇四年六月）など、多数の記録や研究がある。
- (24) 『鏡泊誌 鏡泊学園外史』（一九八二年一〇月）、『鏡  
泊誌 その二 鏡泊学園外史』（発行年不明）。この  
二冊は田島の個人的な思いから「鏡泊湖事件」につ  
いて書かれたものである。その意味でかなり率直な  
気持ちで書かれている。他の記録と比べると少し違  
うところがあるが、聞き取りをしたかぎり、田島の  
記録が事実であろうと考えている。これに対して前  
掲の『健康と長寿』掲載のものは、「できるだけ記

録を残して欲しい」という筆者からの依頼を受けて、「自分史」として書かれたものである。その点で当時の事情を少し冷静に見ようとしているように感じている。

槻木 瑞生（つきのき みずお）

同朋大学名誉教授、アジア教育史学会顧問

アジア近現代教育史専攻

日本列島から見た近現代の東北アジア、東アジアの教育の歴史を追う。

著書

「教育とディアスポラ」（『アジア教育史学研究』第二一号、二〇一二年）

「文化・技術の流れのなかの満洲教育史」（名古屋

屋建大研究会、二〇一二年）など

編著

『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料』（龍溪書舎、二〇一二年）など



# 読者の皆様へ

国士館史資料室では、『楓原』をお読みいただいた方々からのご意見・ご感想を募っております。お寄せくださったものは、『楓原』編集の参考にするなど有効に活用させていただきたいと考えております。また、今後の編纂事業の貴重な糧といたします。

おおむね八〇〇字程度でお寄せいただければ幸いです。

## 郵送先

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八―一 柴田会館二階

学校法人 国士館 国士館史資料室

TEL 〇三―三三四―一八一―二六九一

FAX 〇三―三三四―一八一―二六九四

E-mail [archives@kokushikan.ac.jp](mailto:archives@kokushikan.ac.jp)



論文

終戦直後の国士館について

浪江 健雄



はじめに

国士館は、甚大なる戦災の中、一九四五（昭和二〇）年八月一五日を迎えた。同年三月と五月の東京大空襲により東京が灰燼に帰すなかで、国士館もB29爆撃機による空襲を受け、教職員や学生・生徒の必死の消火活動にもかかわらず、校舎のほとんどを焼失し、戦災を免れたのは、大講堂と柔道場、剣道場と正気・時習寮のみであった。それでも、わずかに焼け残った大講堂や剣道場などを教場として、徐々に授業を再開していく。しかし、教育現場では、国士館教育の根幹でもあった武道教育が、戦後教育改革により禁止されるなど、それまで国士館が築いてきた文武両道による教育方針の変更をせまられることとなった。加えて、校名および寄附行為の改正をも

求められた。また、国士館専門学校校長柴田徳次郎には、翌四六年三月、公職追放が適用され、校長の交代を余儀なくされた。

かくして、武道教育の廃止、校名および寄附行為の変更、校長の交代といった状況を脱し、新たな体制を整えねばならなかった。結果的には、戦後最初で最大の危機を乗り越え、新たな教育制度のもとで再生を果たしているのであるが、その実態については不明な部分が少なくない。

例えば、校名変更については、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）や文部省の動きが正確に掴めていないことから、それに伴う指導や指令がどのように為されたかについて、確かなところは解っていない。また、武道教育の廃止による寄附行為および学則の変更が与えた影響についても具体的分析は為されていないのが現状であ

ろう。さらに、そうした戦後教育改革を受けての現場はどのようであったのか、実際の学内の様子はほとんど知り得ていない。

そこで本稿では、武道教育の禁止、校名および寄附行為・学則の変更、終戦直後の学内の実態、以上三点を主たる視点として、終戦直後の国士館について論じていくことにする。

## 一 戦後教育改革とその対応

### 1 GHQによる教育政策

まずはGHQによる教育政策について確認してみた。一九四五年七月二六日「ポツダム宣言 十」には、

日本国政府ハ日本国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向ノ復活強化ニ対スル一切ノ障礙ヲ除去スベシ言論、宗教及思想ノ自由並ニ基本的人権ノ尊重ハ確立セラルベシ<sup>①</sup>

とあり、民主主義の復活強化、言論・宗教・思想の自由、基本的人権の尊重といった基本政策が示されている。次いで、同年一月一日「日本占領及び管理のための連合

国最高司令官に対する降伏後における初期の基本的指令 10 教育、美術及び文書」では、指導のための第一義の指令がなされている。

教育機関は、できる限り速やかに再開される。好戦的国家主義及び侵略の積極的推進者であつたすべての教師及び軍事占領の目的に積極的に反対し続けているすべての教師は、受け容れうる有資格後継者と取り換える。すべての学校における日本の軍事的及び準軍事的教育及び教練は、禁止される<sup>②</sup>。

とくに軍事的教育及び教練の禁止は、その後の武道教育廃止に直結していく。文部省指令も終戦直後より矢継ぎ早に出されている。終戦に伴う体育関連文部省指令<sup>③</sup>を順にみていくと、一九四五年八月二四日「学徒軍事教育並ニ戦時体練及学校防空関係諸訓令等ノ措置ニ関スル件」では、戦時関係諸訓令等の廃止。九月一九日「武器引渡命令ニ対スル学徒教練用銃兵器処理ニ関スル件」では、軍用銃砲・刀剣・軍用火器の提出。一〇月三日「時局の急転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」では、銃剣道、国民学校及女子中学校に於ける教練の廃止。また、同日の「学徒ノ軍事教育ニ関スル件」において、女子専門学校

に於ける教練の廃止。一月六日「終戦二伴フ体練科教  
授要項（目）取扱二関スル件」では、国民学校・中学校  
に於ける武道（剣道・柔道・薙刀）の授業中止（青年学  
校は中学校に準ず）。そして、また同日に出された「武  
道ノ取扱二関スル件」では、

今般武道（剣道、柔道、弓道）ハ校友会ニ於テモ部  
班等ヲ編成セザルコトト相成タルニ付此段及通牒

とあり、この時点において、ついに武道教育が全廃となっ  
た。

## 2 校名の変更

こうした趨勢の中、国士館では、校名の変更を文部省  
に申請している（一九四五年一月二〇日申請、翌四六  
年一月一日認可）。新たな校名は、「至徳学園」である。  
これは中国五経の一つ『礼記』にある「聖人至徳」の文  
言から名付けたと言われている<sup>4</sup>。改称理由は次のよう  
である。

ポツダム宣言受諾ノ現時点ニ鑑ミテ設立者財団法人  
国士館ノ名称ヲ財団法人至徳学園ト変更スルニ伴ヒ

テ校名ヲ改称セントスルモノナリ<sup>5</sup>

この申請を文書なりに素直に解釈すれば、時代の趨勢  
に鑑みて、自ら校名変更を申請したと捉えられる。なぜ  
なら、GHQ或いはGHQの意向を受けた文部省からの  
具体的指令に基づくのであれば、発給先の機関および発  
議番号が示され、それによるところであることが示され  
ていると推察される。しかるに、先の宣言文では極めて  
曖昧な表現となっている。こうした表現は、この時期国  
士館と同様に校名変更を申請した拓殖専門学校（紅陵專  
門学校に改称、現拓殖大学）の申請（一九四六年一月  
二五日）にも表れている。

時勢ノ変化ニ伴ヒ学科課程ノ内容ニ改善ヲ行ヒ是ニ  
即応スルタメ校名ヲ変更セントスルモノナリ<sup>6</sup>

しかしながら、GHQの意向を察するに、文部省にお  
いても国家主義的イメージをもたれる校名の存続は指導  
対象ならざるをえない。さすれば、少なくとも「指令」  
はなくとも「指導」はあった筈と解釈される。「指導」  
のもとに自主的な校名変更がなされたと考えるのが妥当  
であろう。後年の史料からもそれを窺わせるものがある。

例えば、一九五二（昭和二七）年五月「国士館再建趣意書」には「敗戦後の外国占領下、当局の勧告により一時「至徳学園」と改称した」とある。また、同年六月「国士館発展企画案」では「文部省の改名忠告により礼記の「聖人至徳」に則り至徳学園と変えました」と当時の状況を説明している。

### 3 寄附行為・学則の変更

#### ① 寄附行為

また、校名変更の申請と同時に寄附行為変更の申請（一九四五年二月二〇日申請、翌四六年一月一日認可）も行っている。その理由は次のように記されている。

ポツダム宣言受諾ノ大詔ヲ拝承シ茲ニ乾坤一転平和主義新日本建設ノ機運ニ際会シタルヲ以テ新酒新囊ノ古訓ニ則リ財団法人国士館ヲ財団法人至徳学園ト名称変更スルト共ニ其ノ機構ニ新時代即応ノ措置ヲ採ラントスルモノナリ<sup>9</sup>

すなわち「平和主義新日本建設」のため、新時代へ即応するためとしている。それゆえ財団の目的を示した寄附行為第一条も「国士タル国家有為ノ人材ヲ養成スル教

育並ニ其ノ施設ヲ為ス」から「至徳ヲ涵養シ以テ道義日本ヲ建設シ世界平和ト進運トニ貢献スル有為ノ人材ヲ養成スル教育並ニ一般公民教育ニ必要ナル施設ヲ為ス」に改められている。しかしながら、それ以外の条文については大きな変更は加えられていない。要するに、校名の変更にあつたような国家主義的要素を含んだようにうけとられる表現を変更すれば問題はなく、それまでの寄附行為自体は新たな教育制度のもとでも概ね引き継げるものであつたことを示している。

#### ② 学則

併せて、一九四六（昭和二一）年三月には学則変更も申請している<sup>10</sup>。変更理由は「寄附行為（設立者財団法人至徳学園）並ニ校名変更ニ依ル改正」「武道廃止ニ伴フ学科課程ノ改正」「授業料及入学金等ノ増額」としている。具体的には、旧学則の、第一〜五・八・一三・二四・二七・二八・三〇条が改定されている。そのうち大きく改正された条目をみていくことにする。

まずは教育目的について、第一条では「修文練武ニ依リ殉国ノ精神ヲ涵養シ」を「智徳勤勞ノ精神ヲ涵養シ」と変更しているものの、従来よりの目的である「中等教員ヲ養成スルヲ目的トス」はそのままである。これについても寄附行為同様、表現の問題であつて根源的変更で

はない。

対して、根源的な変更が求められたのが、武道教育廃止に伴う学科編成およびカリキュラムについてである。

第二条は、「本校二剣道科柔道科弓道科及研究ヲ置キ各科ノ専攻ヲ分チテ国語地理歴史トス」から「本校二本科学科ノ専攻ヲ置ク各科ノ専攻ヲ分チテ国語地理歴史トス」と変更されている。

歴史を翻ると、国士館専門学校は、一九二九（昭和四）年、国漢剣道科・国漢柔道科の四年制の専門学校として創設された。教育目的の柱は、国語・漢文・武道の中等教員養成であった。その後、一九三九（昭和一四）年、既科を武道国漢科に改組し、興亜科を増設。一九四二（昭和一七）年、武道地歴科を増設。そして、一九四四（昭和一九）年、学科を剣道科・柔道科・弓道科に、専攻を国語・地理・歴史（三年制）に改組となった。

【表1】がそのカリキュラムである。科目は共通科目と専攻科目とに分かれている。共通科目は、武道についての理論や歴史、体育教育に伴う理論・衛生・救護・行政等であり、全学生必修であった。対して、専攻科目は国語・地理・歴史の内、何れか一つを選択した。それゆえ「剣道科国語専攻」とか「柔道科地理専攻」といったかたちをとった。ここで注目すべきは、元来、国士館では、

国漢と武道を学ぶスタイルであったのが、数度の改組を経た結果、創設以来の柱の一つであった「国漢」を専攻しないケースを生じたのである。これは、「国漢」の軽視ではなく、昭和一〇年代には、武道教育において「東の国士館、西の武専（大日本武徳会武道専門学校）」と評されており、武道により力が入ってきたことによるものであろう。

一方、【表2】は改正後のカリキュラムである。最も顕著な違いは、旧カリキュラムにあった共通科目が武道教育のための必修科目であったため、必然的に除外され、授業時数が大幅に減少したことにある。そして、各科の専攻であった国語・地理・歴史が、それぞれ科名となっている。

国語科・地理科・歴史科の教授時数は何れも同数であるが、国語科の講読科目は講読テーマが具体的に示されており、単独の科となったことや専門学校創設時より続く専攻であることから、充実した感がある。また、各科それぞれに「教育学教授法」が設けられているが、国語科においては、さらに教授法を学ぶ科目として「国語学教授演習」が加えられている。

他方、一九四二年の改組において、必修科目から外されてきた「英語」が各科にあり、毎週授業時数も各六時

間と多くを割いている。また、一九四五年一二月に校長に就任することになる鮎澤巖いわが社会学の国際的権威でもあり、教授も行ったことから、「米国憲法」「社会学」「社会立法」「Elocution」といった科目が設けられた。

入学定員については、「剣道科一〇〇名柔道科八五名弓道科十五名」を「国語科一〇〇名地理科五〇名歴史科五〇名」と改正している（第三条）。入学定員は全体で二〇〇名と変わらずであるが、各科の定員を比較するに、地理科・歴史科が共に五〇名であるのに対して、国語科のみは倍の一〇〇名としており、国語科を中心とした教育体制を採っていたことがわかる。

寄宿舎のあり方についても大きな改正があった。戦前の国士館専門学校は、全寮制を採っていたため、学則にも「生徒ハ本校寄宿舎ニ入舎スルモノトス」（第三条）と明記していた。しかし改正後は「入舎スルヲ原則トス」と緩めた表現を使っており、事実上、通学が可となった。その要因は、戦災で多くの建物を失ってしまった物理的現状が大きかったものと思われる。

総じて、教育としての武道が禁止されたことにより、全国的にも有数であった武道教員の養成は不可能になったが、専門学校創設時よりの「中等教員」の養成については、ぶれることなく新規各科に引き継がれた。そして

短期的には、戦災にあった校地の復旧を迅速に取り計らうと共に新たな教育制度に沿った体制を整えることに主眼が置かれていたといえよう。

#### 4 校長の交代

この時期アメリカは、日本人を戦争へと駆り立てた背景の多くは教育にあったとしてGHQを通じて、日本の国家主義的教育を民主的教育に改める基本方針を示した。その中には、軍国主義を支えた教育指導者などを解職するという、公職追放の嵐が教育界にも巻き起こっていた。

また、教育民主化の影響は、校名や寄附行為にもおよび、先に見てきたように、国士館では、一九四五年一月二〇日、法人名改称と寄附行為改正を申請し、校名を「至徳学園」に改称した。そして同日には、CIE（民間情報教育局）局長代理ニューゼント、青年部長ダーギンなどの立会のもと、大講堂内に学生・生徒を集めて国士館専門学校校長交代式が執り行われた。この時、柴田徳次郎に代わって校長となったのが鮎澤巖である。柴田には、翌四六年三月、公職追放が適用されており、それに先立っての人事であった。

鮎澤は、一八九四（明治二七）年生まれ。私立芝中学



校を卒業後アメリカに留学し、コロンビア大学大学院などで学び、国際労働立法論で博士号を取得。その後ILO（国際労働機関）に勤務し、優れた語学力（英・仏・独）とアメリカで培われた学識と卓見で、先駆的国際人として活躍していた<sup>11</sup>。

戦後、柴田は公職を追われた時期、鶴川で農事に勤んでいる。その鶴川に中学校時代からの親友であった鮎澤を招いたことで再会し、学校長としての職務遂行が困難な立場にあった柴田に代わって、鮎澤がその任を引き受けたのである。これは思想・信条ではなく、あくまで二人の友情から生まれたものであった。

校長となった鮎澤は、この後三年半、戦後の混乱した難局を自身の卓越した語学力をもって、GHQの意向を正確に読み取って学園を守り、教育の改革期に至徳学園を牽引したのである。

校舎の再建にあたっては、一九四七（昭和二二）年から私立学校建物被災復旧文部省貸付金を得て、環境整備を迅速に進めた。

また、一九四七年三月の「教育基本法」「学校教育法」に基づき、同年四月、新制の至徳中学校を設立し、さらに、翌年四月に至徳高等学校を設置した。

## 二 飯塚新吾寄贈資料にみる学内状況

以上のような趨勢の中、実際の学内状況は如何なるものであったのであろうか。周知の通り、この時期はまさに戦後の混乱期であり、事実を導き出す史料が極めて少ないのが現状である。しかるに、国士館においては、幸いにも当時、至徳専門学校在籍していたOB飯塚新吾氏から、学友との間で取り交わされた書簡等の貴重な史料の寄贈を受けた。そこには当時の学内の様子が如実に顕されており、当時を物語る第一級の史料であった。

寄贈資料の内訳は、学友等からの便り（一九四五～六四年、主に一九四九年まで、葉書一六八通、書簡四六通）、受験票、合格通知、入学許可証、成績優等賞状、卒業アルバム等、計二一九点である。

飯塚新吾氏は、一九四五年三月、静岡県立島田商業学校（現静岡県立島田商業高等学校）を卒業し、同年四月、国士館専門学校（柔道科地理専攻）に入学。商業学校が四年で繰上卒業となったため、当時満一七歳であった。そして、世田谷の地において終戦をむかえる。学校からは、学生・生徒に対し、戻れる者は帰郷し、その後の連絡を待つようにとの指示がなされた。それにより飯塚氏



は帰郷し、母校の小学校で代用教員を務めることとなった。その後、一九四七年四月に至り、国語科で復学し、一九四九（昭和二四）年三月、至徳専門学校国語科（専門学校第一七期生）を卒業され、その後は地元において製茶販売業（兼農業）を営まれている。学友との葉書・書簡によるやりとりは、終戦後実家に戻られてから、専門学校卒業に至るまでのものが大半であった。

以下では、飯塚新吾氏による寄贈資料に基づいて、当時の学内状況を明らかにしていくことにする。但し、書類の差し出し名等については、プライバシー等の観点から伏せることとする。

### 1 授業再開への道のり

一九四五年四月、飯塚氏のもとへ国士館専門学校から「入学許可証」が届いた。そこには「入学式日、始業日ハ追テ通知ス」とある。それをうけて同年六月一七日（消印）「入校通知」が送付されるに至る。そこには「六月二十五日より入寮許可」「七月一日入学式」と記されている。時期的には、まさに終戦直前ではあるが、学校の対応としては、学業の継続を図らんとしていたことがわかる。

しかしながら、実際には、前年三月に政府が「決戦教

育措置要綱」を決定して、四月一日以降の授業は停止されていた<sup>(14)</sup>。そうした事情もあつたことから、終戦後、学校からは、学生・生徒に対し、戻れる者は帰郷し、その後の連絡を待つようにとの指示がなされた。

学校側としては勿論、文部省としてもできるだけ速やかな授業の再開は急務としたことから、終戦間もない八月二八日には、次官通達「時局ノ変転ニ伴フ学校教育ニ関スル件」（專一一八号）を各地方長官・各学校長宛に発している。

学校（女子ノ学校ヲ含ム）ノ授業ノ実施ニ付テハ平常ノ教科教授ニ復原スル様措置スルコト、学生生徒ヲ帰省セシメタル学校ニ在リテモ遅クモ九月中旬ヨリ右ニ依リ授業ヲ開始スルコト<sup>(15)</sup>

とは言え、終戦直後の混乱期でもあり、各学校それぞれ事情は異なっている。

日本大学においては、戦争終息とほぼ同時に授業再開を決定し、九月二八日には新学期を開始している<sup>(16)</sup>。中央大学においては、東京駿河台地域の建物と中央大学校舎が戦災を免れたこともあり、九月一日にはいち早く授業再開となった<sup>(17)</sup>。このように早期に授業再開に至った事

例があるのに対して、駒澤大学のように、終戦の年は学生募集を行わず、授業休止としたケースもある。<sup>18)</sup>

それでは、国土館についてみていこう。終戦から二か月を経た一〇月一九日に至り、帰郷していた飯塚氏の元へ、東京に残った学友から書簡が届いた。

飯塚君御元気ですか。小生も頗る元気で学業に励んで居ります。火曜日、朝より、ストライキをやり、大した事に至らず、木曜日、館長より我々の要求条件を入れると言われ本日より授業を開始して居ります。

条件は

一、全寮制度廃止となり通学自由となりました  
一、寮は自治制となり、食堂も学生の管理となりました

一、服装は自由、和服は不可、角帽着用

一、作業は原則として土、日、は休み

およそ此のやうなものです。そして学生の人格尊重も受入れられました。そして今日は洋服の配給券当り君の分も小生が拇印を押して提出して居きました<sup>19)</sup>がよく考へた上、上京して下さい。

要するに、授業開始に先だつて、学生によるストライキをとまなう要求申し入れがあつたことが記されている。結果、通学の許可、寮は学生による自治制、服装の自由化、土日は作業日とせず、といった要求が受け入れられ、一九四五年一〇月一八日より授業が再開されたといふ。

文面からは、学生ストライキが実を結び、要求が受け入れられたようにもとれるが、全寮制も校舎等の焼失により事実上不可能であつたことや、服装の件も所謂「民主化」によるところもあり、学校側と学生の間で激しいやりとりがあつてのことではないように思われる。

また、同じく東京に残つた別の学友からの書簡(同月二五日付)からも学内の具体的様子を知ることができる。

拝復御手紙拝見致シマシタ。飯塚君朝夕全ク涼シサヲ増シテ来マシタネ。貴君ニハ帰省以来元氣ニテ御父様御母サンノ膝下ニテ本当ニ楽シイ事ト御推察致シテ居リマシタガ矢張り楽シソウデスネ。

降ツテ私オ陰様ニテ毎日元氣良ク通学致シテ居リマスカラ御安心下サイ。今後学校ガ如何ニ転ズルカト云フコトデスネ。ダレ人モ皆其ノ事ニ非常ナル感ヲ強ク持ツテ居リマシタガ現在迄ニ解カレタル処ヲ

才知らセ致シマス。大体ニ於テ校長ハ天下ノ国士館トシテ続行スルト云フ事ヲ熱演シテ居リマス。通学ガ全般的ニ許可サレルコトニナリマシタ。ソレカラ柔道モ随意科ト云フ様ニナリマシタ自修寮ガ現在専門ノ教室ニナリ、一年国語科、二年国語科、一年地理科ト云フ様ニ別々ニ勉強スル様ニナリマシタ。柔道ハ月水金ノ后後稽古ヲナスコトニナリマシタ。水木ノ后後森田先生ヨリ経済学ノ講義ガ行ナワレマス。専門ノ生徒モ段々増シテ来マシタ。(中略)ソレカラ食堂ノコトデスガ来月カラ外食ニナルヨウナコトライツテ居リマス。コンド食堂ヲ続ケルトスレバ例ノ一件デ生徒ガ自治的ニ食堂ノ方モヤルノダソウデス。ソレダカラ外食ニナルコト私モ信ジテ居リマス。皆食事が相変ズ少ナイノデコマツテキマス。現在食堂ノ食事ハ大豆ハハイツテ居リマセン。専門ノ時間表モ亦変ルソウデス。先生方モ二三新ラシイノガ見エマシタ。十一月頃ヨリ本格的ニ勉強ガ始マル様デス。学生ガストライキノマネゴトヲシタノデ大変学校デモ変ツテ来マシタ。今度ハ以前ヨリ良クナルコトト信ジテ居リマス。<sup>20)</sup>

一九四五年一〇月の時点では、校名は「国士館」、校

長は柴田徳次郎である。「校長ハ天下ノ国士館トシテ続行スルト云フ事ヲ熱演」していたというが、戦後の教育改革の流れに沿うようなかたちで、すでに通学の許可や柔道を随意科にするなどの措置がとられ、文部省へ正式に申請をする同年一二月以前に改善措置がなされていたことがわかる。また、学科についても同様で「国語科」「地理科」といった枠組みに変えている。他方、学生が自治的に運営することとなった食堂は、終戦直後でもあり、厳しい状況であったことが窺える。

ここで一つ疑問が生じる記載がある。先にみてきたように、武道教育については完全に禁止されていく過程にあるのだが、「随意科」として存在しており、「柔道ハ月水金ノ后後稽古ヲナスコトニナリマシタ」とある。この点については、また別の学友からの書簡がその謎を解き明かしてくれた。

## 2 武道教育と武道の稽古

一九四六年になると飯塚氏は復学に向けて一時上京している。その飯塚氏に同年二月一日付で静岡に在った学友から葉書が届いている。

御手紙有難う。貴君も益々頑健にて、勉学の由、何

よりです。自分も其の後少しの変化ありません。学校も全員通学との事、以前とは大変面白い事と思ひます。二年の連中では誰々が登校して居りますか、先生方にも少しは変化がありますか、地理科の授業は、又柔道の方は、講道館では練習をやっておりますか：昨日、静岡の警察署で柔道の昇段試験があり、自分も、岡野も、出ました。二段を取りに来た者の受掛です。簡単なものです。鈴木昭二君も来ました。藤枝署で練習をやっております。ではこれにて失礼。<sup>(2)</sup>

学友の近況報告には「静岡の警察署で柔道の昇段試験があり、自分も、岡野も、出ました。二段を取りに来た者の受掛です」とあり、警察署で柔道の昇段試験に臨んだ旨が記されている。

また、同時期に届いた別の学友からの書簡でも、

前略 手紙ありがたう

元気な由何より結構

御蔭で俺も元気。廿日上京しやうと思つてゐる。学校へは一日から出やうと思ふ。十四日に岡野氏が家へきて呉れて、二人で警察へ柔道をやりに行った。

岡野氏は大蝶さんに随分しほられた。江川の家は去

年の十月末一回行つたきりだ。俺も今は家で農事を手伝つてゐる。暇な時は警察へ柔道をやりにゆく。今日も行ったが暗くなるまで大蝶さんの御話を聞いた。

暇だつたら家へも遊びにきて呉れ<sup>(2)</sup>

とあり、警察へ柔道の稽古のため訪れていることがわかる。

他校の事例からも同様の様子が伝わっている。慶應義塾柔道部OB会柔友会名誉会長を務めた水谷英男氏の話によれば、「終戦後、大学に戻り柔道部に復部したものの、年末にマッカーサー指令で学生柔道が禁止されたため部活動も休止」とされたが、仲間と三田や高輪警察署、済寧館、警視庁、講道館と転々として稽古を続けたという。<sup>(2)</sup>

すなわち、学校での正規科目や部活動としての武道は禁止だが、然るべき場所においての武道の昇進試験や稽古は日常的に行われていたのである。また、先に「随意科」目としていた点については、武道教育の完全禁止を目前にして、その範疇から外すことを念頭に置いての措置であろう。

その後、学校体育としての武道が復活するのは、そう

遠い時期ではない。当初、戦闘精神を鼓舞したとして、武道を忌み嫌っていたGHQも、雨の多い日本、特に雪が多く野外スポーツができない北国では便利なスポーツであること、老若を問わず楽しめるスポーツであること、戦時中は軍国主義・超国家主義的目的で悪用されたにすぎないといった声にも耳を傾けるようになり、一九五〇（昭和二五）年、文部大臣による正式要請もあり、まずは柔道が学校体育として復活し、その後、弓道、剣道の順で続いていくことになる。<sup>(2)</sup>

### 3 学内の安定化

一九四六年、上京前の飯塚氏へ届いたのは、同氏の復学を望む学友からの葉書であった。

拝啓、君と上京再会を期しつゝ、との君からの便りを、故郷島根にて受け取り返事を出すべきだったが選挙運動をやつて居たので終に故郷から便りを出す事も出来なかつた宥して呉れ：然し去る十五日上京以来再会を待ちつゝ、今日に過ぎして来たが昨日萩原から聞けば君は代教をやつてるよし、だから僕が如何に待つても上京しないはずだ？いづれか君の信念は君より聞かねば不明だが僕としては復校を望む

よ。成る程校舎はあんな焼け残りだが講義は実に充実して来新校長鮎澤博士の講義は名講義だ担当は社会学だ出来れば帰校を待つ<sup>(3)</sup>。

復学を望む学友からは「成る程校舎はあんな焼け残りだが講義は実に充実して」いる旨が記され、少しずつではあるが、徐々に落ち着きを取り戻してきている様子が窺える。

その後、復学を決意した飯塚氏の元に届いた書簡（一九四六年三月二二日消印）には、学内行事の日程等も記された詳細な様子が書き送られてきている。

拝復御手紙有難く拝見致しました。（三月二十一日 后前十一時着信）自然は春の趣を感じさせる候となり活動の時期吾々青年の春は又再び来ました。貴兄には向学の心やみ難く又帰校して、勉学との事御喜び申し上げます。啓司長々の御無音御許容願ひます。扱て、小生の事少しお話致しませう。一月二十日ヨリ三月八日迄三学期の授業有り、（三月三日ヨリ八日まで試験）終つて、春休みとなり四月十五日、新学年の始業式が有るのです。現在、私し、少々勉学致して居りますので、種々様々の事を書き知らせ

てやりたいのですが何にを書いてよいのか書く事が出来ません。啓司も今希望に向つて唯々勉学に励んで居ります。新学期始業式は四月十五日です。今日三月二十一日三年生四年生の榮ある卒業式です。貴兄が新学期に来てからお話致す事にします。吾が校は、国語科だけが充実してゐて、無試験にて、中等

学校の先生たり得る資格が得られるのです。新学期貴兄には如何なる方か地理か、歴史か、国語科か、言ふまでもなく吾々は中学の先生になるのではないから学問は自分の好きな学問をなすのが一番良いものです。然し学ぶ以上は、充実して競争して勉強した方が面白いですね。では又面会の節お話し致します。お父母様始め皆様方に宜敷くお願ひ致します。

まずは、学内行事の日程について、一月二〇日～三月八日が三学期で、その内試験期間が三月三日～八日。その後春季休業となり、翌四月一五日が新学期の始業式とある。また、前年度の卒業式は三月二一日に挙行された旨が記されている。こうした様子からも学園が本来のあり方になってきたことがわかる。

しかしながら「国語科だけが充実してゐて」とあるよ

うに、国士館元来のすがたであつた国漢と武道の両学が、武道教育の禁止を受けてのカリキュラム編成となつたがため、伝統ある国漢教育に比べ、単独の科となつた地理と歴史はやや物足りない感は否めなかつたのであろう。この点については、先にみた新旧カリキュラムの比較でも指摘したところである。

以上の経緯から、校名変更、寄附行為・学期の改正、校長の交代など終戦直後の混乱期にあつた危機を乗り越え、ともかくも学園存続の道は途絶えることなく繋がつたのである。

## おわりに

おわりに、ここまでで明らかにし得た事項を確認すると共に、その後の展望を述べて本稿を閉めることとしたい。

まず、校名の変更については、GHQの意向を察した文部省の指導を受けて、文書による指令を受ける以前に自ら先んじて申請を行ったと思われる。先に示した如く、申請の文言のなかに、正式な指令があつたことを示す文言、すなわち発給先の機関および発議番号によることを示した文言がなく、時代の趨勢に鑑みたとするようない



一般的な表現での申請文となっていたことから、そう結論づけた。しかしながら、占領期の実態の多くを知ることの出来るGHQ/SCAP文書をみたくうえでの結論ではないため、これについては今後の課題としたい。

寄附行為については、第一条（財団の目的）に大きな変更を加えた。「国士」の文言を削除し、財団の目指すところを「平和主義新日本建設」のため、新時代への即応のためとした。しかしながら、それ以外の条文については大きな変更は加えられていない。要するに、校名の変更でもあったような国家主義的要素を含むと捉えられかねない表現を変更すれば問題はなく、それまでの寄附行為自体は新たな教育制度のもとでも概ね引き継げるものであった。

一方、学則は、武道教育の禁止に伴う大幅なカリキュラム改正が行われた。戦前においては、本科を剣道科・柔道科・弓道科とし、国語・地理・歴史のうち何れか一つを選択専攻するあり方であった。それが武道教育の禁止に伴い改正され、本科が国語科・地理科・歴史科となった。このため国士館伝統の武道教育は途絶え、復活は一九五六（昭和三一）年の国士館短期大学体育科の創設まで俟つこととなった。また、新設の地理科・歴史科は、旧来の専攻が格上げされたかたちであり、専攻とし

て採り入れたのも一九四四年と歴史が浅かったこともあり、カリキュラム内容においても、また、実際においても、国士館創設期よりあった国漢に比べ充実度は低かったと考えられる。

学内状況については、飯塚新吾氏が学友と取り交わした書簡類によって明らかにできた。終戦直後の混乱期ではあったが、授業の再開は思いの外早く、一九四五年一月一九日で、それに先立ち、同年一月一六日（一八日）にかけて学生による要求受け入れを求めるストライキ的な動きがあった。そうした経緯もあり、通学の許可、学生による食堂の運営等が認可された。そして、翌四六年頃から徐々に落ち着きを取り戻し、一九四七年には学期末試験や卒業式等も従来あったような日程で執行われている。また、武道については、正規科目からは外されたが、昇段試験や稽古そのものは、警察署等然るべき場所では常時行われており、教育としての武道は禁止されていたが、武道全般が禁止されたわけではないことも確認できた。

以上のようなかたちで、終戦直後の危機的状況を脱し、学園の存続を果たしたのであったが、大きな問題が残った。

GHQが目指す学校教育体系は、学力や社会階層の違



いによって中等教育機関が複数に分岐する（ヨーロッパ的）複線型学校体系ではなく、全ての児童・生徒がともに階段を上がるように進学していく（アメリカ的）単線型学校体系であり、複線化を意味する専門学校は廃止されるべきものとされたのである。その意図するところは、色々な進路に分かれる複線型はエリートを養成するもの。エリートが国を誤らせたのだから、この誤りを繰り返さないため、というものであった。<sup>(25)</sup>かくして、存続への選択肢としては、新制大学への転換を図るか、アメリカのジュニアカレッジのような二年制の大学を目指すかの二つに一つであった。至徳学園では、後者を選択し、短期大学の創設を目指して動いていくことになる。結果、一九五三（昭和二八）年四月の国士館短期大学国文科・経済科二部（二年制）の創設に結実する。

但し、当初より短期大学の創設のみを視野に入れていた訳ではなく、一九四九（昭和二四）年に公布された「私立学校法」に基づき大学創設を目指したが、資金難等から難航。しかし、一九五一（昭和二六）年一月の「国士館再興の会」発足を契機に体制を再構築し、翌五二年五月には「国士館再興会議」と改称し、同時に「国士館再建趣意書」を発表した。この趣意書によれば、占領政策の終結と同時に国士館の名称に復し、将来日本国家に

有為な人材輩出と、このために伝統の武道教育を活かすこととする教育方針を示した。また、同年四月には柴田徳次郎の公職追放が解除され、理事に就任し新たな体制を整えた。これを受けて、同年六月二十五日には「国士館発展企画案」を発表し、「商経大学部（昼間四年）」の創設と「国語短期大学（夜間二年）」の併設を構想した。

整理してみると、一九四九年の「私立学校法」に基づき大学創設を目指し、復活を求めたのが、伝統の武道教育であり、新たに構想されたのが商経大学部であった。

武道教育の復活は、一九五六年国士館短期大学への体育科の増設、そして、一九五八（昭和三三）年の国士館大学体育学部の創設で結実する。一方、商経大学部（昼間四年）構想は、一九五三年の国士館短期大学経済科（二部）創設を端緒とし、一九六一（昭和三六）年の政経学部設置を以て現実となった。

こうして戦前の専門学校時代よりの国漢・武道の両学は保たれるかたちとなったが、総合大学の第一歩となった政経学部設置を契機に、それまで教員養成を第一義的に掲げてきたかたちに変化が顕れている。

一九五七（昭和三二）年九月「国士館大学体育学部設置認可申請趣旨<sup>(26)</sup>」では、

新に国士館大学を設置し体育学部として、人格涵養の点で、実力の点で、且つ指導力の点で一層の充実を図りたく、且つ又中学校高等学校に於ける体育科有資格者教員の甚大な需要、要求に応じ特に有資格者、武道指導者の需要緩和に寄与したく以て新日本の要求する「健全なる身体、健全なる精神」の新国民錬成を目標として国士館大学体育学部設置認可の申請に及んだ次第であります。

とし、「体育科有資格者教員の甚大な需要」に應えることを旨としているのに対して、一九六〇（昭和三五）年九月「国士館大学政経学部増設認可申請趣意書」<sup>29</sup>では、その目的を、

日本の歴史と伝統に基礎を置き、而も国際的な視野に立って、西欧の学説を批判検討しつつ、日本の再建に役立つ有為な青年の育成道場として、特色のある政経学部を創設することに決意致したのであります。

としている。勿論一般的にも政経学部は教員養成を主とする学部ではないが、総合大学への過程において、教員

養成中心から、より幅の広い教育目的に移行したのである。

以上、終戦直後の国士館の学内状況の解明に加え、その後の展望を示したが、何れも未だ一面的な分析である。今後は、より多面的な視点をもって国士館の戦後史に取り組んでいきたい。とくに、今回全く触れることの出来なかつた戦災復興のための資金調達の実態とそれに伴う理事会の動向については他日に期したい。

#### 註

〔1〕『日本占領重要文書』第1巻、日本図書センター、一九八九年、一〇頁。

〔2〕『日本占領重要文書』第1巻、日本図書センター、一九八九年、一三四頁。

〔3〕『終戦教育事務処理提要』第一輯、文部大臣官房文書課、一九四五年、一九五〇二〇三頁。

〔4〕命名者は国士館顧問徳富蘇峰（猪一郎）と言われているが、確かなところは解っていない。

〔5〕国立公文書館所蔵「一九四五年一月 国士館専門学  
校名称認可書」。

〔6〕『拓殖大学百年史』資料編一、学校法人拓殖大学、二〇〇三年、三九九頁。

- (7) 国士館史資料室所蔵法人記録史料四四八八。  
八三年、四三二頁。
- (8) 国士館史資料室所蔵法人記録史料六九三。
- (9) 国立公文書館所蔵「一九四六年一月 財団法人国士館寄附行為変更認可書」。
- (10) 国立公文書館所蔵「一九四六年三月 至徳専門学校 学則変更認可書」。
- (11) 鮎澤の履歴については、拙稿「国士館を支えた人々 鮎澤巖」『国士館史研究年報—楓原—』第三号、二〇一二年、を参照されたい。
- (12) 飯塚新吾寄贈資料「一九四五年三月三十一日 国士館 専門学校入学許可証」。
- (13) 飯塚新吾寄贈資料「一九四五年六月一七日消印 国士館専門学校入校通知速達葉書」。
- (14) 宮原誠一ほか編『資料日本現代教育史』4、三省堂、一九七四年、三三八〜三三九頁。
- (15) 『終戦教育事務処理提要』第一輯、文部大臣官房文書課、一九四五年、七〇頁。
- (16) 『日本大学百年史』第三卷、学校法人日本大学、二〇〇二年、二〇頁。
- (17) 『中央大学百年史』通史編 下巻、学校法人中央大学、二〇〇三年、一五五頁。
- (18) 『駒沢大学百年史』上巻、学校法人駒沢大学、一九八三年、四三二頁。
- (19) 飯塚新吾寄贈資料「一九四五年一〇月一九日 飯塚新吾宛書簡」。
- (20) 飯塚新吾寄贈資料「一九四五年一〇月二五日 飯塚新吾宛書簡」。
- (21) 飯塚新吾寄贈資料「一九四六年二月一日 飯塚新吾宛葉書」。
- (22) 飯塚新吾寄贈資料「一九四六年月日不詳 飯塚新吾宛書簡」。
- (23) インタビュー「人生と武道」『武道』三四〇号、日本武道館、一九九五年、一八頁。
- (24) 山本礼子『米国対日占領政策と武道教育』日本図書センター、二〇〇三年、六五〜七八頁。
- (25) 飯塚新吾寄贈資料「一九四六年月日不詳 飯塚新吾宛葉書」。
- (26) 飯塚新吾寄贈資料「一九四六年三月二二日消印 飯塚新吾宛書簡」。
- (27) 土持ゲーリー法一『新制大学の誕生—戦後私立大学政策の展開—』玉川大学出版部、一九九六年、五七頁。
- (28) 国立公文書館所蔵。
- (29) 同前。

【表1】国士館専門学校学科及其程度（二九四四年）

共通科目	每週教授時数		
	第一学年	第二学年	第三学年
道義	二	二	二
国体	(二)		
国民道德		(二)	
公民			(二)
教育		二	二
青年心理学	(二)		
学校衛生			
教育史		(二)	
教授法			(二)
武道			
体育理論	一五	一八	一八
武道	(一二)	(一二)	(一二)
武道理論	(二)	(二)	(二)
武道史	(一)	(一)	(一)
衛生		(一)	
衛生		(一)	
救急看護		(一)	
体育行政			(一)
体練	(七)	(四)	(四)
体練	二	二	二
計	二八	二八	二八

国語専攻	国語・購読		
	第一学年	第二学年	第三学年
国語・購読	六	五	五
国文学・国文学史	一	二	
国語学・国語学史	一	一	一
国文法	一	一	
話方及作文	一	一	
漢文購読	五	五	五
漢文学・漢文学史	一	一	
漢文法・及漢作文	一	一	二
演習			
国史		二	
大東亞史		二	
有職故実			二
合計	四九	四九	四九

終戦直後の国士館について

合計	米史	大東史	国史	史学概論	演習	地理実習	地図研究	郷土地理	地球海洋学	欧亜米	大東	日本誌	地民	資源産業交通	政治国防	地理通論	気候	地質	地形	地理基礎論	地理思想発達史	地理専攻	
																						科目	学年
四九	二		二	二	二		二	二			(二)	(三)	五	(二)		二			(二)	二		第一学年	
四九	二	三	二		二	二				(二)	(三)	(二)	七	(二)	(一)	三		(二)		二		第二学年	
四九	二	三			四		二			(三)			三	(三)	五	(二)				二	二	第三学年	

合計	地誌	通論	地理	国語及漢文	演習	古文書学	考古学	欧米史	大東史	国史	史学概論	歴史専攻	
												科目	学年
四九	二	二				二		三	四	四	二	第一学年	
四九	二	二	二			二	二	三	四	四		第二学年	
四八	二	二				六		四	四	四		第三学年	

【表2】至徳専門学校学科及其程度（一九四六年）

国語科授業課程表

合 計	体 操	Elocution	社 会 学	法 制 經 濟	哲 学 倫 理	修 身	外 國 語	歷 史	教 育 心 理	漢 文	国 語	課 目	学 年
												第一学年	第二学年
			社 会 学	經 濟 学 原 論		論 理 学 概 論	英 語	国 史	心 理 学	漢 文 法 及 漢 作 文 史 記 子 語 讀	講 國 文 法 学 史 及 概 說 文 草 讀	講 古 今 語 集 讀	第一学年
三三			五				六	二	二		一 八	時 数	每 週 教 授
			社 会 立 法	米 國 憲 法	論 理 学	東 洋 倫 理	英 語	東 洋 史	教 育 史	支 那 文 学 史 概 說 古 文 選 傳 寶	講 國 文 法 及 概 說 文 說	講 新 古 今 語 集 讀	第二学年
三三			六				六	二	二		一 七	時 数	每 週 教 授
			社 会 政 策	經 濟 政 策	哲 学	西 洋 倫 理	英 語	西 洋 史	教 育 学 教 授 法	漢 文 教 授 演 習 支 那 文 学 概 論 書 經 子 讀	講 國 語 教 授 演 習	講 萬 葉 集 讀	第三学年
三三			六				六	二	二		一 七	時 数	每 週 教 授

合計	体操	Elocution	社会学	法制経済	哲学倫理	修身	外国語	地理	教育心理	歴史	課目/学年	
											第一学年	第二学年
			社会学	経済学原論		論理学概論	英語	地理基礎論	心理學	東西国史概論 西洋史 演習(東洋史)	第一学年	
三三			五				六	二	二	一八	時教授	每週
			社会立法	米國憲法	論理學	東洋倫理	英語	地理通論	教育史	東西国古史 西洋史 演習(國史)	第二学年	
三三			六				六	二	二	一七	時教授	每週
			社会政策	經濟政策	哲學	西洋倫理	英語	地誌	教育学教授法	東西国古文書 西洋史 演習(西洋史)	第三学年	
三三			六				六	二	二	一七	時教授	每週

歴史科授業課程表



合 計	体 操	Elocution	社会 学	法 制 經 濟	哲 学 論 理	修 身	外 國 語	歷 史	教 育 心 理	地 理	課目 / 学年	
											第一学年	第二学年
			社 会 学	經 濟 学 原 論		論 理 学 概 論	英 語	國 史	心 理 学	演 習 地 球 海 洋 地 誌 （ 亞 細 亞 本 土 ） 通 論 資 源 產 業 交 通 地 理 基 礎 論 （ 地 形 ） 地 理 思 想 發 達 史	第一学年	
三 三 三			五				六	二	二	一 八	每 週 教 授 時 數	地 理 科 授 業 課 程 表
			社 会 立 法	米 國 憲 法	論 理 学	東 洋 倫 理	英 語	東 洋 史	教 育 史	演 習 地 誌 （ 亞 細 亞 本 土 ） 通 論 資 源 產 業 交 通 地 理 基 礎 論 （ 地 質 ）	第二学年	
三 三 三			六				六	二	二	一 七	每 週 教 授 時 數	
			社 会 政 策	經 濟 政 策	哲 学	西 洋 倫 理	英 語	西 洋 史	教 育 学 教 授 法	演 習 地 圖 研 究 地 誌 （ 歐 亞 米 ） 通 論 （ 民 族 ） 地 理 基 礎 論 （ 氣 候 ）	第三学年	
三 三 三			六				六	二	二	一 七	每 週 教 授 時 數	

研究ノート

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

— 旧学制下における国士館中学校について —

山崎 真之



はじめに

筆者は現在、国士館百年史編纂委員会専門委員会委員の一員として、国士館の歴史にかかわる史料の収集および整理等の業務にかかわっている。本稿はそうした作業過程中でえた本年度のささやかな研究成果の一端を報告する、いわば「研究ノート」に位置づく小論である。

周知のように、それまでに蓄積されていた国士館史にかかわる研究の成果は、創立八〇周年を機に刊行された『国士館80年の歩み』（学校法人国士館、平成九年、以下、『80年史』）および創立九〇周年に刊行された『国士館九十年』（学校法人国士館、平成一九年）等に集約されたといつてよい。とりわけ『80年史』の特徴は、それまで学校種別あるいは大学の学部別等に編纂された研究

が多いなかにあつて、法人の活動等をも含めた戦前・戦後の国士館の全体像を描き出した点に求められる。くわえてその意義は丹念に調査・収集されたいわゆる「公文書」に基づきながら、戦前における国士館の教育制度を実証的に論じた点にある。なお、『80年史』はその執筆を担当された湯川次義氏がそれまでに行つた研究成果がベースとなつている。筆者の専門委員としての業務は、以上の諸研究等を基盤としながら、他方でその空白部を補完すべく現在の作業を行っている次第である。

その「空白」の一つが、本稿で試みる戦前国士館諸学校にかんする統計数値の整理である。従来<sup>①</sup>の諸研究においても、生徒数・学生数・教員数等に関連する数値は部分的にふれられている。しかし、そうした断片的な数値の紹介のみでは、その数の示す歴史の意味を正確に理解することは難しく、また関連ある数値の系統的な整理は、

戦前国士館諸学校の趨勢を鳥瞰的な視点から通覧することを読者に可能とする。そこで本稿では、明治三十七年より昭和一三年までの間、毎年定期的に刊行された文部省普通学務局『全国公立私立中学校二関スル諸調査』<sup>(3)</sup>から国士館中学校にかんする事項を抽出し、内容別に整理した統計数値を一覧として提示することを、まずは主眼とする。ついで、紙幅の許す範囲において若干の補説をくわえることとした。<sup>(4)</sup>

## 一 旧学制下における国士館中学校にかんする統計数値の一覧表

国士館における中等教育の嚆矢は、大正一二年四月に開設された「中等部」に求められる。これは昼間五年制で「四十名入学ヲ許可シ文部省規定ニ準ジ中等教育ヲ授」<sup>(5)</sup>けた、いわば私塾であった。そして開設から二年をへた大正一四年三月三〇日、国士館では中等部を母胎とした法令（「中学校令」）に基づく中学校の設立申請を東京府経由で行い、翌月八日、岡田良平文相の認可をえて、同月一〇日、国士館中学校の設置が正式に告示されている（文部省告示第二二四号）<sup>(7)</sup>。その後、同校は占領下にあつては昭和二年三月に校名を「至徳中学校」と

名称変更し、翌年四月、至徳中学校は新学制に基づく新制中学校となった。<sup>(8)</sup>

以下、本節では国士館中学校にかんする統計数値を内容別に整理して一覧として提示する（巻末）。なお、各表ともに史料上の制約から、その対象期間は同校開設の大正一四年から昭和一三年にいたる間となっている。また各表中には整合性の取れない箇所等（各数とその合計数等）も散見されたが、数値はあきらかな誤りと判断されるもの以外はそのまま原本どおりとした。これら不明な点については現在調査・整理中であり、稿をあらためて論じることとした。

## 二 補説―定員数・生徒数・学級数ならびに第一学年における志願者数・入学者数について

### (一) 定員数・生徒数・学級数について

国士館中学校開校当時（大正一四年四月）の中学校令施行規則（以下、施行規則）では、中学校一校あたりの定員数については原則「八百人以下」とし、「特別ノ事情アルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ増スコトヲ得」（同規則第二六条）ることとしていた。また、その範囲は同規則が廃止されるまで同様であった。<sup>(9)</sup> 他方、学級の

編制方法等については「一学級ハ五十人以下」とし、くわえて大正一四年時点では「第二学年以上ニ於ケル各学年ノ学級数ハ第一学年ノ学級数ニ超過スルコトヲ得ス但シ特別ノ事情ニ依リ文部大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニアラス」(同規則第二条)としていた。なお、後段の学級数の規定については昭和六年一月に行われた同規則改正時に削除されている。

さて、まずは第一表より定員数についてみれば、国士館中学校における生徒定員数は一貫して七五〇名であり、またここから施行規則の原則にしたがえば、学級数については全学年の合計で最大一五学級、すなわち一学年では三学級、生徒数一五〇名までの範囲で収容することが可能であったといえる。しかし、国士館中学校の当該期間における学級数の平均は約九学級程度にとどまり、最大時でも一四学級(昭和二年)の編制であった。また、生徒数についてみても同表から定員数に対する在籍生徒数の占める割合を算出すれば、その平均は東京府全体では約八六%(全国は約八三%)であるのに対して、国士館中学校の場合は約五三%程度であったことがわかる。したがって同表からみれば、国士館中学校における学校運営はこの間、生徒募集等にかんして厳しい状況にあったことが推察される<sup>(1)</sup>。

また、大正一五年および昭和一三年の学級編制については留意を要する。すなわち、さきに示した法令上の基準では、中学校の一学級における生徒数の範囲は五〇名以下が原則であった。しかし、大正一五年の第三学年では生徒数一〇二名に対して二学級編制(一学級の平均は五一名)、第四学年では生徒数一八〇名に対して三学級編制(一学級の平均は六〇名)となっており、昭和一三年についても第一学年の生徒数が一五九名であったのに対してその学級編制は三学級編制(一学級の平均は五三名)となっている。さらに昭和六年の施行規則改正以前においては第二学年以上における学級数は第一学年学級数の範囲以下で編制することが原則であった。しかし、国士館中学校における大正一五年の学級編制は、第一学年が二学級であるのに対して第四学年では三学級となっており、その基準を超過している。すなわち、この両年における国士館中学校の学級編制は、施行規則の定める原則に抵触していた可能性が指摘されよう。以下、この間の事情について、国立公文書館所蔵の史料に基づきながら、若干の補足をくわえてみたい。

まず、大正一五年の経緯については、「国士館中学校学級数制限超過ノ件<sup>(2)</sup>」と題する史料によってその事情を窺い知ることができる。これは大正一五年九月に国士館

から提出された「学級編制変更願」とともに綴られており、その内容は左のとおりであった。

学級編制変更願

当校御許可生徒定員数ハ各学年百五十名(三学級)合計定員七百五十名(十五学級)ニ御座候処各学年共定員ニ充タサル為メ従来各学年共一学級ニ候処此度補欠入学試験施行ノ結果生徒数増員致候為メ左表朱書ノ通り第三学年以下ヲ各二学級ニ第四学年ハ三学級ト学級編成致度最モ同学年ヲ特ニ三学級ト致候義ハ此度私立城北学園第四年生ノ大部分ヲ其ノ校ノ依頼ニヨリ収容方申越候ヲ以テ当校規定ノ編入試験ヲ施行夫等ノ内学力及体格ノ両検査ニ合格シタルモノヲ入学許可致候様ノ次第茲ニ第四年生生徒ハ殊ニ増加致候就テハ従来ノ一学級ヲ三学級編成ニ致方教授上好結果ト存ジラレ候事由ニ依ルモノニ御座候間御了承被下差表編成ノ義御認可被成下度此段奉願上候也

この国士館の願い出に対して昭和二年三月九日、左の通牒が発せられた。

国士館中学校学級数制限超過ノ件  
指 令 案

国士館

大正十五年九月申請国士館中学校第二学年以上学級数制限超過ノ件認可ス

(略)

客年十一月六日寅学第一五九八三号御進達標記ノ件別紙ノ通指令相成タル処本省ノ認可ヲ受ケスシテ第四学年ノ学級数ヲシテ第一学年ノ学級数ニ超過セシメタルハ

甚タ穩当ナラサル次第ナルモ特ニ今回ニ限り詮議扣求タル儀ニ付御示達ノ上将来充分御注意相成度

追テ城北学園第四年生ノ同校編入ニ関シ其ノ試験問題成績並体格検査ノ結果詳細報告セシメタルシ度

右の史料によれば、大正一五年度における学級数の超過は、「私立城北学園第四年生」の編入を受け入れた結果にともなうものであったことがわかる。また、この場合においてはさきにした施行規則第二条の「但書」にしたがった手続きが求められていた。しかし、国士館中学校がこの手続きをへずに学級編制を行ったことは当局

からすれば「穩当ナラサル」ことではあつたが、例外的に「今回ニ限り」認められたようである。

つぎに昭和一三年の事情についてであるが、この経緯等を直接的に示す史料等は未見である。しかし、国士館中学校はその翌年二月一日に「定員増加申請書」を文部当局に提出し、その定員数を従來の七五〇名から一〇〇〇名に変更(一学年四学級、生徒数二〇〇名)することを願ひ出ている。その際、添付資料として提出された史料二点が左に示す「始末書」(学校長尾高武治名義)である<sup>(13)</sup>。前段のものは手書きによるもので後段のものは活字化されたものであるが、これによつて昭和一三年の経緯もおおむね推察されるので、つぎに示そう。

#### 始末書

昭和十四年度新学年生徒募集ニ際シテハ第一学年志願者四百余名有之候ニ付定員七五〇名ナルモ教室及校具ニ余裕アルニ鑑ミ由二百六十六名ヲ入学許可致候処 右ハ予メ手続ヲ了スヘキモノナル旨御注意ヲ受ケ恐縮千万ニ奉存候今後ハ総テ所定ノ順序ニ依リ処理致スヘク候ニ付前記入学許可ニ付イテハ特ニ御諒承ヲ得度此段御願申上候(以下、略)

始末書(特ニ本年定員以上收容シタル理由)

昭和十四年三月現在本校生徒数ハ四五〇名ナル然ル処本校定員ハ七五〇名ナルヲ以テ総数定員ニ達スルマデ第一学年生ヲ募集スルモ差支ヘナキモノト思考シタル結果第一学年応募者数四一〇名中二六六名ヲ入学許可シタリ然レドモ右ハ全ク小職ノ誤解ニ基クモノニ候ヘバ何分御寛大ノ処置相成度此段始末書及提出候也(以下、略)

すなわち、第一表に示した翌年の昭和一四年度においては、第一学年在籍生徒数が二六六名に達したことが示されてゐる。ここに当局からの指導(「御注意」)があり、右の始末書が提出されたとみられる。また、その理由については尾高学校長が「全ク小職ノ誤解ニ基クモノ」としてゐることから推察すれば、前年における第一学年の生徒数超過も施行規則への理解不足によるものと推察される。

#### (二) 第一学年における入学志望者数・入学者数

大正一四年から昭和一三年の間における中学校の入学資格については、まず中学校令第十条によつて大枠は、(一) 当該学校予科ヲ修了シタル者 (二) 尋常小学校ヲ



卒業シタル者、(三) 文部大臣ノ定ムル所ニ依リ之ト同等以上ノ学力アリト認メラレタル者、の三種とされた。また、このうち (三) に該当する者についての詳細は施行規則で定められている。すなわち、大正一四年の開校時点では (一) 他ノ中学校又ハ高等学校ノ予科ヲ修了シタル者、(二) 「国語、算術、日本歴史、地理、理科ニ就キ尋常小学校卒業ノ程度ニ依ル試験ヲ合格シタル者」としたうえで、「前項ノ試験ヲ受クルコトヲ得ル者ハ年齢十二年以上ノ者」としていた。くわえて、その但し書きでは、(三) 「尋常小学校第五学年ノ課程ヲ修了シ学業優秀且身体ノ發育十分ニシテ中学校ノ課程ヲ修ムルニ足ルコトヲ当該学校長ニ於テ証明シタル者ハ此ノ限ニ在ラス」とし、尋常小学校第五学年修了者の入学を認めることよって、成績優秀者への修業年限の短縮を図っている(同規則第四十二条)。

また、同条にみられる「試験」についてはその後、昭和二年一月に行われた同規則改正時に「検定」へと変更されることとなった。この改正は第二表に示した数値の変化等を理解するうえでも重要な変更であるため、煩をいとわず、以下にその改正理由を示した文部省訓令を摘記しておく。

(前略) 現行制度ニ於テハ中学校第一学年入学志願者ノ数入学セシムヘキ人員ヲ超過スル場合ニハ試験ニ依リテ入学者ヲ選抜スヘキコトヲ規定シ(中略) 多年ノ間入学選抜試験ヲ実施シ来リタレトモ之ニ伴フ弊害少カラス(中略) 小学校在学中ヨリ只管之カ準備ニ没頭シ知ラス識ラスノ間ニ其ノ心身ノ発達ニ悪影響ヲ及ホスハ国民ノ将来ニ対シ洵ニ寒心ニ勝ヘサルナリ加之コレカ為ニ国民教育精神ニ背戾シ小学校教育ノ本旨ヲ没却スルニ至リテハ最モ深く憂フヘキ所ナリ入学試験ニ伴フ弊害前述ノ如シトセハ其ノ制度ニ対シ改正ヲ加フルハ刻下ノ急務ナリ(中略) 今回ノ改正ハ中等学校ノ入学者ヲ選抜スルニ従来ノ如試験ハ之ヲ行ハサルコトヲ以テ本体トシ(中略) 選抜ニ当リテハ主トシテ出身小学校ニ於ケル成績等ニ拠リ更ニ人物考査並身体検査ヲ用ヒテ入学者ヲ決定スヘキモノトセリ(後略)

すなわち、昭和二年以降、中学校における入学選抜方法については「検定」(あるいは「考査」)を中心とすることとなり、この方針はその後の昭和六年における施行規則の全部改正時においても継承されている。なお、第三表として示した第二学年以上への入学にかんする手続き

においても、この方針はともに共通するものであった。

さて、まずは第二表より国士館中学校への入学志願者合計数の推移をみれば、開校当初は一五名であった志願者数は翌一五年には一一八名に増加し、昭和四年・同八年には一二七名および一二六名となっている。その後、昭和九年以降しばらく減少傾向にあった志願者数であったが、昭和一三年には急増して二二三名となり、ここにおいてはじめて第一学年の定員数一五〇名を越えている。しかし、以上を総括的にみれば、その数はおおむね定員数に満たず、さきにもふれたように生徒募集にかんする実状は数値からみれば低迷していたといえる。

他方、試みに志願者数に対する入学者数の比率を算出すれば、入学試験が実施されていた大正一四年・一五年の両年についての平均は、東京府全体では約三六%（全国は約五一%）であるのに対して国士館中学校のそれは約五三%とかなり高い。この数値の隔たりは、「試験」から「検定」へと選抜方法が変更された昭和二年以降においてはより著しく、東京府全体では約四三%（全国は約六〇%）であるのに対して国士館中学校では約七一%となっている。したがって、この数値は国士館中学校における一つの特徴であることはあきらかであるが、その理由については判然とし<sup>(15)</sup>ない。すなわち、この「隔たり」

が今はあきらかにしえない志願者数に対する合格者数の多寡によるものとも考えられるが、他方、つぎに示す史料には留意したい。

国士館中学校では大正一五年一月に「国士館中学校受験料徴収ノ件」と題した学則改正を申請しており、昭和二年一五日にその認可を受けている。このとき、学則を改正する理由を左のとおりとしていた。<sup>(16)</sup>

学則第三十七条（追加） 入学志願者ハ受験料金貳

円ヲ納入スベシ

学則改正理由書

本校ハ従来入学志願者ニ対シ受験料徴収セザル関係上野次的志願者多数交リ逐年志願者数増加シ之レニ対スル諸経費モ不尠要セラル、ヲ以テ此後改正規定ノ受験料ヲ徴収スルトキハ一面ニ於テ之レ等ノ真摯ナラサル志望者ヲ防ギ真実本校ヲ希望スルモノヲ集メ得ベク旁々諸経費ノ一端ニ充テ以テ益々内容・設備ヲ完全ナラシメンガ為メ現規定ヲ改正セントスル所以ナリ

すなわち、右の史料によれば、国士館中学校ではそれまで無料としていた受験料を昭和二年以降では徴集するこ

ととし、その理由は「真摯ナラサル志望者ヲ防ギ真実本校ヲ希望スルモノヲ集メ得ベク」実施する旨としている。なお、この申請がなされた大正一五年における志願者数に対する入学者の比率は、国士館中学校にみられる数値としては最低値（約四七％）となっており、以降は上昇している。こうした事実をふまえれば、国士館中学校にみられるさきの「隔たり」は、同校への入学を強く希望する生徒の収容を図った結果とも推察される。

### おわりに

以上、本稿では国士館諸学校にかんする統計整理の一つとして、国士館中学校についての試みを提示した。補説についてはまだまだ不十分であるが、すでに与えられた紙幅はつきており、稿を閉じることとする。本稿では収録することができなかった中学校にかんするその他の事項（経費等）や他の諸学校等にかんする統計数値の整理については、別の機にあらためて論じる予定である。

### 註

(1) 高橋(湯川)次義「国立公文書館・東京都公文書館所蔵文書にみる戦前国士館の歴史(一)―所蔵状況

及び中学校・専門学校の歴史―」(国士館大学文学部『人文学会紀要』第二二号、平成元年)。湯川次義「国立公文書館・東京都公文書館所蔵文書にみる戦前国士館の歴史(二)」(国士館大学教育学会『教育学論叢』第九号、平成三年)。

(2) なお、旧学制下の国士館専門学校における卒業者数および教員免許状取得者数(「武道」)等の整理については、拙論「『教員免許台帳』にみる国士館専門学校」(『国士館史研究年報』創刊号、平成二二年)を参照されたい。

(3) 本稿に掲載した各表については、すべて『文部省教育統計・調査資料集成』(大空社、一九八八年)に復刻・集録された同報告書に基づき作成した。

(4) 本稿中にみられる法令の出所は、すべて文部省教育調査部『中学校関係法令の沿革』(湘南堂、昭和六〇年、復刻版)によった。

(5) 「大正二四年私立学校冊ノ二」、東京都公文書館所蔵。

(6) 同前。

(7) 『官報』第三七八七号、大正一四年四月一〇日、二四八頁。

(8) 「自大正二二年四月至二二年三月中学校設置廢止認可 東京都 第一〇冊」、国立公文書館所蔵。

(9) 施行規則は、昭和一八年三月「中学校規程」附則第五七条により廃止された。

(10) 註(11)を参照されたい。

(11) ただし、開設初年度の大正一四年における定員数等については留意を要する。すなわち、同年三月三〇日に提出された申請書類上における定員数は「二五〇名」となっている(「大正一四年私立学校冊ノ二」、東京都公文書館蔵)。しかし、開校数ヶ月後の八月一日付で出された通牒「国士館中学校々舎建築ノ件」(「自大正一二年四月至一二年三月中学校設置廃止認可 東京都 第一〇冊」、前掲書)では中学校の新校舎が認可され、この認可を受けてあらためて同月四日、財団法人国士館から文部当局へ「本財団法人国士館中学校ハ従来定員式百五十人ノ所此度：：新校舎増築致シ候ニ付キ定員七百五十人ニ増加」することが申請された。また、この申請は同年九月二日に認可され、定員数の変更が行われた(「大正一四年私立学校冊ノ二」、前掲)。すなわち、第一表に掲載した大正一四年の定員数(七五〇名)は同年一〇月の報告によるものであるが、実際の入学者募集はこれ以前の定員数であった「二五〇名」の範囲を念頭に行われたものと考えられる。

(12) 「自大正一二年四月至一二年三月中学校設置廃止認可 東京都 第一〇冊」、前掲書。

(13) 同上。なお、昭和一四年一二月申請の「定員増加」は翌年二月に認可されている。

(14) 昭和二年一月二日文部省訓令第一九号「中学校令施行規則改正ノ要旨並ニ実施上ノ注意要項」。

(15) なお、同表作成の出所である『全国公立私立中学ニ関スル諸調査』には入学志願者数に対する合格者数の掲載はない。

(16) 「大正十五年私立学校冊ノ十八」(東京都公文書館所蔵)。

3 学年		4 学年		5 学年		合計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
80	2	—	—	—	—	123	4
7,068	144	6,249	124	4,433	93	33,645	690
63,097	1,397	53,679	1,268	38,757	1,014	301,121	6,693
102	2	180	3	—	—	373	9
7,651	157	6,845	140	5,101	114	35,705	743
66,235	1,472	59,037	1,386	46,314	1,206	321,338	7,155
76	3	150	3	104	2	484	14
7,862	160	7,549	154	5,625	119	37,764	781
67,700	1,504	62,658	1,464	51,278	1,315	335,692	7,471
88	2	110	2	99	2	473	10
8,062	163	7,737	153	6,237	133	39,102	806
69,831	1,559	63,598	1,509	54,570	1,398	345,086	7,735
100	2	108	2	90	2	471	10
8,275	166	7,908	157	6,522	140	39,433	820
71,540	1,600	66,363	1,552	57,118	1,452	353,420	7,930
78	2	105	2	92	2	431	10
8,091	174	7,971	159	6,689	144	38,497	827
72,686	1,652	67,427	1,584	59,630	1,493	350,691	8,006
84	2	81	2	92	2	407	10
7,798	167	8,124	167	6,773	149	37,385	805
70,697	1,636	68,290	1,624	60,712	15,114	340,403	7,872
65	2	79	2	67	2	361	10
7,386	159	7,698	162	1,878	156	36,597	789
66,592	1,554	65,773	1,596	61,888	1,539	332,658	7,695
81	2	68	2	69	2	407	8
6,993	156	7,302	156	6,590	149	36,426	786
63,575	1,485	62,898	1,535	60,468	1,516	330,351	7,521
66	2	74	2	63	2	367	10
7,263	157	6,986	153	6,327	147	37,234	795
65,706	1,485	60,679	1,492	57,499	1,444	334,814	7,477
118	2	89	2	70	2	382	9
7,868	165	7,295	157	5,941	139	38,152	804
69,182	1,508	62,672	1,493	55,006	1,443	342,591	7,548
81	2	130	3	79	2	386	9
8,341	172	77	165	6,401	146	40,742	843
72,527	1,542	66,116	1,523	57,626	1,460	355,210	7,689
78	2	99	2	109	3	384	9
8,803	175	8,541	171	7,070	156	43,524	878
74,854	1,566	69,444	1,553	60,523	1,493	368,555	7,848
74	2	96	2	82	2	478	11
9,294	181	8,891	171	7,646	156	47,739	912
76,553	1,599	71,740	1,578	63,664	1,523	384,356	8,026

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

第1表 定員数・生徒数・学級数

調査年月	対象(校長名)	校数	生徒定員	1学年		2学年	
				生徒数	学級数	生徒数	学級数
大正14年10月	国士館中 (長瀬鳳輔)	—	750	15	1	28	1
	東京府	45	38,580	8,215	168	7,680	161
	全国	500	365,935	76,058	1,533	69,630	1,481
大正15年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	58	2	33	2
	東京府	46	38,758	8,346	172	7,762	160
	全国	516	377,988	78,432	1,578	71,320	1,513
昭和2年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	85	3	69	3
	東京府	49	40,670	8,699	178	8,029	170
	全国	528	390,530	79,976	1,617	74,080	1,571
昭和3年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	95	2	81	2
	東京府	51	48,200	8,719	185	8,347	172
	全国	542	407,795	81,801	1,570	75,376	1,609
昭和4年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	90	2	83	2
	東京府	54	44,874	8,404	179	8,344	178
	全国	553	417,489	80,482	1,669	77,917	1,657
昭和5年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	69	2	87	2
	東京府	54	45,500	7,721	176	8,025	174
	全国	555	419,675	75,123	1,622	75,825	1,655
昭和6年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	85	2	65	2
	東京府	55	45,200	7,223	160	7,467	162
	全国	556	416,865	69,851	1,511	70,853	1,583
昭和7年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	73	2	77	2
	東京府	55	46,340	7,605	159	7,030	153
	全国	558	416,755	71,453	1,489	66,952	1,517
昭和8年10月	国士館中 (柴田徳次郎)	—	750	108	2	81	2
	東京府	55	45,180	8,125	168	7,416	157
	全国	553	412,695	74,490	1,506	68,920	1,479
昭和9年10月	国士館中 (副島義一)	—	750	57	2	107	2
	東京府	55	45,000	8,686	174	7,972	164
	全国	554	413,260	78,236	1,543	72,994	1,513
昭和10年10月	国士館中 (副島義一)	—	750	43	1	63	2
	東京府	56	44,350	8,727	174	8,321	169
	全国	555	414,945	79,884	1,564	75,847	1,539
昭和11年10月	国士館中 (副島義一)	—	750	40	1	56	1
	東京府	57	45,800	9,124	184	8,799	176
	全国	557	418,165	80,900	1,594	78,041	1,570
昭和12年10月	国士館中 (尾高武次)	—	750	46	1	52	1
	東京府	58	47,600	9,990	194	9,120	182
	全国	561	424,965	84,499	1,640	79,235	1,596
昭和13年10月	国士館中 (尾高武次)	—	750	159	3	67	2
	東京府	60	51,350	11,830	212	10,078	192
	全国	563	433,715	89,437	1,689	82,962	1,637



校第1学年者	高等小学校卒業者		其他ノ者			合計	
	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者
—	—	—	—	—	—	15	15
643	903	409	263	116	23,703	8,455	
16,994	1,625	7,489	1,113	579	150,311	74,398	
11	12	10	—	—	118	56	
649	796	369	289	135	23,456	8,475	
15,665	14,076	6,703	1,009	556	146,706	76,449	
10	11	11	—	—	106	85	
655	746	368	266	133	25,515	8,943	
14,884	11,926	58,862	1,075	538	146,013	77,627	
12	22	15	5	5	119	95	
621	709	335	344	185	24,186	9,031	
14,084	9,691	4,927	926	521	137,550	80,983	
6	8	7	4	4	127	98	
503	553	266	246	138	21,596	8,761	
10,117	7,527	4,519	665	466	122,579	79,163	
4	4	3	—	—	89	80	
291	326	158	239	133	19,876	8,071	
7,984	5,628	3,680	575	416	108,582	74,414	
7	8	6	1	1	108	86	
282	250	133	191	90	18,423	7,540	
6,358	4,401	2,926	566	394	100,914	69,609	
7	3	2	—	—	96	73	
220	210	112	161	90	15,356	7,903	
5,369	3,468	2,340	508	389	102,365	71,236	
7	5	5	4	4	126	112	
314	246	130	195	93	21,909	8,270	
6,112	3,309	2,154	554	384	116,687	74,359	
3	2	1	—	—	77	56	
245	214	114	301	138	24,211	8,906	
7,571	4,117	2,573	602	367	128,620	78,214	
3	8	5	3	2	64	54	
265	282	146	283	153	26,717	9,180	
8,164	4,475	2,604	745	472	137,391	79,842	
1	2	2	2	2	74	48	
243	207	101	279	145	28,191	9,280	
8,855	4,471	2,336	736	495	144,299	80,351	
5	5	4	9	7	72	53	
287	252	143	391	175	26,441	10,043	
9,507	4,928	2,551	777	452	149,684	83,570	
10	7	7	5	4	231	171	
319	252	110	526	201	33,573	11,937	
9,577	5,574	2,361	1,199	674	179,011	88,556	

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

第2表 第1学年の学歴別入学志望者数および入学者数

調査年月	対象	尋常小学校第5学年 修了者		尋常小学校卒業者		高等小学 修了
		志願者	入学者	志願者	入学者	志願者
大正14年10月	国士館中	—	—	15	15	—
	東京府	309	80	20,591	7,207	1,637
	全国	1,148	406	97,263	48,930	34,536
大正15年10月	国士館中	—	—	95	55	11
	東京府	166	42	20,622	7,280	1,583
	全国	729	318	100,332	53,207	30,560
昭和2年10月	国士館中	4	4	79	60	12
	東京府	105	20	22,716	7,767	1,682
	全国	471	193	104,078	56,150	28,463
昭和3年10月	国士館中	—	—	80	63	12
	東京府	72	20	21,538	7,871	1,523
	全国	313	175	100,833	61,276	25,787
昭和4年10月	国士館中	—	—	107	81	8
	東京府	85	21	19,586	7,833	1,126
	全国	507	295	97,023	63,766	16,857
昭和5年10月	国士館中	1	1	80	72	4
	東京府	62	12	18,555	7,477	694
	全国	641	394	89,587	61,940	12,151
昭和6年10月	国士館中	—	—	91	72	8
	東京府	101	32	17,216	7,003	665
	全国	855	579	85,257	59,352	9,835
昭和7年10月	国士館中	2	—	84	64	7
	東京府	126	42	14,303	7,439	556
	全国	854	572	89,119	62,566	8,416
昭和8年10月	国士館中	1	1	106	95	10
	東京府	72	12	20,740	7,721	656
	全国	550	323	102,141	65,386	10,133
昭和9年10月	国士館中	—	—	72	52	3
	東京府	72	23	23,026	8,386	598
	全国	45	233	110,211	67,470	13,245
昭和10年10月	国士館中	—	—	49	44	4
	東京府	46	24	25,481	8,592	625
	全国	333	192	117,327	68,410	14,511
昭和11年10月	国士館中	—	—	67	43	3
	東京府	39	15	27,082	8,776	584
	全国	250	136	122,271	68,529	16,571
昭和12年10月	国士館中	—	—	52	37	6
	東京府	29	11	25,126	9,427	643
	全国	216	106	125,842	70,954	17,921
昭和13年10月	国士館中	—	—	206	150	13
	東京府	22	6	32,008	11,301	765
	全国	154	68	150,709	75,876	21,375

4 学年		5 学年		合計	
入学志願者	入学者	入学志願者	入学者	入学志願者	入学者
—	—	—	—	27	17
2,539	683	81	71	6,348	2,231
5,144	2,181	406	348	14,024	7,197
82	50	—	—	187	107
2,401	672	63	59	5,247	1,949
4,972	2,173	389	346	12,750	6,945
113	113	—	—	209	209
2,638	874	108	97	6,071	2,613
5,293	2,524	582	529	13,675	8,048
135	66	—	—	216	112
2,030	736	79	66	4,489	2,076
4,376	2,284	419	371	11,379	7,120
70	36	—	—	145	89
1,647	647	74	73	3,950	1,484
3,771	2,132	385	363	10,569	8,079
5	21	5	5	44	44
1,126	505	52	50	3,006	1,667
3,231	2,143	420	400	9,669	7,099
14	5	—	—	23	9
1,288	838	88	85	3,102	2,091
3,331	2,482	559	523	10,031	7,813
11	4	—	—	29	13
1,257	808	120	109	2,913	1,936
3,372	2,507	673	609	9,872	7,685
11	7	—	—	28	17
1,191	872	223	230	3,050	2,265
3,000	2,291	703	689	9,173	7,378
9	7	—	—	29	21
1,153	796	157	122	3,079	2,145
2,708	1,988	581	486	9,234	6,967
46	42	1	1	89	81
1,264	869	11	107	3,166	2,200
2,819	2,062	440	395	9,298	7,019
52	30	8	8	115	88
1,371	879	103	98	3,469	2,190
2,968	2,029	442	403	9,757	6,956
67	32	9	9	157	96
1,614	851	126	116	3,988	2,301
3,178	1,991	475	440	10,233	7,112
104	35	2	2	230	110
1,503	679	107	89	4,238	2,175
3,115	1,807	433	390	10,783	7,065

第3表 第2学年以上における入学志願者数・入学者数

調査年月	対象	2 学年		3 学年	
		入学志願者	入学者	入学志願者	入学者
大正 14 年 10 月	国士館中	20	17	7	—
	東京府	1,347	622	2,381	855
	全国	3,697	2,275	4,777	2,393
大正 15 年 10 月	国士館中	27	12	78	45
	東京府	1,016	493	1,767	725
	全国	3,148	2,080	4,241	2,346
昭和 2 年 10 月	国士館中	20	20	76	76
	東京府	1,284	704	2,041	938
	全国	3,497	2,432	4,303	2,563
昭和 3 年 10 月	国士館中	23	13	58	33
	東京府	908	556	1,472	718
	全国	3,044	2,206	3,540	2,259
昭和 4 年 10 月	国士館中	22	13	53	40
	東京府	979	62	1,250	702
	全国	3,252	2,428	3,161	3,156
昭和 5 年 10 月	国士館中	9	4	25	14
	東京府	778	497	1,050	615
	全国	2,903	2,275	3,115	2,281
昭和 6 年 10 月	国士館中	2	—	7	4
	東京府	722	516	1,004	652
	全国	2,950	2,384	3,190	2,424
昭和 7 年 10 月	国士館中	6	3	12	6
	東京府	622	426	914	593
	全国	2,841	2,297	2,986	2,272
昭和 8 年 10 月	国士館中	10	7	7	3
	東京府	703	507	933	656
	全国	2,714	2,221	2,756	2,177
昭和 9 年 10 月	国士館中	12	9	8	5
	東京府	803	577	966	650
	全国	3,153	2,435	2,792	2,058
昭和 10 年 10 月	国士館中	15	13	27	25
	東京府	843	540	1,048	684
	全国	3,120	2,358	2,919	2,204
昭和 11 年 10 月	国士館中	23	20	32	30
	東京府	862	552	1,133	661
	全国	3,215	2,381	3,132	2,143
昭和 12 年 10 月	国士館中	30	23	51	32
	東京府	968	619	1,280	715
	全国	3,242	2,387	3,338	2,294
昭和 13 年 10 月	国士館中	45	35	79	38
	東京府	1,132	655	1,496	752
	全国	3,546	2,525	3,689	2,343

官公署ニ 奉職シタル者	教員ト ナリタル者	実業ニ 就キタル者	死亡シタル者	其ノ他ノ者	計
4	—	7	—	49	100
68	30	325	9	2,435	5,380
1,302	1,656	8,750	120	23,733	49,561
—	3	10	—	21	85
76	15	369	14	252	5,671
1,438	1,417	10,225	100	23,882	52,882
2	—	2	—	55	80
87	40	310	27	2,871	6,071
1,306	928	10,082	135	27,056	55,219
—	—	12	1	31	88
72	17	451	7	2,935	6,258
1,294	506	12,520	120	27,902	57,858
—	14	17	—	45	92
69	33	581	29	2,873	6,376
1,419	518	13,493	153	28,064	59,285
—	—	8	2	22	65
83	16	406	17	2,953	6,462
1,743	894	12,826	122	28,389	59,977
3	—	—	—	31	65
129	5	379	27	2,855	6,364
1,938	928	12,843	133	27,594	58,855
6	—	9	—	32	62
133	6	360	9	2,850	6,073
2,138	976	11,714	169	26,620	56,117
—	—	11	—	33	70
110	11	328	11	2,780	5,813
2,481	1,040	11,096	101	25,062	53,882
2	—	15	—	29	77
122	4	439	14	2,911	6,264
3,316	999	11,191	121	24,811	56,322
6	1	8	—	48	107
197	15	682	19	2,942	6,929
4,214	1,487	10,669	130	23,584	58,135

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

第4表 卒業生の進路

調査年月	対象	高等学校及 大学予科入学者	官公立専門学校 及之同程度 学校入学	私立専門学校及 之同程度学校 入学者	陸海軍諸学校 入学者
昭和3年10月	国士館中	14	—	26	—
	東京府	1,496	331	659	27
	全国	5,370	4,764	4,589	279
昭和4年10月	国士館中	21	1	24	—
	東京府	1,496	328	843	19
	全国	5,588	4,733	5,206	293
昭和5年10月	国士館中	10	—	11	—
	東京府	1,525	394	738	79
	全国	5,737	4,835	4,755	385
昭和6年10月	国士館中	12	2	28	2
	東京府	1,520	344	842	70
	全国	5,237	4,619	5,214	446
昭和7年10月	国士館中	15	1	—	—
	東京府	1,505	369	863	54
	全国	5,416	4,628	5,286	303
昭和8年10月	国士館中	15	5	13	—
	東京府	1,505	483	950	49
	全国	5,269	4,659	5,691	384
昭和9年10月	国士館中	8	1	11	—
	東京府	1,519	421	958	71
	全国	4,856	4,473	5,690	400
昭和10年10月	国士館中	3	1	11	—
	東京府	1,217	372	1,073	53
	全国	4,359	4,334	5,340	468
昭和11年10月	国士館中	1	2	23	—
	東京府	1,234	383	913	43
	全国	4,128	4,424	5,126	444
昭和12年10月	国士館中	10	—	21	—
	東京府	1,191	405	1,066	112
	全国	4,096	5,139	5,634	1,015
昭和13年10月	国士館中	5	5	33	1
	東京府	1,462	451	1,074	87
	全国	4,577	6,353	6,068	1,053



退学事由別員数							
高等学校大学 予科入学 ニ依ル者	陸海軍諸 学校入学 ニ依ル者	官公立諸 学校入学 ニ依ル者	私立諸学 校入学ニ 依ル者	実業ニ就 キタル者	懲戒処分 ニ依ル者	死亡又ハ疾 病ニ依ル者	其ノ他ノ者
—	—	—	—	—	19	—	—
363	15	264	323	172	363	618	2,185
1,580	124	2,474	1,366	3,993	734	3,807	13,234
—	—	—	5	—	12	7	17
310	24	247	309	113	372	569	2,071
1,717	116	2,511	1,287	4,255	796	3,901	13,077
14	—	—	33	—	15	27	73
356	5	333	375	139	378	655	2,232
1,984	144	2,529	1,270	4,505	795	4,029	13,235
9	—	4	2	—	—	5	61
439	11	274	344	200	430	716	2,311
2,039	131	2,303	1,339	4,962	777	4,379	13,122
9	—	—	6	—	—	5	61
503	51	280	403	267	175	685	2,286
2,209	184	2,497	1,239	5,191	523	4,149	13,756
8	—	—	—	—	—	—	61
431	23	35	50	97	26	75	371
2,047	160	2,603	1,439	5,359	543	4,087	14,085
1	—	—	—	3	2	3	25
408	30	190	244	203	131	616	2,498
1,928	160	2,430	1,044	5,520	438	4,205	13,817
—	—	—	—	—	—	4	30
473	61	147	338	58	126	448	2,284
1,848	263	2,265	1,375	4,288	607	3,468	12,890
2	—	—	—	—	—	1	27
448	46	200	311	95	148	535	2,129
1,547	340	2,005	1,124	3,849	381	3,368	11,009
2	—	5	15	26	4	4	4
347	60	190	327	113	245	452	2,023
1,325	271	1,984	1,102	3,713	451	3,277	10,536
1	—	8	18	27	14	8	12
384	51	209	415	133	154	536	2,203
1,283	383	2,163	1,321	3,942	318	3,462	10,309
4	1	1	—	13	11	7	22
368	104	173	327	146	123	519	1,988
1,275	605	1,957	1,150	3,466	306	3,462	10,250
4	2	5	12	—	19	9	32
336	304	249	348	157	106	583	2,075
1,213	2,464	1,981	1,146	3,040	295	3,627	9,556

国士館諸学校にかんする統計数値の整理 (一)

第5表 退学者数・退学事由

調査年月	対象	半途退学者数	退学者学年別数				
			1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年
大正 15 年 10 月	国士館中	19	1	6	12	—	—
	東京府	4,303	1,003	903	888	793	716
	全国	27,312	5,027	6,537	6,821	5,456	3,471
昭和 2 年 10 月	国士館中	41	3	6	26	6	—
	東京府	4,015	821	787	912	821	674
	全国	27,660	4,864	6,501	6,727	5,802	3,766
昭和 3 年 10 月	国士館中	162	5	7	35	46	69
	東京府	4,473	796	916	1,037	945	781
	全国	28,491	4,636	6,727	6,891	6,146	4,091
昭和 4 年 10 月	国士館中	81	11	12	23	9	26
	東京府	4,725	987	967	962	1,025	784
	全国	29,052	5,073	6,733	7,045	6,385	3,816
昭和 5 年 10 月	国士館中	81	11	12	23	9	26
	東京府	4,650	930	975	969	958	818
	全国	29,746	5,399	7,175	7,261	6,348	3,563
昭和 6 年 10 月	国士館中	69	12	7	11	16	23
	東京府	4,595	775	938	1,065	1,014	803
	全国	30,323	5,251	7,156	7,749	6,413	3,754
昭和 7 年 10 月	国士館中	34	8	10	8	7	1
	東京府	4,320	675	765	1,077	997	406
	全国	29,542	4,769	6,635	7,551	6,720	3,867
昭和 8 年 10 月	国士館中	38	6	11	6	9	4
	東京府	3,935	579	707	863	977	809
	全国	27,004	4,189	5,896	6,930	6,280	3,709
昭和 9 年 10 月	国士館中	30	3	6	11	6	4
	東京府	3,913	647	751	803	1,013	699
	全国	23,242	3,888	5,398	5,863	4,850	3,243
昭和 10 年 10 月	国士館中	60	6	14	16	15	9
	東京府	3,757	675	759	820	908	595
	全国	22,659	3,868	5,358	5,513	4,984	2,936
昭和 11 年 10 月	国士館中	88	10	15	27	34	2
	東京府	4,085	735	848	866	979	657
	全国	22,981	3,788	5,662	5,819	5,020	2,692
昭和 12 年 10 月	国士館中	59	3	12	16	15	13
	東京府	3,748	606	758	805	883	696
	全国	22,471	3,635	5,474	5,710	4,824	2,828
昭和 13 年 10 月	国士館中	83	13	19	19	25	7
	東京府	4,158	722	895	884	921	736
	全国	23,322	3,569	5,200	5,310	5,398	3,845

有資格者		無資格者		合計			武術教員
専任	兼任	専任	兼任	専任	兼任	計	
6	2	9	—	15	2	17	5
793	188	257	89	1,050	277	1,326	43
8,469	600	2,816	548	11,287	1,146	12,433	1,114
6	2	10	1	16	3	19	2
861	206	273	74	1,134	280	1,414	36
9,385	556	2,403	326	11,788	882	12,670	583
11	6	7	—	18	6	24	1
939	22	297	59	1,236	280	1,516	37
10,128	529	2,315	214	12,443	743	13,186	698
12	3	7	1	1	4	23	2
961	225	268	47	1,229	272	1,501	58
10,746	547	2,036	216	12,782	763	13,545	760
12	2	6	—	18	2	20	1
981	274	303	172	1,284	446	1,730	32
11,171	590	2,048	416	13,219	1,006	14,225	735
11	4	6	1	17	5	22	2
1,072	225	287	69	1,359	294	1,653	64
11,611	493	1,784	278	13,395	771	14,166	759
14	5	4	—	18	5	23	2
1,070	261	254	78	1,324	339	1,663	83
11,639	575	1,522	499	13,161	1,074	14,235	868
16	4	4	—	20	4	24	—
1,078	216	214	54	1,292	270	1,563	31
11,554	580	1,447	418	13,001	998	13,999	788
19	2	4	—	23	2	25	—
1,079	244	196	73	1,275	317	1,592	42
11,591	582	1,338	396	12,929	977	13,906	742
19	2	2	—	21	3	24	—
1,110	254	197	62	1,307	316	1,623	42
11,875	664	1,241	464	13,116	1,128	14,244	774
18	2	3	—	21	2	23	—
1,153	273	209	63	1,362	336	1,698	54
12,034	714	1,210	420	13,144	1,145	14,289	751
17	2	4	—	21	2	23	—
1,191	280	200	80	1,391	360	1,751	52
12,398	729	1,158	428	13,556	1,157	14,713	668
16	3	1	1	17	4	21	2
1,231	320	231	119	1,462	439	1,901	108
12,778	777	1,283	569	14,061	1,345	15,407	637
19	4	1	1	20	5	25	—
1,350	306	209	80	1,559	386	1,945	68
13,301	842	1,587	663	14,888	1,505	16,393	661

第6表 教員数 (資格別)

年月	対象
大正 14 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
大正 15 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 2 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 3 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 4 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 5 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 6 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 7 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 8 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 9 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 10 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 11 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 12 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国
昭和 13 年 10 月	国士館中
	東京府
	全国

# 資料提供のお願い

国士館史資料室では、国士館史に関する資料や情報のご提供をお願いしております。例えば、学生時代の日記や手帳、当時の写真、講義ノートや実習用具など、資料がございましたらご一報ください。

なお、ご郵送くださる場合は、当方着払いにてお寄せください。

## 郵送先

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八一― 柴田会館二階

学校法人 国士館 国士館史資料室

Tel.〇三―三四―一八一―二六九九

Fax 〇三―三四―一八一―二六九九

E-mail [archives@kokushikan.ac.jp](mailto:archives@kokushikan.ac.jp)

## 国士館史関係資料の翻刻並びに補註

### 第四卷

#### 凡例

- 一 ここには、国士館史編纂のために調査収集した資料のうちから、翻刻・校訂と補註が終了し、重要度が高いものを順次紹介する。
- 一 資料には、巻別に適宜、通し番号と表題を付し、その下に（ ）で出典を略記した。
- 一 資料は、漢字・仮名遣いとも、できるだけ原本に忠実に翻刻したが、一部に句読点を補い読みやすく改めた。
- 一 資料中の漢字は、原則として常用漢字に改めた。ただし、常用漢字にないものおよび地名・人名など特に必要と認められたものは、原本のままとした。
- 一 現在では読みにくくなった語句には、平仮名でふりがなを付したが、もともと原本にあるふりがなは片仮名で表記した。
- 一 資料の成立事情及び資料中に使用される用語で意味を解しにくいものには、簡略な補註を付し、読者の理解に資した。
- 一 資料の翻刻・校訂は、国士館史資料室収蔵の原本、ないしは原本から作成した忠実な複製資料によった。

一 昭和五年四月一五日 國士館高等拓植學校設立申請認可書類

(東京都公文書館所蔵 私立学校・冊ノ七三)

①

午学第三八一九号

昭和五年四月一五日受

私立学校設置ノ件指令案

午学第三八一九号

財団法人國士館

昭和五年四月九日付申請國士館高等拓植學校設置ノ件認可ス

年月日 知事

第二案

財団法人國士館

昭和五年四月五日付申請上塚司ヲ國士館高等拓植學校長ニ就任セシムルノ件認可ス

年月日 知事



第三案

年月日 知事

文部大臣宛

私立学校設置ノ件

財団法人國士館理事申請ニ係ル國士館高等拓植學校設置ノ件本日認可候条左記事項ヲ具シ此段及報告候也

記

一、位置荏原郡世田谷町

一、開校期日昭和五年四月

一、学則別紙ノ通り

一、學校長上塚司<sup>\*1</sup>

(備考)

一、目的 南米ブラジルニ發展セントスル国士的人材ヲ養成ス

一、修業年限一ヶ年

一、入学資格中学校卒業以上ノ学力ヲ有スルモノ

一、生徒定員五十名

一、学資入学金五円、授業料年額八十四円

一、寄附行為変更認可四月十四日

一、教室 國士館専門學校々々舍ノ一部ヲ充当ス

〔東京府經由印〕  
昭和5.4.9 午学第3819号

〔世田谷区奥印〕  
世学第321号

國士館高等拓植學校設置申請

本財団法人ニ於テ別紙ノ通り高等拓植學校ヲ設置致度ニ付、御認可相成度、此段申請候也

昭和五年四月九日

財団法人 國士館

理事 柴田徳次郎印

東京府知事 牛塚虎太郎殿

(世田谷区經由印)

世学第321号

前書出願ニ付奥印候也

昭和五年四月九日

東京府荏原郡世田谷町長寺田 武印

書類

- 一、設立申請者
- 二、学校沿革及設立要項
- 三、学則
- 四、教員予定表
- 五、学校長認可申請
- 六、財団寄附行為
- 七、財産目録
- 八、財団役員氏名
- 九、維持経営ノ方法
- 一〇、収支予算
- 一一、寄附行為改正同意書ノ写
- 一二、敷地校舎ノ図面

一三、教室配当表

\* 1 上塚司 明治二三年、熊本県に生まれる。明治四五年神戸高等商業学校卒業、同年南満州鉄道株式会社入社。そこで渡満していた柴田徳次郎と交流を持つ。大正九年五月衆議院議員、大正一三年農商務大臣秘書官、その後商工大臣秘書官・大蔵省政務次官・衆議院外務委員長などを歴任。アマゾン産業研究所長・海外移住中央協会副会長・日伯中央協会理事長を務めるなど、海外移民政策に積極的に関与。大正九年の時点で財団法人国士館理事、翌年国士館維持委員会会計庶務。大正一一年国士館理事及び評議員に就任。昭和五年国士館高等拓植学校校長。昭和七年五月三十一日日本高等拓植学校を創立し、校長に就任。なお詳細は、熊本好宏「国士館高等拓植学校と移民教育」(『国士館史研究年報―楓原―』第三号所収)、同「上塚司」(本誌二〇三―二〇九頁)参照。また、「履歴書」が、本誌九四―九五頁にある。

②

国士館沿革

大正六年十一月四日東京市麻布区筈町一八二、大民団事務所内二夜学塾ヲ開キ、毎日二時間乃至四時間政治、

經濟、社会、宗教、哲学、武道、外国語等ノ科目ヲ教授ス、時勢ノ要求ハ日ヲ経ルニ從ヒ聴講者ノ数ヲ増シ、教室ノ狹隘ヲ告グルニ至リ、且ツ社会的風潮ハ益危道ニ偏セントスルヨリ、同士奮起シ國士館ノ移設ヲ計畫シ、地ヲ市外世田谷町松陰神社畔ニ相シ、大正八年二月工ヲ起シ九月講堂、道場、寄宿舎、本部等ノ工成リ、同時ニ財団法人ノ組織トナシ館規ヲ制定シ、同年十一月英才教育ヲ旗幟トシ広ク学生ヲ募集シ開齋ス  
 大正九年十月第二期生ヲ募集シ、同十年一月学園内ニ館宅六棟ヲ起工シ四月竣工ス、尚同年五月一日ヨリ新寄宿舎ノ建築ニ着手シ九月二十五日落成セリ

次テ大正十二年四月ヨリ國士館中等部ヲ新設シ、十四年四月改メテ文部省ノ認可ヲ得、中等部ヲ國士館中學校ト改称、同年六月中學校々々舎（総坪数四百十坪、総二階建）ノ建築ニ着手シ九月初旬落成ス

大正十五年荏原郡西部六ヶ町村、町村長及ビ町村有力者援助ノ下ニ國士館商業學校ヲ新設シ三月四日認可四月十五日開校ス

大正十五年七月理事國士館中學校長長瀬鳳輔死去、校長ニハ理事柴田徳次郎認可就任ス

昭和三年二月隣接公爵毛利家所有土地山林約六千坪買取校地ノ拡張ヲナシ運動場及生徒実習農園ニ充ツ

昭和三年十一月隣接松陰神社改築ニ就キ旧社殿ヲ讓受ケ構内ニ移設シ、國士神社ヲ建立ス

昭和四年三月十二日國士館専門學校認可、同日法学博士水野鍊太郎校長就任認可アリ、四月ヨリ開校ス

昭和四年五月國士館専門學校々々舎新築ニ着手シ、近ク竣工ノ予定

昭和四年三月國士館実務學校認可<sup>\*1</sup>アリ

\*1 國士館実務學校 國士館は専門學校創設とともに、昭和四年三月、設置認可を受け、修業年限一年の國士館実務學校を設立。実務學校には、商工科と拓植科が設置され、実業家の育成を目的とした。しかし、専門學校創設の影響もあり開校できず、昭和五年五月には拓植科独立とともに開校を延期するも、同一〇年二月に開校せずに廃止とした。

③

設置要項

一、名称

國士館高等拓植學校

一、位置

東京府荏原郡世田谷町世田谷千六番地

一、学則

別紙ノ通り

一、修業年限

壹ケ年

一、入学資格

一、中学校卒業者

二、専門学校入学者検定規程ニ依リ指定セラレタル者

三、同規程ニ依ル検定試験ニ合格シタル者

一、組織

本科（昼間授業）

一、生徒定員

種別 学級数 生徒定員

本科 一 五〇

一、授業料

年額金八拾四円也

一、入学考査料及入学金

入学考査料 金五円也



入学金

金五円也

一、校地校舎

別紙ノ通り

一、維持経営ノ方法

別紙ノ通り

一、設立者

財団法人國士館

一、開校年月

昭和五年四月

國士館高等拓植學校學則

第一章 総則

第一条本校ハ南米ニ發展セントスル国士の人材ノ養成ヲ以テ目的トス

第二条本校ノ修業年限ヲ一年トス

第二章 学年学期及休業日

第三条本校学生ノ定員ヲ五十名トス

第四条学年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第五条学年ヲ別チテ左ノ二学期トス

前学期自四月一日至九月三十日

後学期自十月一日至翌三月三十一日

第六条本校ノ休業日ハ左ノ如シ

日曜日

大祭祝日

本校記念日 十一月四日

春季休業 自三月二十一日至四月七日

冬季休業 自十二月二十五日至一月七日

第三章 学科課程

第七条本校ノ学科目課程左ノ如シ

学科目	毎週授業時数
国民道徳	一
ポルトガル語	一八
植民史	一
植民政策	一
南米経済事情	二
南米地理	二
農業大意	一
畜産大意	一
土木建築大要	一
測量大要	一
産業組合概念	一
柔剣道	二
馬術	一
計	三三

第四章 入学、休学、退学

第八条本校ニ入学シ得ベキ者ハ、左ノ各号ノ一ニ該当スル者ニシテ本校ニ於テ詮衡シタル者ニ限ル

一、中学校卒業者

二、専門学校入学者検定規定ニ依リ指定セラレタル者

三、同規定ニ依ル試験検定合格者

第九条本校ニ入学セントスルモノハ所定ノ入学願書（第一号書式）、履歴書、成績証明書、身体検査書、戸

籍謄本、渡航承諾書（第二号書式）及最近撮影ノ半身脱帽手札形写真ニ入学考査料金五円ヲ添ヘ學校

長ニ差出スヘシ

第十条病氣其他ノ事由ニヨリ引続キ欠席セントスル時ハ休学願ヲ差出シ許可ヲ受クベシ

但シ休学三ヶ月以上ニ及ブ時ハ卒業ヲ許サズ

第十一条退学セント欲スル者ハ事由ヲ詳細記シ願出ノ上許可ヲ受クヘシ

第十二条左ノ各号ニ該当スル者ハ退学ヲ命ス

一、品行不良ニシテ改悛ノ見込ナキ者

二、学業成績不良ニシテ成業ノ見込ナキ者

三、正当ノ事由ナクシテ一ヶ月以上欠席シタル者

四、授業料ヲ納付セザル者

第五章 試験及卒業

第十三条 試験ハ各学科目ニ付毎学期ノ終ニ之ヲ行フ

第十四条 卒業ハ各学期ノ成績ヲ考查シテ之ヲ判定ス

第十五条 卒業者ニハ卒業証書ヲ授与ス

第六章 入学金及授業料

第十六条 入学ヲ許可セラレタルモノハ入学金五円ヲ納付スルコトヲ要ス

第十七条 授業料ハ年額八十四円トシテ二回ニ毎学期ノ始ニ納付スベシ

第十八条 一旦納付セル諸料金ハ一切之ヲ返還セズ

第七章 賞罰

第十九条 學術操行優良ナルモノハ之ヲ表彰ス

第二十条 學校長教育ニ必要ト認ムル場合ハ左ノ懲戒ヲ行フ

戒飾、謹慎、停学、放校

(第一号書式(入学証書)、第二号書式(渡航承諾書)略)

教員予定表

担任学科目	専任兼任別	毎週教授時数	学位称号	氏名
国民道徳	兼任	一		柴田徳次郎
ポルトガル語	専任	一八		辻小太郎
殖民史	専任	一		上塚司
植民政策	専任	一		上塚司
南米経済事情	専任	二		辻小太郎
南米地理歴史	専任	二		辻小太郎
農業大意	専任	一	農学士	辻小太郎
畜産大意	専任	一	同	三田弘
土木建築大意	兼任	一	工学士	藤井眞秀
測量大意	兼任	一	同	藤井眞秀
産業組合概念	専任	一	商学士	楠木政五郎
柔道	兼任	一	六段	工藤一三
剣道	兼任	一	範士	齋村五郎
馬術		一		選定中

④

學校長認可申請

國土館高等拓植學校ニ於テ上塚 司ヲ學校長ト相定メ度ニ付御認可相成度、此段申請候也

昭和五年四月五日

財団法人國土館理事

東京府知事 牛塚虎太郎殿

柴田徳次郎印

⑤

履 歴 書

原 籍 熊本県下益城郡杉上村字赤見千五百拾壹番地<sup>\*1</sup>

現住所 東京市小石川区大塚仲町四拾壹番地

族籍 士族

戸主 秀勝 弟

上 塚 司

明治二十三年五月一日

一 明治四拾五年四月 神戸高等商業学校卒業

一 明治四拾五年五月 南満洲鉄道株式会社入社

一 同社在職中外務省、農商務省ノ囑託ヲ兼ネ、大正五年九月ヨリ大正九年一月ニ至ル迄

北満、朝鮮全支那及仏領印度ノ經濟調査ニ従フ



一大正九年五月 衆議院議員ニ当選

一大正拾壹年壹月 財団法人國士館理事評議員ニ推薦サレ就任ス

一大正拾貳年六月 衆議院ノ代表トシテ丁抹コペンハーゲンニ開カレタル万国議員會議ニ列席シ欧米諸国  
ヲ巡遊ス

一大正拾參年六月 農商務大臣秘書官ニ任シ秘書課長ヲ命セラル

一大正拾四年四月 商工大臣秘書官ニ任セラル

一大正拾四年八月 商工大臣秘書官ヲ辞ス

一昭和貳年四月 大蔵大臣秘書官ニ任セラル

一昭和參年貳月 衆議院議員ニ当選ス

一昭和四年七月 大蔵大臣秘書官ヲ辞ス

右ノ通り相違無之候也

昭和五年參月拾四日

右 上 塚 司印

\* 1 下益城郡杉上村字赤見 現熊本市南区城南町赤見。

⑥  
〔杉上村發議番号〕  
「發第六二一九号」

証 明 書

熊本県下益城郡杉上村大字赤見千五百拾壹番地

上 塚 司

明治二十三年五月一日生

- 一 禁錮以上ノ刑ニ処セラレタル者ニ非ス
- 二 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復権セザル者又ハ身代限ノ処分ヲ受ケ債務ノ弁償ヲ終ヘザル者ニ非ス
- 三 懲戒ニ依リ免職ニ処セラレ二箇年ヲ経過セズ又ハ懲戒ヲ免除セラレタル者ニ非ズ
- 四 教員免許状褫奪ノ処分ヲ受ケ又ハ第七条ノ規定ニ依リ辞職ヲ命セラレ二箇年ヲ経過セザル者ニ非ス
- 五 品行不良ト認ムルモノニ非ズ

右証明ス

昭和五年三月二十五日

熊本県下益城郡杉上村長緒方冑藏印

⑦

財団法人國士館寄附行為

第一章 目的及事業

第一条 本財団法人ハ国士タル国家有為ノ人材ヲ養成スル教育並ニ其施設ヲ為スヲ以テ目的トス

第二条 本財団法人ノ目的ヲ達成スルタメニ左ノ事業ヲ行フ

一、國士館専門學校及國士館実務學校ヲ設立經營スルコト

二、國士館中學校ヲ設立經營スルコト

三、國士館商業學校ヲ設立經營スルコト

四、國士館高等拓植學校ヲ設立經營スルコト

五、講習会ノ開催其他本財団法人ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業ヲ行フ

第二章 名称及事務所

第三条 本財団法人ハ財団法人國士館ト称ス

第四条 本財団法人ノ事務所ハ東京府荏原郡世田谷町字世田谷千六番地ニ置ク

第三章 資産及會計

第五條 本財団法人ノ資産ハ左ノ各号ヲ以テ組成ス

一、設立当初ニ於ケル柴田徳次郎、侯爵小村欣一ヨリ寄附シタル不動産及基金（別紙目録ノ通）

二、學校及其他ノ収入金

三、寄附ヲ受ケタル金品

第六條 資産ハ之ヲ分ケテ基本財産及普通財産ノ二トス、基本財産ハ左記ノ基金ヲ以テ之ニ充ツ

一、國士館専門學校基金拾五万円

二、國士館中學校基金參万円

但シ大正十四年ヨリ向フ五ヶ年内ニ五万円ニ達セシム

三、國士館商業學校基金參万円

但シ大正十五年ヨリ向フ十ヶ年内ニ積立ツルモノトス

四、其他ノ基金

普通財産ハ資産総額ヨリ基本財産ヲ控除セル殘額<sup>全</sup>部トス

第七條 基本財産ハ現金又ハ有価証券トシテ郵便官署又ハ確實ナル銀行或ハ信託会社ニ預入シ置クモノトス

普通財産ハ理事ニ於テ之ヲ適當ニ管理ス

第八條 本財団法人ノ經常費ハ左ノ収入ヲ以テ支弁ス

一、柴田徳次郎ノ本財団法人設立後向フ十ヶ年間年額壹万円宛ノ寄附金

二、基本財産ヨリノ果実

三、學校及其他ノ諸収入

臨時費ハ総テ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ

第九条 本財団法人ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第四章 役員及顧問

第十条 本財団法人ニ左ノ役員ヲ置ク

理事五名乃至七名

監事二名乃至三名

評議委員二十名乃至三十名

第十一条 理事ハ理事会ヲ組織シ其合議ヲ以テ本財団法人ノ事務ヲ執行ス

但シ理事ノ互選ヲ以テ分担事務ヲ定ムルコトヲ得

第十二条 理事ハ評議委員中ヨリ評議委員会ニ於テ之ヲ選任シ其任期ヲ四年トス

第十三条 監事ハ民法第五十九条ノ職務ヲ行フモノトス

第十四条 監事ハ評議委員中ヨリ評議委員会ニ於テ之ヲ選任シ其任期ヲ三年トス

第十五条 評議委員ハ評議委員會ヲ組織シ理事及監事ノ選任及理事会ノ諮問ニ応スルモノトス

第十六条 評議委員ハ本財団法人ノ功勞者中ヨリ理事会ニ於テ推薦シ其任期ヲ五年トス

第十七条 役員ニ欠員ヲ生ジタルトキハ補欠選挙又ハ推薦ヲナス、此場合ニ於ケル任期ハ前任者ノ残任期間

トス

役員ノ任期滿了スト雖、後任者ノ就任スル迄ハ仍其ノ職務ヲ行フモノトス

第十八条 本財団法人ニ顧問若干名ヲ置ク

顧問ノ任期ハ終身トス

第十九条 顧問ハ理事会又ハ評議委員會ニ於テ必要ト認ムル重要事項ノ諮問ニ応スルモノトス

第二十条 顧問ハ本財団法人ニ特ニ功勞アル知名ノ士ヲ理事会ニ於テ之ヲ推挙ス

#### 第五章 理事会及評議委員會

第二十一条 理事会ハ隨時之ヲ開ク

第二十二条 理事会ハ理事過半数出席スルニアラサレバ開会スルコトヲ得ス

第二十三条 評議委員ハ理事会ノ議ニ依リ之ヲ開ク

但シ毎年一回ハ必ず開会スルコトヲ要ス

第二十四条 評議委員會ハ十名以上出席スルニアラサレバ開会スルコトヲ得ス

第二十五条 理事会及評議委員会ノ議長ハ其ノ都度各会ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第二十六条 理事会及評議委員会ノ決議ハ各其ノ出席者ノ過半数ヲ以テ決ス可否同数ナルトキハ各議長ノ決  
スル所ニ従フ

第六章 補則

第二十七条 本寄附行為ニ規定ナキ事項ハ民法ノ規定ニ依ル

第二十八条 本寄附行為ハ理事会ノ議ヲ經、評議委員過半数ノ同意ニヨリ主務官庁ノ認可ヲ得テ之ヲ変更ス  
ルコトヲ得

大正八年十一月六日

財団法人國士館設立者

柴田徳次郎

小村欣一

⑧

寄附財産目録

一、東京府荏原郡世田谷町字世田谷壺千六番地 所在



本家

木造天然スレート葺平家（講堂） 壹棟

此建坪九拾坪七勺

此見積価格金貳万五千元

一、全所壹千参番地壹千番地 所在

附属第一号

木造瓦葺二階建（本部） 壹棟

此建坪四拾九坪

二階坪貳拾七坪五合

此見積価格金壹万円

一、全所壹千参番地壹千五番地ノ四 所在

附属第二号

木造瓦葺貳階建（寄宿舍） 壹棟

此建坪五拾七坪四合貳勺

二階坪貳拾五坪六合七勺

此見積価格金壹万千円

一、全所壹千五番地ノ参 所在

附属第三号

木造瓦葺平家（道場） 壹棟

此建坪七拾壹坪

此見積価格金八千円

一、全所壹千五番地ノ壹 所在

附属第四号

木造瓦葺平家（平家） 壹棟

此建坪八坪

此見積価格金六百円

一、全所壹千五番地ノ参 所在

屋形流付掘井戸 壹個

此見積価格金参百円

一、全所壹千五番地ノ四 所在

屋形流付堀井戸 壹個

此見積価格金參百円

見積価格合計金五万九千貳百円也

一、館宅 六棟

一、基金參万円也

以上

⑨

本財団現在役員氏

顧問 頭山 滿

理事 柴田徳次郎

同 侯爵 小村 欣一

同 上塚 司

同 山田 弟一(註)

同 花田 半助

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	評議員	同	同	監事
										侯爵				
頭山立助	山崎源二郎	濱地八郎	井上敬次郎	山田弟一 <small>(弟)</small>	上塚司	松野鶴平	飯田延太郎	末永一三	渡邊海旭	小村欣一	柴田徳次郎	山崎源二郎	頭山立助	森俊藏

⑩

財産目録

種別	金額	備考	動産之部	
			金額	備考
種別	三〇、〇〇〇			
基本金	一〇、六三三	中學校基本金		
預金	四、〇五〇	電灯電話其他諸設備		
諸設備	一、九五〇	シボレー七人乗台		
自動車	九、一三五			
備品及什器	三、五九二			
図書	〇〇〇			
預金	三〇〇、九一二	國士館専門學校基本金及建築資金		
合計	三六〇、二七四			

同	同	同
花田 半助	森 俊藏	眞藤 義丸

不動産之部

種別	金額	備考
土地、校地	二三一、八四五・六〇	毛利家ヨリ購入
同学校用墓地	二一九五〇	
建物、講堂	二七、〇二一	木造天然スレート葺建坪九拾坪七合
同、本部	一六、七三一	木造二階建瓦葺建坪階上式拾七坪階下四拾九坪五合
同、寄宿舎第壹号	一三、七〇九	右同、階上式拾五坪六七階下五拾式坪二三
同、剣道場	一一、一五〇	右同、平家建建坪八拾壹坪
同、寄宿舎第貳号	二五、六五〇	右同、二階建建坪延数百七拾壹坪
同、中學校々舎	四四、一四九	右同、坪数四百式坪五合
同、柔道場	八、四六三	木造人造スレート葺平家建建坪百拾参坪七五
同、雨天体操場	〇〇	
同、兵器庫	一、二〇〇	右同、トタン葺平家建建坪拾式坪
同、物置	九六〇	木造平家八坪
同、館宅七棟	二八、九八七	木造瓦葺総坪数百七拾七坪七五
井戸、四箇	二、一〇〇	
立木	三、一三一	
其他	二、八一二	石門二個便所等
合計	四一九、一三一	
総計	七七九、四〇四	

維持経営ノ方法

本校ハ國士館専門學校及同中學校々舎ノ一部ヲ使用シ、經常費ハ授業料其他ノ諸料金及寄附金ヲ以テ支弁ス  
ルコトトシ、不足ノ場合ハ財団法人ニ於テ負担ス

經常費収支予算

受入金 九、二六〇・〇〇

支出金 九、二六〇・〇〇

収入内訳

授業料 四、二〇〇・〇〇 一人年額八拾四円五拾人分

入学考査料 二五〇・〇〇 一人五円五拾人分

入学金 二五〇・〇〇 一人五円五拾人分

寄附金 四、五六〇・〇〇 拓務省補助 三、〇〇〇円

上塚司寄附 一、五六〇円

合計 九、二六〇・〇〇

支出内訳

人件費

教員費 一五、三五〇・〇〇 教授二名平均年額一人千五百

講師四名平均年額一人 六百

⑪

事務給	九六〇・〇〇	一人月額八拾円
校医手当	五〇・〇〇	
使丁給	六〇〇・〇〇	一人月額五拾円也
諸経費		
図書費	五〇〇・〇〇	
印刷費	二〇〇・〇〇	
通信費	二〇〇・〇〇	
広告費	二〇〇・〇〇	
旅費	五〇〇・〇〇	
雑費	五〇〇・〇〇	
予備費	二〇〇・〇〇	
合計	九、二六〇・〇〇	

同  
意  
書  
(写)



本財団法人ノ寄附行為ヲ國士館高等拓植學校ヲ設立スル為ニ、別紙ノ通り變更スルノ件ヲ評議員ニ諮リ、左ノ通り同意ヲ得タリ

昭和五年四月一日

財団法人 國士館

理事 柴田 徳次郎

⑫

同 意 書 (写)

別紙寄附行為改正案ニ同意ス

昭和五年四月一日

柴田徳次郎 (印)

侯爵 小村 欣一 〃

渡邊 海旭 〃

末永 一三 〃

松野 鶴平 〃

種別	室数	各室坪数	坪数合計
普通教室	大 二	四〇	八〇
同	小 九	二五	一九五
職員室	二	一〇	三五
事務室	一	二〇	二〇
図書室	一	二〇	二〇
同閲覧室	一	四八	四八
応接室	一	一九	一九
宿直室	一	一〇	一〇
大教室	一	六四	六四
講堂	一	八七	八七
計	二〇		五八七

（国士館専門學校建築工事設計平面図 略）  
 教室其他各室配当表

上塚 司 〃  
 山田 悌一 〃  
 頭山 立助 〃  
 眞藤 義丸 〃  
 山崎源二郎 〃

二 昭和五年五月 國士館実務學校拓植科ヲ國士館高等拓植學校へ改称ノ件ニ付書簡

(渋沢史料館所蔵)

謹啓陽春の佳候益御清適奉慶賀候

陳者昨年十二月五日辱くも、東久邇宮殿下御台臨の光榮に浴し殊に学生並に維持委員に對し優渥なる御令旨を賜り候事は國士館設立の趣旨に鑑み寔に感激措く能はざる所に有之、爾來吾々理事者は勿論学生一同御令旨の御趣旨を体し精進努力罷在り以御蔭予て御高配を仰居候、専門學校新校舎も八分通り出来仕候、既に新学期より新校舎に於て授業を開始し一部を臨時寄宿舎に利用し、毎朝五時起床所定の学科、課業に励み居候、幸ひ本校創設の趣旨一年全国に徹底せる為か、未だ開校一年なるに本年は百名の生徒募集に對し二倍以上の応募者有之候様の次第にて、將來必ず予期の成果を挙げ御期待に辜負せざる確信を得候次第に御座候尚前年御承認を賜り候実務學校拓植科に就ては、其後幸にも上塚理事の努力に依りブラジルに移住地新設を見候を機会に、國士館高等拓植學校と改称致し内容にも刷新を加へ、去る四月十一日午後二時工業俱樂部に於ける維持委員会に於て改めて御承認を得、所定の手続を経て東京府並に文部省に申請致候処、同十二日認可の指令に接し、同時に校長に上塚理事新任の儀も認可有之候間、是亦御諒承被下度、不取敢別紙規則書其他參考書類相添へ御送附申上候に付、御高覧の上今後共何分宜敷御高配賜り度、以上御報告旁得貴意候

昭和五年五月十日

敬具

財団法人國士館理事

柴田徳次郎

洪澤栄一殿

三 昭和六年八月 國士館高拓便り（『アマゾニア産業研究所月報』第一号）

國士館高拓便り

◇國士館高等拓植學校はアマゾニア開發を目的として生まれ、世界に誇り得る組織を有する移植民教育機関である。本校の特色とする所は移住目的地の確定、及移住地の分校とも称すべき実業練習所と完全に連絡することであり、更に入学資格を中等諸學校卒業以上に限定せることも特色の一である。斯くて我が国の有する唯一無二の實際的な完備せる移植民教育機関と称し得る次第である。

◇昨年四月開校した許りではあるが、最初より志望者多く入学難の景況を示し、選ばれたる第一回生は去

る四月雄々しくアマゾン開発の熱意に燃へてパリンチンスに向つたのである。

本年度入学希望者は上塚校長の帰朝に刺戟されてか全く殺到の有様であつたが其の中より厳選に厳選を加へて漸く八十名を入学せしめた。齡三十を超した中老も居れば大学出身の学士二名の外専門学校出身者に至るまで種々雑多な経歴の青年が毎日歛に親しみ、肥桶を担ひつゝ、勉強してゐる。

◇本校は亦規律の厳格なる点に於て有名である。学生は全部寄宿舎に収容し、一切酒禁禁煙を励行し、頭髪を延すことを許さない。或る点に於ては軍隊よりも一層厳正である。

学生は午前五時に起床し武道の練習によりて身体を鍛へ、校内一切を掃除して八時より授業を受け午後放課後は農場に出て実習に従事するのである。それがために身体が非常に丈夫となり入学以来僅に二ヶ月にして平均一貫匁の体重増加を来し、学生自身不思議がる程健康体となりつゝある。

◇學校には一人の小使、一人の事務員が居ない、教授と学生とが一体となつて働くのである。本校には夏休暇がない。他の学校の学生達が二ヶ月も休暇してゐる時本校学生は炎天下に労働しつゝ、夏を過すのである。大アマゾン開発の先駆者は斯くして養成されつゝある。

◇高拓第一回卒業生渡伯に当り、久留米日本足袋株式会社社長石橋正二郎氏よりは運動靴並地下足袋各百数十足を、東京豊川順彌氏よりは写真機を、又アマゾン興業会社社長澤柳氏よりは蓄音機を夫々御寄贈に預り茲に謹で謝意を表す。

◇本号所載の「アマゾンア産業研究所の歌」<sup>\*1</sup>及次号に掲出すべき「門出の歌」の作曲は陸軍戸山学校軍樂長の厚意により同校軍樂隊員中より募集し、其の最も優秀なるものを選択せられたるものにして、本歌の性質上ブラジル其の他海外の各地に於て歌はるゝに相応はしきやう作曲せられたるものである。やがてアマゾンの原始林に於て実業練習生の唱ふ此の歌は万里の波濤を越へて眠れる祖国の民心を乱打する警鐘となり、國士館学園高拓生が謡ふ此の歌は、一万七千哩の彼方に奮闘精進しつゝある我が同胞の胸を波打たすであらう。

◇赤道直下に於ける先輩諸兄の努力は、常に後進高拓生を自戒し、激励し、鞭して居る。新天地建設の戦士たり新文明樹立の志士たる求めて都門を去るの時、独り本校の学生は、國士館に開かるゝ文武講習會に参加し又移植民講習會に勉励し其の余暇に於ては、農園の手入れ、下水工事の完成等、大地の上に立ち熱汗を奮つて暑熱と戦ひつゝある。勇ましき是等健男兒の上に栄光あれ。

\* 1 アマゾンア産業研究所 アマゾンア産業研究所並同附属実業練習所は、昭和六年一〇月、上塚司を中心にブラジルのアマゾナス州に設けた入植地ヴィラ・アマゾンアに創設された。目的は「一は以てアマゾンア人文發展の基礎的機関たらしめ、他は以てアマゾンア開發の指導的人材養成の機関たらしめん事」(『アマゾンア産業研究所月報』創刊号)。それを達成するための事業は、アマゾン

ンにおける農林水産、地質、保健衛生、気象その他の調査研究、農産物の試作栽培、実業練習所の経営、各種調査報告並月報の発行などであった。背景には、日本政府のブラジルへの移民保護奨励策があった。なお、本項冒頭にあるように、「国士館高等拓植學校はアマゾン開発を目的として生まれ、世界に誇り得る組織を有する移植民教育機関である。本校の特色とする所は移○住○目○的○地○の○確○定○、及○移○住○地○の○分○校○と○も○称○す○べき○実○業○練○習○所○と○完○全○に○連○絡○せ○る○」機関であった。

#### 四 昭和七年一月 国士館高等拓植學校学則及定員改正

（『アマゾンア産業研究所月報』第二年第一号）

##### 国士館高等拓植學校学則及定員改正

今般本校学則及定員を改正し、来年度より実施することになりました。その主要点は左の通りであります。

一、入学資格 中学卒業程度を中学四年修了程度にしました。元来本校は学問とか理論の人よりも植民指導者たる實際的人物の養成を目的とするから入学資格は必ずしも中学卒業者を要せずと認め且海外發展

を熱望する青年を成るべく早く渡航せしむる趣旨で改正したのであります。

二、学生定員 定員五十名を二百名としました。将来ブラジル国における日本人植民地に入植すべき移植民数に応じてその指導者を養成せねばなりません。仍て定員を二百名に変更して毎年その範囲に於て学生の募集人員を定めます。本年度学生は百名募集しました。

三、実習作業 学科課程に実習作業一週二十四時間を追加しました。尤も実習作業は従来学則中に規定されておなかつたが毎日放課後約三時間宛の農業実習を行はしめておりました。元来実習作業は農学理論の応用であり、将来実際の植民指導者たるには毎日相当時間該実習作業体験は是非必要であります。

四、その他 実業練習所の規定にも幾分変更を加へましたが、其の詳細は御申込みにより改正学則を御送附申し上げます。

来年度試験期日

東京、神戸 三月二十八九両日

熊本 三月三十一日、四月一日



五 昭和七年九月 國士館專門學校教員無試驗檢定許可申請書 (國立公文書館所藏)

〔表紙〕

昭和七年九月十九日

申学一〇、六三五号

師範学校中学校高等女学校

教員無試驗檢定許可申請

國士館專門學校

昭和七年九月十五日

國士館專門學校設立者

財団法人國士館

理事 柴田徳次郎

文部大臣

鳩山一郎殿

師範学校中学校高等女学校教員無試験檢定許可申請

本校ハ現時教育界ノ風潮ニ鑑ミ剛健ナル身神ヲ有シ国家的自覺アル中等教員養成ノ緊要ナルヲ痛感シ、此ノ根底ノ下ニ将来武道ヲ主トシ国語漢文科中等教員タラントスルモノノ為メ、武道ヲ鍛鍊シ兼テ国語漢文ニ関シ高等ノ學術ヲ修メシムル目的ヲ以テ、特ニ昭和四年三月十二日創設セルモノニ有之、爾來創設当初ノ趣旨ニ則リ内容ノ充実整備校風ノ作興ニ深甚ナル注意ヲ払ヒ優良教師ノ招聘ト設備完成ニ銳意スルト共ニ、一面學生ノ入学ニ関シテハ極メテ嚴密ナル考査ヲ以テ先ヅ素質ノ優秀ナルモノヲ選抜シ、更ニ教職員亦不斷ノ努力精進ニ依テ其教授訓育ニ当リタル結果、現在學生ノ成績ハ品性学力並ニ体格共ニ概ネ所期ノ成果ヲ収メタルモノト信セラレ、從テ本校卒業後ハ中等教員トシテ充分其資格ヲ具備シ且又将来ニ於テモ倍々優良ナル卒業生ヲ出シ以テ本校創設ノ期待ニ副ヒ得ルコトト存セラレ候ニ就テハ、此際特別ノ御詮議ニ依リ、明八年三月以降ノ本科卒業生ニ対シ規定ニ依リ師範学校中学校、高等女学校教員無試験檢定御許可相成度、別紙必要書類相添へ此段申請仕候。

國士館専門學校沿革

大正六年十一月四日東京市麻布区筈町一八二大民団事務所内ニ夜学塾ヲ開キ毎日二時間乃至四時間政治、經濟、社会、宗教、哲学、武道、外国語等ノ科目ヲ教授ス、時勢ノ要求ハ日ヲ経ルニ從ヒ聴講者ノ数ヲ増シ教室ノ狹隘ヲ告クルニ至リ、且ツ社会的風潮ハ益危道ニ偏セントスルヨリ、同志奮起シ國士館ノ移設ヲ計画シ地ヲ市外世田谷町松蔭神社畔ニ相シ、大正八年二月工ヲ起シ九月講堂、道場、寄宿舎、本部等ノ工成リ、同時ニ財団法人ノ組織トナシ館規ヲ制定シ同年十一月英才教育ヲ旗幟トシ広く学生ヲ募集シ開齋ス、爾来此ノ趣旨ノ下ニ中學校、商業學校ヲ設立經營シ来リタルカ、別記申請書ニ記載セルカ如キ見地ニ基キ國士館専門學校ヲ創立シ昭和四年三月十二日認可、同日法学博士、水野鍊太郎ヲ校長ニ就任シ四月ヨリ開校以テ今日ニ至ル

要 項

- 一、名 称 國士館専門學校
- 二、位 置 東京府荏原郡世田谷町世田谷一、〇〇六番地
- 三、学 則 別紙ノ通り
- 四、無試験檢定ノ取扱ヲ受ケントスル学科及教員免許状ヲ受クヘキ見込ノ学科目

本科 擊劍、國語、漢文

柔道、國語、漢文

五、生徒定員及現在生徒数（学科別、学年別及学級別）

科 別	現 在 生 徒 数				計
	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	
擊劍ヲ主 トスルモノ	七〇	五五	四六	三三	二〇四
柔道ヲ主 トスルモノ	六一	四七	二九	二八	一六五
計	一三二	一〇二	七五	六一	三六九

六、当該学科ノ卒業者数（年度別）及卒業後ノ状況

本校ハ四ヶ年制度専門學校ニシテ昭和四年四月開校、明八年三月第一回卒業生ヲ得ルモノナルヲ以テ現在卒業生ナシ

七、學校長及当該学科担任教員ノ履歷書、担任学科目、担任時数及専任兼任ノ區別ヲ記シタル調書

イ 學校長及教員ノ履歷書

別冊ノ通り

ロ 担任学科及専任兼任ノ區別ヲ記シタル調書左ノ如シ

(昭和四・五・六年度担任学科及専任兼任ノ區別表 略)

昭和七年度担任学科及専任兼任別表

担任学科 任ノ別	専任兼 任ノ別	資 格	教員氏名
漢文専任	東京帝国大学文学部選科卒業	内田周平	
漢文専任	漢学塾ニテ修業	松本洪	
漢文専任	右 同	川田瑞穂	
漢文専任	早稲田大学政治経済科卒業	眞藤義丸	
国語専任	國學院大學国文学部卒業 文学士	筑紫豊	
国語専任	東京帝国大学文学部卒業 文学士	佐山 济	
英語専任	東京帝国大学文学部哲学科 卒業 文学士	柴田玉宗	
修身専任	早稲田大学政治経済科卒業 國士館長	柴田徳次郎	

国 語 兼 任	国 語 兼 任	国 語 兼 任	体 操 専 任	英 語 論 理 心 理 専 任	修 身 専 任	体 操 専 任	法 制 専 任	哲 学 史 社 会 学 専 任	歴 史 専 任
東京帝国大学文学部卒業 文学士 文部省図書監修官	東京帝国大学文学部卒業 文学史 東京高等学校教授	國學院大學卒業 同校教授	陸軍士官学校 陸軍歩兵中佐	東京帝国大学文学部卒業 文学士	東京帝国大学文学部卒業 文学士	東北帝国大学法文学部卒業 文学士	京都帝国大学工学部卒業工学士 東京帝国大学法学部卒業法学士	東京帝国大学文学部卒業文学士 山崎直三 仏国巴里大学院卒業仏国文学博士	東京帝国大学文学部史学科卒業 文学士 子爵
各 務 虎 雄	待 鳥 清 九 郎	鳥 野 幸 次	柳 原 源 藏	蓑 田 胸 喜	副 島 民 雄	齋 藤 彌	篠 崎 彦 二	山 崎 直 三	内 藤 政 光

英語兼任	修身兼任	衛生兼任	衛生兼任	衛生兼任	衛生兼任	衛生兼任	英語兼任
東京帝国大学文学部卒業 文学士 大正大学教授	カイザーウエルヘルム第二 大学卒業 ドクトル フキロソ フイー 芝中学校長	岡山県立師範学校卒業	東京帝国大学文学部卒業 文学士 文学博士 貴族院議員	慈恵会医学専門学校卒業 医学博士 内務省技師	東京帝国大学文学部卒業 文学士 二松學舎専門学校教授	東京帝国大学文学部卒業 文学士 文部省図書監修官	東京帝国大学文学部卒業 二松學舎専門学校教授
大島泰信	渡邊海旭	影山藤作	上田萬年	南崎雄七	橘純一	佐野保太郎	峰村三郎
							藤本萬治
							教育學 兼 国民道徳 兼任

柔道専任	講道館九段	山下義韶
柔道専任	東京高等師範学校体操専修科卒業 講道館六段	工藤一三
剣道専任	國士館高等部卒業 精錬証	小川忠太郎
剣道専任	陸軍戸山学校剣道体操科卒業 教士	岡野亦一
剣道専任	佐賀県鹿島中学校卒業 教士	小野十生
柔道兼任	講道館八段 慶應義塾大学教授	飯塚國三郎
柔道兼任	東京高等師範学校体操専修科卒業 同校講師 六段	會田彦一
剣道兼任	京都武道専門学校卒業 範士	齋村五郎
剣道兼任	右 同 範士	大島治喜太

(八、学科課程及毎週授業時数表、九、校地、校舍及寄宿舎ノ図面、十、教科書及参考書ノ目録、十一、教授用器具、機械及標本ノ目録、十二、経費及維持ノ方法、十三、學校財産ノ総額 略)



教員養成ニ必要ナル施設

現下ノ帝国ハ最モ真摯ニシテ剛健ナル志想ヲ有スル健全ナル教員ヲ養成スル事ノ最モ急務ナルヲ思ヒ、文部省規定ノ履修学科ヲ授クルニ当リ、平素教育実習ニ関スル指導重点ヲ左記ノ如ク定メ其ノ徹底ヲ期ス

一、教育ノ真精神ト本館主義方針トヲ充分理解セシムルコト

二、教授法研究ノ素地ヲ養成セシメ常ニ先覺的態度ヲ涵養セシムルコト

右ノ重点ヲ達成スルタメ左ノ施設ヲナス

一、指導講話

(イ)教育講話及教員服務講話並ニ実習

毎学期ヲ通シ修身科並ニ倫理科ノ時間ヲ割キ、或ハ隨時教育ノ真精神ヲ説キ特ニ本校ノ精神タル殉国精神ノ内容タル誠意、勤勞、見識、気魄ノ真義及ビ教育者ト其ノ服務規律即チ教育者ハ如何ナル方針ノ下ニ生徒ヲ教育スヘキカ、教師ハ如何ナル基礎ノ上ニ立チテ生徒ヲ誘導啓発スヘキカ、又教育者ハ如何ナル義務ヲ有スルカヲ説話ス、館長及修身科倫理科担当教授之ニ当ル、而シテ之レヲ徹底セシムルタメ学生ノ通学ヲ許サズ全校生ヲ嚴格ナル寮規ノ下ニ寄宿舎ニ収容シ、自治ノ觀念ヲ養フト共ニ和協一致、礼節互讓ノ美德ヲ涵養セシムル大道場ヲラシメ、正規授業時間ノ外、毎朝五時起床一時間朝

ノ校内外大掃除（本校ハ小使、給仕ヲ一切雇傭シ居ラズ）尚一時間武道朝稽古ヲ課シ、放課後夕食前ニ於テモ同様一切ノ掃除、武道稽古、夜九時ヨリ翌朝五時迄寮生交代ニ校内外周囲ノ夜警、不寝番ヲ課シ以テ真ノ教育ノ体得ニ努メ、又最上級生ハ交互二十名ヲ生徒委員ニ任シ寮生徒ノ模範タラシメ、常ニ校風ノ発揚ヲ図リ在校生ノ訓育指導ヲ補佐セシメ以テ飽ク迄真摯ナル教育者ヲ養成スルニ努ム

(ロ) 社会常識涵養講話

毎学期少クモ五回本校関係各方面ノ有力知名ノ人格ノ士ヲ随時招聘、課外トシテ夫々斯道専門的講演<sup>(四)</sup>ニヨリ円満ナル社会常識ヲ涵養セシム

(ハ) 教授法講話ト教授要目ノ研究発表

教育科トシテ藤本教授担当各科教授法ヲ課シ夫々正鵠ナル指針ヲ示シ、三年四年両級生ハ毎月一回本校図書館ニ集合特ニ教授要目研究会ヲ開キ、指示セラレタル指針ニ基キ主トシテ国語、漢文ニ就キ各自研究事項ヲ発表検討セシム

生徒ノ研究ハ可及的本館図書館ヲ利用セシムル様極力図書ノ充実ヲ図ルト共ニ在庫、新着図書ハ勿論購入予約図書ハ出来得ルタケ迅速ニ揭示シ全生徒ニ知ラシメ日曜ヲモ開館シ以テ研究向学心ヲ喚起セシム

(ニ) 武道教授法ノ研究ト其ノ修練法



軍部、警察、青年団、其他有志道場ニ至リ二日乃至三日間ニ亘リ最モ猛烈ナル斯道ノ鍊磨ヲ行フ。開校以来本夏ニ至ル迄実施セル個所ハ南ハ九州一円北ハ栃木、福島、宮城、岩手ノ各県房総各地裏日本ハ長野、群馬等ニ達シ到ル処規律撰生ヲ重シ技術体力ノ養成ニ努メ同時ニ斯道奨励ノ一助タラシム

五、学 校 参 観

学科担当教師引卒ノ上、附近小学校及市内外ノ各種中等学校ヲ選ビ其ノ施設経営ノ一般及ビ實際授業ヲ参観セシム

六、記 録 調 整

校内開催ノ総テノ修養講話ニ於ケル速記、生徒委員日誌、夜警日誌、寮日誌並ニ教育実習ニ於ケル経過所感、批評ノ要領、作業ノ状況反省事項等ヲ録シ提出セシム。

(学科課程及授業時間数 略)

国士館専門學校剣道科調査報告

昭和七年十二月十九日午前九時三十分ヨリ午後七時十五分ニ至ル間、剣道科生徒第四学年二十七名ニ対シ左ノ種目ニツキ調査ス

調査種目

一、口述試験

問題

イ、上段ノ構ト暗眼ノ構トヲ比較シテ各ノ特長ヲ述ベヨ、

ロ、剣道教授案トハ何ゾ、ナホ之レニ記載スベキ重要ナル事項ヲ挙ゲヨ、

二、筆記試験

問題（一時間）

学校ニ於ケル剣道教授ノ目的

三、基本練習教授法

四、術科

イ、形、（大日本帝国剣道形）

ロ、試合

ハ、審判法

以上ノ各種目ニツキテ試験調査セシニ概シテ成績良好ニシテ、中等学校剣道科教員検定試験合格者ニ比較シテ損色ナキモノト認ム。

術科ハ形、試合、審判法、等何レモ相当ナル実力アルモノト認ム。

教授法ニ於テハ、ナホ研究、練習ノ余地アルモノノ如シ、筆記試験ニヨル剣道理論ノ答案ハ、概シテ可ナルモ、ナホ研究ノ要アリ。

口述試験ハ各人ニ就イテ約四分間質問シ応答セシメタルモ成績概シテ可ナリ。

其ノ他道場内ニ於ケル生徒ノ真面目ナル態度ト礼儀作法ノ正シキトハ平常ノ訓練ヨロシキヲ証スルモノアリ

右調査報告ス

昭和七年十二月二十六日

調査事務嘱託

佐藤卯吉印

教員検定委員会御中

調査報告

依囑ニ依リ昭和七年十二月十九、二十日ノ兩日國士館専門學校ニ出張シ其調査ヲ行ヘリ。

學校ノ位置ハ郊外世田ヶ谷松蔭神社ニ隣シ、四隣森林ニ囲マレ生理的ニ亦精神的ニ良好ナリ。

柔道場ハ長サ十六間幅七間ニシテ其設備概良好ナリ、教室ハ未ダ完成ニ到リ居ラザルモ授業ニハ差支ナキモノト認メラル。

十九日最初ニ筆答試験ヲ行フ

一、柔道精神ヲ解説シソノ日本精神トノ關係ヲ論ゼヨ

二、柔道教育ノ主眼點ヲ論ゼヨ

ノ二問題ニ対スル解答ヲ求メタリ。其答案ニヨリ察スルニ、其研究ハ完全ニアラザルモ大体ニ於テ適當ナリ。更ニ乱取ヲ行ハシメタルニ、其成績ハ頗良好ナリ、殊ニ中等學校ノ生徒ヲ指導スルニハ優良ナリト認メタリ、次ニ投ノ形ヲ試験シ翌二十日ニハ固ノ形、極ノ形、柔ノ形ヲ試験シ、形ニ於ケル動作ノ意義ヲ質問セリ。形ノ實際ハ相当ニ修練セラレタルヲ認メタルモ理論ノ研究ハ稍不十分ヲ感ジタリ。

要スルニ來年四月卒業スベキ生徒中受験シタルモノハ普通ニ檢定試験ニ応ズルモ相當ノ成績ヲ以テ及第スル力ハ有スルモノト認メラル。

特ニ賞讃スベキハ館長ヲ中心トセル職員及生徒ノ精神的融和ニシテ上述ノ如キ効果ヲ拳ケタルハコノ融和ニ因スルモノニシテ欣ビテ報告スル所以也。

文部省東普四五六号

昭和八年三月三日

学務課長(印)

普通学務局長(花押)

大臣(花押)

次官(印)

専門学務局長(印)

教員検定委員会長(印)

教員検定常任委員(印)

第二部幹事(印)

公立私立学校卒業者ニ対シ無試験検定ノ取扱ヲ許可シタル学校中告示改正ノ件

村上邦夫(印)



告示案

文部省告示第九十八号

明治四十四年文部省告示第二百四十二号公立私立学校卒業者ニ対シ師範学校、中学校、高等女学校教員無試験検定ノ取扱ヲ許可シタル学校中日本女子高等学院ノ項ノ次ニ左ノ如ク加フ

年月日

文部大臣

国士館専門學校	本科	剣道 柔道	年3月8日	昭和八年三月以後ノ卒業者ニ限ル
---------	----	----------	-------	-----------------

指令案

(東京府へ)

国士館専門學校設立者

財団法人国士館

昭和七年九月十五日申請本科卒業者ニ対シ剣道、柔道ニ付師範学校、中学校、高等女学校教員検定規程第七  
条第二号ノ取扱ヲナスノ件許可ス

但シ昭和八年三月以後ノ卒業者ニ限ル

年月日

文部大臣

通牒案

年 月 日

局 長

東京府知事宛

國士館専門學校教員無試験檢定許可申請ニ関スル件

昭和七年九月十九日付、申学第一〇六三三五号ヲ以テ文部大臣宛標記ノ件進達ノ処、本科卒業者ニ対スル国語、漢文ハ詮議相成ラサルコトニ省議決定シタルニ付、可然御伝達相成度

備 考

本件ハ

昭和八年一月二十三日教員檢定常任委員会ニ附議ノ結果、本科卒業者ニ対スル剣道、柔道ハ許可トナリ、国語、漢文ハ不許可トナリタルモノナリ、

国語成績報告（不良）ハ聖心女子学院高等専門學校ノ件ニ添附シアリ<sup>㊦</sup>

六 昭和九年一月 國士館高等拓植學校廢止認可書（国立公文書館所蔵）

戊学第九三九八号

昭和九年十一月一日

東京府知事 香坂昌康<sup>(印)</sup>

文部大臣 松田源治殿

私立学校廢止ノ件報告

國士館高等拓植學校<sup>(種)</sup>廢止ノ件本日認可候

七 昭和一二年六月 國士館専門學校教員無試験檢定許可申請書（国立公文書館所蔵）

公立私立学校卒業者ニ対シ無試験檢定ノ取扱ヲ許可シタル学校中告示改正ノ件

告示案

文部省告示第二五二号

明治四十四年文部省告示第二百四十二号公立私立学校卒業者ニ対シ師範学校中学校、高等女学校教員無試験  
 検定ノ取扱ヲ許可シタル学校中國士館専門學校ノ項ヲ左ノ通り改正ス

年六月二十二日

文部大臣

國士館専門學校		本科	
国語	剣道柔道	昭和八年三月十五日	昭和八年三月以後ノ卒業者ニ限ル
昭和十一年月日			昭和十一年三月以後ノ卒業者ニ限ル

指令案

國士館専門學校設立者

財団法人 國士館

昭和十年九月十七日申請昭和十一年三月以後ノ本科卒業者ニ対シ国語ニ就キ師範学校中学校高等女学校教員  
 検定規程第七条第二号ノ取扱ヲ為スノ件許可ス

年 月 日

文部大臣

備考 本件ハ昭和十一年三月三十日ノ常任委員会ニ於テ可決セシモノナリ

〔(表紙)〕

〔(東京府經由印)〕  
昭和十年九月二十八日

亥学第八九四四号

東京府經由

師範学校、中学校、高等女学校

申請書

国語科教員無試験検定許可

国士館専門學校

公発第一九四号

昭和十年九月十七日

國士館専門學校設立者

財団法人 国 士 館

理事 副 島 義

一<sup>\*</sup>  
①

文部大臣 松田源治殿

師範学校、中学校、高等女学校

国語科教員無試験検定許可

申請

本校ハ現時教育界ノ風潮ニ鑑ミ剛健ナル心身ヲ有シ国家的自覚アル中等教員養成ノ緊要ナルヲ痛感シ此ノ方針ノ下ニ武道ヲ鍛鍊シ兼テ国語、漢文科中等教員タラントスル者ノ為ニ特ニ昭和四年三月十二日創設セルモノニ有之、爾來創立ノ趣旨ニ則リ内容ノ整備、校風ノ作興ニ深甚ナル注意ヲ払ヒ優良教師ノ招聘ト共ニ学生ノ入学ニ関シテハ極メテ嚴密ナル考查ト優秀者ノ選抜ニ努メ教職員亦身ヲ以テ教授訓育ニ精進努力セル結果、昭和八年三月第一回以降ノ卒業生概ネ武道国語、漢文科教員トシテ教育界ノ認ムル所トナリ現在学生亦品性学力並ニ体格ニ於テ共ニ所期ノ成果ヲ収ムルヲ得、随ツテ本校卒業生ハ中等教員トシテ充分其資格ヲ具スルモノト存ゼラレ候ニ就テハ、此際特別ノ御詮議ヲ以テ明、昭和十一年三月以降ノ本科卒業生ニ対シ御規定ニ依ル師範学校、中学校、高等女学校教員無試験検定御許可相成度別紙必要書類相添へ此段及申請候也。

\*1 副島義一 明治—昭和時代前期の法学者、政治家。慶応二年一月五日生まれ。肥前佐賀出身。帝国大学卒、ベルリン大学に留学。憲法学者として最も早く天皇機関説をとなえた。明治四〇年早稲田大学教授。大正九年衆議院議員に当選。昭和五年中華民國国民政府法律顧問となる。一〇年国士館専門學校理事。昭和二二年一月二七日死去。八二歳。著作に『日本帝国憲法論』などがある。

八 昭和一四年 國士館松下村塾景松塾紀要（法人記録史料）

國士館松下村塾

景松塾 紀要

東京世田ヶ谷 國士館専門學校

同 中學校

同 商業學校

吉田松陰先生の松下村塾から、久坂玄瑞、高杉晋作両士始め木戸贈従一位、伊藤・山縣両公爵、山田伯爵  
其他多数英傑の輩出した事は誰も知るところであるが、我景松塾は、先生を景仰して已まぬ本校教職員学生

生徒が、國土館に理解ある大方諸賢の協力を得て、村塾を摸造し、之を校内國土神社境内に建設し、以て修養道場たらしめたのである。

塾舎建築に當つては其の竣成の上は、百年以上の星霜を経たる古き松下村塾に彷彿たらしむることを眼目とした。此の目的で、建築諸材料は、悉く萩地方に於いて先生に由緒のあるものを苦心蒐集し、同地松下村塾附近に於いて、一々村塾の寸法に合せ乍ら之を切り、之を削つて、一度現地で組立て、識者の批評を経たる後、東京に輸送したのである。

使用の木材と屋根瓦は、元毛利藩の代官屋敷で、後、郡役所庁舎に用ひ、郡制廃止後山口県の管理に属し居たる建物を、縁故払下を受けて之を解体して得た古材木古瓦より取つたものである。尨が偶然にも、此の代官屋敷の用材の約三分の一は、松陰先生の養母の生家なる森田豊吉氏所有の山林から伐採したもので、屋根瓦は、阿川と称する元毛利藩の御抱瓦職の焼いたもので、今でも各瓦の一端に角に阿の字の刻印を認むることが出来る。

土台下及塾舎周囲の土留の丸石は、松陰先生生家杉家の眼下を流る、水無川の月見河原から拾ひ集めたもので、其の数約四百個、壁下の木舞用及雨樋用の竹材も、壁の上塗用の土も、全部村塾に使用しあるものと同質のものを、萩から輸送して来たのである。殊に右の石は、村塾の夫れと大小恰好の等しきものを、一一村塾の石に並べて敷いた上、之に順序番号を付して輸送し来り、其の据付現況に近似することに努めたので



ある。松陰先生の門人が、先生に対する幕府の処置を憤慨の余り、村塾十畳の間の柱に切りつけたといふ刀痕も、亦詳細に摸してある畳の敷方、障子襖の引手の形状、附工合を摸したることも勿論である。村塾の二階は所謂踏天井である。先生の時々瞑想され、又休息された所と伝へられてゐるが、是れ亦原形の儘移築されてゐる。先生の使用された机も、似寄の木同一寸法で、萩で作つて塾に据ゑた。

景松塾標は萩の松陰神社司市川一郎氏の手を煩らはした。

### 建築経過大要

昭和十三年三月 建設計画発表、景松塾建築一切を引受け呉れたる萩市松本の厚東常吉氏は、同市に於いて建築諸材料の蒐集木取り木組に力を注ぐ。其の間尾高校長萩市に出張、諸般の打合を為す。

同年十一月十八日 萩市より大工左官等上京、同日建築諸材料東京に到着。

同年同月十九日 府社松陰神社々司奉仕、教職員学生生徒一同参列の下に地鎮祭執行、即日起工。

同年十二月七日 竣工、修祓式執行。

昭和十四年一月十四日午前國士館大講堂に於いて竣工報告式、同日午後九段軍人会館に於いて景松塾竣工記念吉田松陰先生を偲ぶ会を開催。

(尾高武治識<sup>\*1</sup>)

\*1 尾高武治 東京控訴院部長、弁護士、早稲田大学講師。早稲田大学では仏法、仏語、文化特修、政治及び経済特修などの科目の教鞭をとる。大正期～昭和初期にかけて著書多数（『民事商事に関するあらゆる種類の訴と其の裁判』ほか）。昭和十一年一月財団法人国士館理事代行となり、昭和十二年二月国士館専門學校長事務取扱及び国士館中學校事務取扱に就任。

九 昭和十四年三月 国士館専門學校興亜科新設ニ付学則變更認可申請書（国立公文書館所蔵）

私立専門學校学則中變更認可ノ件

指 令 案

国士館専門學校設立者

財団法人国士館

昭和十四年三月十日附申請学則中變更ノ件認可ス

年 月 日 文 部 大 臣

備考

本件ハ本校ニ興亜科<sup>\*</sup>ヲ新設セントスルニ依ル学則變更認可申請ナリ

一、興亜科設置要項

1 設置理由 (別紙)

2 修業年限 三ヶ年

3 生徒定員 三六〇名(各学年一二〇名)

4 学科課程 (別紙)

5 教員 初年度 専任八 兼任七

二年度 〃 一一〃 一三

三年度 〃 一七〃 一九

6 教室 六教室

7 維持経営ノ方法 授業料収入等ヲ以テ支弁ス

8 授業開始年月日 昭和十四年四月

二、学則改正箇所

1 第二条「本校ニ本科及研究科ヲ置ク」トアルヲ

「本校ニ武道国漢科、興亜科、研究科ヲ置ク」ト改ム

2 第三条 「本校ノ修業年限ハ本科四年研究科一年乃至二年トス」トアルヲ

「本校ノ修業年限ハ武道国漢科四年、興亜科三年、研究科一年乃至二年トス」ト改ム

3 第四条 「本校ノ生徒定員ハ本科四百名トス」トアルヲ

「本校ノ生徒定員ハ武道国漢科四百名、興亜科三百六十名トス」ト改ム

4 第五条 武道国漢科学科課程ノ次ニ興亜科学科課程ヲ加フ

5 第二十八条 「授業料ハ本科生ハ一ケ年金百円トス、但シ分納スルコトヲ得」トアルヲ

「本科生ハ」ヲ削除ス

〔表紙〕

〔東京府經由印〕  
昭和十四年三月十五日

卯学第二〇九八号 東京府經由

学則変更申請書

昭和十四年三月二十<sup>十</sup>木日

國士館専門學校設立者

財団法人國士館

代行事尾高武治<sup>①</sup>

文部大臣荒木貞夫殿

学則變更認可申請

今般本校学則ヲ別紙ノ通り變更致度ニ付御認可相成度此段及申請候也

第二条 「本校ニ本科及ビ研究科ヲ置ク」ヲ左ノ如ク更ム

本校ニ武道国漢科・興亜科・研究科ヲ置ク

第三条 「本校ノ修業年限ハ本科四年、研究科一年乃至二年トス」ヲ左ノ如ク更ム

本校ノ修業年限ハ武道国漢科四年、興亜科三年、研究科ハ一年乃至二年トス

第四条 「本校ノ生徒定員ハ本科四百名トス」ヲ左ノ如ク更ム

本校ノ生徒定員ハ武道国漢科四百名、興亜科三百六十名トス

第五条 学科目及び其ノ程度左ノ如シ

武道国漢科（異状ナシ……別紙要覧参照）

興亜科左ノ如シ（次頁参照）

第二十八条 「授業料ハ本科生ハ一ケ年百円トス、但毎月分納スルコトヲ得」ヲ左ノ如ク更ム

授業料ハ一ケ年百円トス、但毎月分納スルコトヲ得

科目	学年		
	第一学年一週時間	第二学年一週時間	第三学年一週時間
日本国家学	一	一	一
修身	一	一	一
支那語及支那時文	一一	一一	一一
憲法	二		
民法		二	
商法		二	
国際法			二
滿支法制			二
東亞經濟地理	二		
東亞經濟事情		二	

英語	蒙古語	選択課目	計	武道	教練	植民政策	商業数学及珠算	会計学	簿記	商品学	貨幣銀行金融	財政学	経済学	貿易実務	商工経営	商業通論	産業組合論(合作社)	滿蒙支民情及宗教	東亞建設原理	東亞農業經濟論	東亞協同經濟論	東洋思想史	東洋政治学
			三九	六	二		二		(商業簿記) 三				二			二		一	一				二
			三八	六	二				銀行簿記 工業 原価計算 三	一	二							一	一				二
			四三	六	二	二						二		二	二		二		一	二			二

変更理由

今般左記理由ニ依リ興亜科新設ニ供ヒ学則ヲ変更スルモノナリ

一、國士館専門學校入学志願者ハ殆ンド中等學校ニ於ケル劍柔道選手ニ限定サレタル実状ニシテ、假令國士館ノ教育ヲ渴仰シ入学ヲ切望スル優秀人材アルモ武技優秀ナラザルガ為ニ入学シ能ハザル狀況ナリ。故ニ國家ノ現状ト國士館建学ノ本旨ニ鑑ミ広ク人材ヲ募リ其ノ他校ニ類例ヲ見ザル文武両道兼備ノ國士館教育ニ依リ徹底的ニ鍛鍊シ國家有用ノ人材ヲ輩出セシメント欣求スルニアリ。

一、有為人材ノ輩出ハ國家興隆ノ原動力ナリ。有材ノ輩出ハ教育ニ俟ツモノ最モ大ナリ。實ニ教育ノ興廢ハ則チ國家ノ盛衰ニ懸ル重大問題ナリ。殊ニ皇國ノ現状ハ未曾有ノ躍進的非常時局ニ直面セリ。興亜ノ大業即チ今次聖戰ノ目的貫徹ハ永年ニ亘ル堅忍不拔ノ拳國的戮力協心ト鍛鍊セラレタル優秀人材ノ現地ニ於ケル奮闘ニ依ラザルベカラズ。所謂新東亞建設ノ成否消長ハ一ニ東亞建設ノ聖業ニ従事セル日本人殊ニ日本青年ノ人物如何ニ存スルモノト思考ス。知育偏重シ德育体育之ニ添ハザレバ如何ニ有材タリト謂フモ跋行的ニシテ奉公ノ全キヲ期スル能ハズ。即チ如何ニ識見アリトスルモ其ノ理想ヲ實踐シ得ル大氣魄体力ナクバ東亞ノ大業ヲ率先躬行スルヲ得ズ。故ニ興亜科ヲ新設シ広ク人材ヲ募リ之ニ國士館的猛訓練ヲ施シ修養鍛鍊セシメ且学識ニ依リ東亞建設ノ真髓ヲ把握確認セシメ以テ滿蒙支ニ於ケル行政、商業、經濟並ニ社会教化ニ関スル公私ノ事業ニ従事スベキ人材即チ真ニ東亞康寧ノ礎石タリ得ル國士的人物ヲ輩出セシメント



スルモノナリ。

國士館専門學校興亜科収支予算書

		(昭和十四年度)	(昭和十五年度)	(昭和十六年度)
収入ノ部				
一、授業料		一、二、〇〇〇 (学生数一二〇人)	二、四、〇〇〇 (学生数二四〇人)	三、六、〇〇〇 (学生数三六〇人)
二、入学検定料		六〇〇 (全右)	六〇〇 (学生数一二〇人)	六〇〇 (学生数一二〇人)
三、入学金		六〇〇 (全右)	六〇〇 (全右)	六〇〇 (全右)
四、教練費		八四〇 (全右)	一、六八〇 (学生数二四〇人)	二、五二〇 (学生数三六〇人)
五、寄附金		三、〇〇〇		
計		一七、〇四〇	二六、八八〇	三九、七二〇
支出ノ部				
一、給料		九、六一五	一四、〇二五	二〇、七六〇
専任教員給		四、八〇〇	六、九六〇	一〇、四四〇
兼任教員給		一、九三五	三、八二五	六、二四〇
主事、学生監給		二、〇四〇	二、〇四〇	二、〇四〇
事務員給		八四〇	一、二〇〇	二、〇四〇
二、諸費		九四〇	一、九八〇	三、四八〇
旅費		二〇〇	一、〇〇〇	二、五〇〇
雑給		二四〇	四八〇	四八〇
手当		五〇〇	五〇〇	五〇〇

三、備用品費	圖書費	一、八〇〇	二、一〇〇	二、二〇〇
	備用品費	五〇〇	六〇〇	七〇〇
四、消耗品費		一、三〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇
	消耗品費	一、〇九五	一、二九五	一、四六〇
	印刷費	三〇〇	三〇〇	三〇〇
	通信運搬費	四〇〇	四〇〇	五〇〇
	電灯電話費	三〇〇	四〇〇	五〇〇
五、学生諸費		九五	一九五	一六〇
	教練費	一、五九〇	二、三八〇	三、五二〇
	研究奨励費	八四〇	一、六八〇	二、五二〇
六、修繕費		七五〇	七〇〇	一、〇〇〇
七、広告費		五〇〇	一、五〇〇	一、八〇〇
八、雑費		一、〇〇〇	一、五〇〇	二、〇〇〇
九、寄宿舎新築積立金		五〇〇	五〇〇	五〇〇
計		一七、〇四〇	二六、八八〇	三九、七二〇

〔附記〕興亜科会計ハ特別会計トス

教員組織

初年度ニ於テ

専任教員八名

兼任教員七名

二年度ニ於テ

専任教員一名 兼任教員一名

三年度ニ於テ

専任教員一七名 兼任教員一九名

計 専任教員 一七名

兼任教員 一九名

三六名

教室配置（別紙図面参照）

附記 現在武道（国漢）科第一学年生ヲ收容セル寄宿舎ハ教室六室ヲ使用セルモ目下建築準備中ノ寄宿舎完

成セバ直チニ移転スベキヲ以テ来年度ヨリハ七教室ヲ使用スル事ヲ得。

尚興亜科使用寄宿舎モ新寄宿舎設立ニ供ヒ收容力増大スルヲ以テ適當ニ配置收容スル事ヲ得ル予定ナ  
リ

新学年度ヨリ国士館専門學校ニ興亜科ヲ新設セントスルニ当リ之ニ供フ前記学則變更ニ関シ理事職務代行者  
連名ヲ以テ之ヲ承認ス

昭和十四年三月十日

財団法人國士館

理事職務代行者	末永 一三 <sup>*2</sup> Ⓔ
同	尾高 武治 Ⓔ
同	細川潤一郎 Ⓔ
同	立花 定 Ⓔ

〔國士館専門學校要覽〕略

\*1 興亜科 國士館では、昭和一四年、専門學校に興亜科（修業年限三年、定員一二〇人）を新設し、武道国漢科（剣道・柔道・弓道、定員計一三〇人）・興亜科・研究科に改組した。興亜科は、専門學校卒業生である大澤衛・藤原繁・中原稔などが中心となり新設された。昭和一六年四月には、陸軍中将菊池武夫を擁立して創設された興亜専門學校（現亜細亞大学）へ全学生が移籍し、興亜科は廃止となった。興亜科の新設は、戦時色が強まり、「東亜建設」の人材養成といった時代の要請によるところが大きく、この時期多くの学校で興亜科が新設されている。

\*2 末永一三 福岡県出身。北日本汽船初代社長、大阪商船副社長、大民監事。大正一一年一月財団法人國士館理事及び評議員に就任。昭和一一年一月からは理事職務代行となり、昭和一六年三月

まで務める。

一〇 昭和一六年四月 国士館専門學校興亜科廃止ニ付学則変更認可申請書（国立公文書館所蔵）

東專二七一号 裁決定四月二十四日

昭和十六年四月十八日起案

学則中変更認可ノ件

案

国士館専門學校設立者

財団法人 国士館

昭和十六年四月二日附申請学則中変更ノ件認可ス

年月日

文部大臣

（備考）

國士館専門學校ノ興亜科ヲ廢シ、ソノ生徒ヲ新設ノ興亜専門學校ニ転入学セシムル為、学則中一部変更セントスルモノナリ。

(興亜専門學校ハ四月八日設置認可アリタリ)

学則変更ノ件認可申請

(東京府経出印)  
昭和16年4月12日

已学第一五七六号東京府經由

國士館専門學校学則中一部別紙ノ通り変更致度ニ付御認可相成度此段及申請候也

昭和十六年四月二日

財団法人國士館

理事職務代行 尾 高 武 治印

文部大臣 橋 田 邦 彦 殿

(一) 理 由 書

今般財団法人國士館理事会ノ決議ニ依リ國士館専門學校興亜科ヲ解消シ、右在学生ハ新設興亜専門學校へ転入学致サセ度候ニ就テハ國士館専門學校学則一部変更致度候

(二) 学則変更ノ条項

第二条中 「興亜科」ヲ削除

第三条中 「興亜科三年」ヲ削除

第四条中 「興亜科三百六十名」ヲ削除

第五条中 左ノ項ヲ削除ス

興亜科		科目	第一学年一週時間	第二学年一週時間	第三学年一週時間
		日本国家学	一	一	一
		修身	一	一	一
		支那語及支那時文	一一	一一	一一
		憲法	二		
		民法	二		
		商法		二	
		國際法			二
		滿支經濟地理	二		二
		滿支經濟事情		二	
		東洋政治学			二
		東洋思想史	二		
		東亞協同經濟論			
		東亞農業經濟論		二	
		東亞建設原理	一	一	一
		滿蒙支民情及宗教	一		一

計	昭 和 十 五 年 入 学 生	昭 和 十 四 年 入 学 生	年 度 生
	四 九	三 七	一 二
			人 員

国士館専門學校興亜科  
ヨリ興亜専門學校へ転入学ノ生徒人員

選 択 課 目	蒙 古 語	英 語	露 西 亜 語
	二	二	二
	二	二	二
	二	二	二

簿 記 (商 業 簿 記)	商 業 通 論	商 工 經 營	貿 易 實 務	經 濟 學	財 政 學	貨 幣 銀 行 金 融 學	商 品 學	會 計 學	商 業 數 學 及 珠 算	植 民 政 策	教 道 練	武 道	計
三	二		二						二		二	六	三 九
(銀 行 簿 記) (工 業 簿 記) (原 価 計 算)													三 八
三	一	二											四 三
													三
													六
													二
													二
													二



〔國士館専門學校要覽〕略

一一 昭和一七年三月 國士館専門學校學則中變更認可書原本（国立公文書館所蔵）

東專九二号 裁決定三月二十六日

昭和十七年三月十九日起案

學則中變更認可ノ件

指令案

國士館専門學校設立者

財団法人國士館

昭和十七年一月七日附申請學則中變更ノ件認可ス

年三月二十六日

文部大臣

(備考)

従来総定員ヲ以テ定メタル生徒定員ヲ一学年ニ入学セシムベキ定員ニ改メ且ツ昭和十七年四月ヨリ武道

地歴科ヲ新設セントスルモノナリ

新定員左ノ通り

武道国漢科 一〇〇名 (従前ノ一学年昼定員ニ同ジ)

武道地歴科 一〇〇名

武道地歴科新設ノ理由

武道ト共ニ地理歴史ヲ課シ我国体観念日本精神ニ徹底シ同時ニ世界大勢ニ精通シ牢呼タル精神ト剛健ナル体軀ヲ有シ東亜共栄圏確立ノ為働キ得ル人材ヲ養成セントス

教室ソノ他設備ニ不足ナシ、図書、掛図、標本等充実ノ予定ナリ、教員予定表別紙ノ通り。

國士館専門學校學則變更認可申請

昭和17年2月10日

午学第四四五号 東京府經由

今般本校学則ヲ別紙ノ通り変更シ昭和十七年四月ヨリ実施致度ニ付御認可相成度此段及申請候也

昭和十七年一月七日

國士館専門學校設立者

財団法人國士館理事

柴 田 德 次 郎 印

文部大臣 橋 田 邦 彦 殿

変 更 理 由

本校ハ従来武道（劍道、柔道、弓道）兼修国語漢文科ヲ教授シ創立以來既ニ六百八十五名ノ卒業生ヲ出シ夫々斯道ノ中等教員トシテ中等学校ニ就任シ相当ノ成績ヲ挙げ教育界ニ定評アル次第ナルカ教育界ノ要望ト入学者ノ志望特ニ大東亜戦争勃発スルヤ帝国ノ地位ニ大变革ヲ来タシ旧態ヲ維持スル能ハス一大飛躍ヲ要スルニ至リ東亜共栄圈確立ノ為メ第一線ニ立チテ此事業ニ膺ルヘキ有為ナル青年ヲ養生スルハ現下最モ喫緊ナリ、然シテ之ニ当ルニハ幾多ノ困難ヲ伴ヒ不便不自由ヲ忍ヒ寒暑困苦ニ耐ヘ如何ナル誘惑ニモ動セサル牢呼タル精神ト剛健ナル体軀ヲ有シ且実務ニ長ケ实用ニ適シ然モ還境内外人ト相和シ能ク共存共栄ノ実ヲ挙げケルヘキ円満確實ニシテ然モ一見識ヲ有シ専心努力スルモノタラサルヘカラス、茲ニ於テ本校ハ武道ニ於テ心身ヲ鍛

鍊シ加フルニ地歴科ヲ設ケ我国体觀念日本精神ヲ徹底シ、我国情ヲ明徴知悉セシムルト同時ニ世界大勢ニ精通シ認識ヲ深ムル事ノ最モ専要事ト思惟シ茲ニ本認可ヲ申請セントスル所以ナリ

國士館専門學校學則規定

第二条ヲ左ノ如ク改ム

本校ニ武道国漢科、武道地歴科及研究科ヲ置ク

第三条ヲ左ノ如ク改ム

本校ノ修業年限ハ武道国漢科、武道地歴科各四年、研究科一年乃至二年トス

第四条ヲ左ノ如ク改ム

本校一学年ニ入学セシムヘキ定員ヲ左ノ通り定ム

武道国漢科 一〇〇名

武道地歴科 一〇〇名

第五条ヲ左ノ如ク改ム

第五條 学科及び其程度左ノ如シ  
 武道国漢科

					経法 制 濟及	衛生 生 理	歴 史	漢 文	国 語	心 論 理 学	教 育	修 身	武 道 史	武 道			第一学年	毎週授 業時数
						一	一	講 読、 作 文	講 読、 作 文	論 理 学 大 要	実 践 倫 理	武 道 全 般 ノ 變 遷 發 達	実 理 修 形 論			二 二 二		
	四	二	(二)	(二)				東 洋 史	同 上	心 理 学 大 要	教 育 史	倫 理 学	同 上			二 二 二		第二学年
	四	二	(三)	(三)		一	一	西 洋 史	講 読、 作 文 漢 文 学 史	講 読、 作 文、 国 語 学 史		東 洋 倫 理	同 上			二 二 二		第三学年
	四	二	(二)	(二)	二	一	一	九	八			一	一			二 二 二		第四学年
	四	二	(二)	(二)	一			一	一		教 育 学 教 授 法	国 民 道 徳	同 上			二 二 二		第五学年
	四	二	(二)	(二)				一	一		一	一				二 二 二		

武道ハ之ヲ剣道、柔道及弓道ノ三種トシ、三種ノ内一種ヲ必修科目トス、外国語ハ英語、支那語ノ中一種ヲ必修科  
 申トシテ選択スルモノトス

武道ハ之ヲ剣道、柔道及弓道の三種トシ、三種ノ内一種ヲ必修科目トス 附則 本改正学則ハ昭和一七年四月一日ヨリ施行スルモノトス	合計				生理衛生	歴史	地理	論理心理	教育	修身	武道	学科学目年	武道地歴科
					生物学	東洋史	地理学	論理学		実践倫理	理論、実習、武道史	第一学年	
	四四	二	二	一	同上	一〇	一〇	二	一	一四	時数	毎週	
					同上	史料講習上	世界地理気象学上	心理学	教育史	倫理学	同上	第二学年	
	四四	二	三	一	同上	一〇	一〇	一	一	一四	時数	毎週	
					衛生学	同上	地理教授法上			東洋倫理	同上	第三学年	
	四四	二	二	二	一	同上	一〇			一	一四	時数	毎週
				経済	史料講習上	地理教授法上		教育学教授法	国民道德	同上	第四学年		
四四	二	二	一		一〇	一〇		一	一	一四	時数	毎週	

決 議 書

國士館本部ニ於テ理事会ヲ開催シ國士館専門學校學則中一部變更シ昭和十七年四月ヨリ之ヲ実施スルノ件決議セリ

記

- 一、現行學則中ニ武道兼修歴史地理科ヲ新ニ設ケ關係条文ヲ變更スルコト
- 一、經營上經費ニ不足ヲ生ジタルトキ及臨時費ヲ本財団ニテ之ヲ負担スルコト
- 一、前記ノ趣旨ニ依リ學則變更ヲ主務官庁ニ申請スルコト

昭和十六年十二月二十六日

財団法人國士館

理事

柴田德次郎 (印)

岩倉 正雄 (印)

花田 半助 (印)

小坂 順造 (印)

松野 鶴平 (印)

松田 道一 (印)

変 更 要 旨

一、新ニ武道地歴科ヲ加フ

一、従来本校総定員ノ規定ヲ一学年ニ入学セシムヘキ定員ニ改メ且ツ武道地歴科一〇〇名ヲ増ス

(各学年武道地歴科一〇〇名、武道国漢科一〇〇名、計二〇〇名)

一、臨時費中特ニ図書費ハ毎年經常費中ニ相当額ヲ計上ス

一、収支予算ハ増加分ニ付計上ス

共通科目担任者ニハ相当給料ヲ増加ス

一、教授科目ニ依リ学級ヲ編成ス

一、教室其ノ他ノ設備ニ不足ナシ

(以下、略)



一一 昭和一七年三月 國士館高等拓殖學校設立認可書 (國立公文書館所蔵)

午学第五四五号

昭和十七年三月二十三日

東京府知事 松村光磨 (公印)

文部大臣 橋田邦彦 殿

私立學校設立ニ関スル件

管内東京市世田谷区世田谷一ノ一〇〇六財団法人國士館代表理事柴田徳次郎ヨリ國士館高等拓殖學校(種)設立ノ件、本日認可候条左記事項ヲ具シ及開申候

記

一、名 称 國士館高等拓殖學校(種)

二、目 的 滿蒙支及南洋ニ發展セントスル國士の人材ヲ養成スルヲ目的トス

三、認可年月日 昭和十七年三月十日

四、開設年月日 昭和十七年四月一日

五、位 置 東京市世田ヶ谷区世田ヶ谷一ノ一〇〇六

六、設 立 者 財団法人 国 士 館

七、生 徒 定 員 二〇〇名

八、学 則 別紙ノ通り

國士館高等拓殖學校學則

第一章 総 則

第一条 本學校ハ滿蒙支、南洋ニ發展セントスル国士的人材ヲ養成スルヲ目的トス

第二条 本校ニ滿蒙支科、南洋科ノ二科ヲ置ク

第三条 本校ノ修業年限ヲ一年トス

第四条 本校ノ定員ヲ二百名トス

第二章 学期及休業日

第五条 本校ノ学年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終リ左ノ三学期ニ之ヲ分ツ

第一期 自四月一日至八月三十一日

第二期 自九月一日至十二月卅一日

第三学期 自翌一月一日至三月三十一日

第六条 本校ノ休業日左ノ如シ

一、日曜日、祝祭日

一、國士館記念日

一、夏季休業 自八月十一日至八月三十一日

一、冬季休業 自十二月二十五日至翌年一月七日

一、春季休業 自三月二十一日至三月三十一日

第三章 学科目及授業時数

第七条 本校ノ学科目及毎週教授時数左ノ如シ

滿蒙支科

(附別者註)  
(南洋科脱力)

学科目 毎週教授時数 学科目 毎週教授時数

実践倫理 二 実践倫理 二

国 法 国 法

支 那 語 馬來語及英語

移植民政策 移植民政策

滿洲及中国国家機構

南方諸国国家機構

滿蒙及地方自治制度

南方産業事情

日滿支統制經濟

各地重要資源

商業資源

南洋地理及海運

商業及簿記学

南方民族史

武 道

商業及簿記学

武 道

其ノ他課外講義、見学ヲ為サシムルコトアルベシ

第四章 入学休学及退学

第八条 本校エ入学シ得ベキ者ハ左ノ各号ノ一二該当スル者ニシテ詮衡ノ上許可セラレタル者トス

一、中等学校以上ノ卒業者

一、年齢十六歳以上ノ者ニシテ担当ノ学力アル者

第九条 入学志願者ハ所定ノ入学願書、履歷書、学業成績証明書、身体検査書（戸籍謄本）手札形写真ヲ添

へ提出スヘシ

第十条 入学ヲ許可セラレタル者ハ所定ノ誓約書ニ戸籍謄本ヲ差出スヘシ

第十一条 休学セントスル者ハ所定ノ願書ヲ提出シ許可ヲ受クヘシ

第十二条 退学セントスル者ハ所定ノ願書ヲ提出シ許可ヲ受クヘシ

第十三条 左ノ各号ノ一二該当スル者ハ退学ヲ命ス

一、性行不良ニシテ改悛ノ見込ナキ者

一、学業成績不良ニシテ成業ノ見込ナキ者

一、正当ノ事由ナクシテ一ヶ月以上欠席シタル者

一、授業料ヲ納付セサル者

第五章 成績考査及卒業

第十四条 成績考査ハ学業ニ付各学期末ニ之ヲ行フ考査標準ハ別ニ之ヲ定ム

第十五条 卒業ハ学業成績及操行ヲ考査シテ之ヲ認定ス

第十六条 卒業者ニハ卒業証書ヲ授与ス

第六章 学 費

第十七条 学費左ノ如シ

一、入学考査料 三円

一、入 学 金 五円

一、授業料年額 九十六円（月八円分納ヲ許ス）

第十八条 授業料毎月五日迄ニ納付スヘシ

第十九条 一旦納付シタル学費ハ事由ノ如何ニ拘ハラズ還付セサルモノトス

第七章 賞 罰

第二十条 學術優秀品行芳正ナル者ハ特ニ之ヲ表彰ス

第二十一条 教育上必要ト認ムルトキハ左ノ懲戒処分ヲ為ス

戒飾、謹慎、停学、退学

一三 昭和一八年三月一八日 國士館高等拓殖學校新設ニ付德富蘇峰宛柴田德次郎書簡

（財団法人德富蘇峰記念塩崎財団所蔵）

德富老先生

侍史

謹啓

御大事之御静養之処誠に恐縮至極に奉存候へ共専門學校に開拓科新設候付、佐藤陸軍・岡海軍両軍務局長に<sup>\*1</sup>最も有力に懇談之為め折入つて御高教賜はり度く花田理事御引見仰上げ度く奉懇願候 敬具

三月十八日

柴田徳次郎

徳富老先生

侍史

\*1 佐藤陸軍・岡海軍両軍務局長 佐藤軍務局長は佐藤賢了、岡軍務局長は岡敬純。佐藤賢了は陸

軍大学卒業後、アメリカ駐在を経て、主に軍政畑を進み、昭和一七年に陸軍省軍務局長に就任。岡

敬純は海軍大学卒業後、軍令部勤務、昭和一五年に海軍省軍務局長となる。

一四 昭和一九年六月 國土館専門學校学則中変更認可書原本（国立公文書館所蔵）

学專九八号 裁決定六月一日

昭和十九年五月二十七日起案

私立専門学校学則変更ノ件

指 令 案

國士館専門學校設立者

財団法人 國 士 館

昭和十九年二月三日附申請学則中変更ノ件認可ス

年 月 日

文 部 大 臣

(備考) 教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク

尚授業料等ノ増額ハ教員ノ優遇、教育施設ノ改善充実ヲ図ランガ為

変更条文

第一条ノ目的ハ全面的ニ改正ス

第二条中武道国漢科武道地歴科ヲ剣道科・柔道科・弓道科トナシ各科ノ専攻ヲ国語、地理・歴史ト

ナス



第三条 各科四年ヲ三年トナス

第四条 各科百名ノ入学定員ヲ剣道科百名、柔道科八五名、弓道科一五名

第五条ノ学科課程ヲ別紙ノ如ク改正ス

尚授業料入学金、入学検査料ヲ改正ス

旧 新

授業料	一三〇円	一五〇円	二〇銭
入学金	五円	一〇円	五ク
入学検査料	五円	一〇円	五ク

以上ハ昭和十九年四月ノ入学者ヨリ適用

学則變更認可申請

今般國士館専門學校学則ノ一部ヲ變更シ昭和十九年四月ノ入学者ヨリ実施致度ニ付御認可相成度此段及申請候也

昭和十九年二月三日

文部大臣子爵岡部長景殿

國土館専門學校設立者 柴田徳次郎印  
財団法人國土館理事

変更理由

時局下教育ノ事益々重大ヲ極メ大東亜建設ノタメ百年ノ計ヲ立テザルベカラズ、而シテ其ノ職ニ当ル者ノ責モ亦重且大ヲ加フ此ノ時ニ当リ其ノ任ヲ全フシ益々教育報國ノ実ヲ挙ケシムルニハ殉國ノ精神ヲ涵養シ以テ専心教育ニ尽瘁セシムルコトノ重要ナルコトハ言ヲ俟タザレ共一方其ノ生活ノ安定ヲ期スル事モ極メテ緊切事タルコトヲ思惟ス

茲ニ於テ学則ノ一部ヲ変更シ其ノ大部ハ教員ノ優遇ニ当テルト同時ニ一方教育施設ノ改善充実ヲ図リ以テ益々本校教育ノ發展ヲ期セントス

第三条 第五条 第十条 ノ変更ハ教育ニ関スル非常措置方策ニ基ク

國土館専門學校学則

第一条中「國土館」ノ次ニ「創立」「本領」ヲ「趣旨」ニ「真摯堅実ナル」ヲ「修文練武ニ依リ殉國ノ」

ニ改メ「兼テ」ノ次ニ「斯道ノ」ヲ挿入ス

第 二条中「武道国漢科武道地歴史」ヲ「剣道科、柔道科、弓道科」ニ「置ク」ヲ「置キ」ニ改メ「置キ」ノ次ニ「各科ノ専攻ヲ分チテ国語、地理、及ビ歴史トス」ヲ挿入ス

第 三条中「武道国漢科、武道地歴史四年」ヲ「剣道科、柔道科、弓道科三年」ニ改ム

第 四条中「武道国漢科一〇〇名武道地歴史一〇〇名」ヲ「剣道科一〇〇名柔道科八五名弓道科一五名」ニ改ム

第 五条中ノ学科及其程度ヲ別紙ノ通り改ム

第 十条中「一中等学校ヲ卒業シタルモノ」ヲ「中等学校卒業者及四年修了者」ト改ム

第二十六条中「入学考査料金五円」ヲ「金拾円」ニ改ム

第二十七条中「入学金五円」ヲ「金拾円」ニ改ム

第二十八条中「授業料本科生ハ一ヶ年金百三十円」ヲ「百五十円」ニ改ム「但シ」以下削除

附則第一条 第二条 第三条 第四条 第五条 第十条 第二十六条 第二十七条 第二

十八条ノ変更規定ハ昭和一九年四月ノ入学者ヨリ之ヲ適用ス

(以下、略)

一五 昭和二十二年一月 國士館高等拓殖學校廃止ノ件開申（国立公文書館所蔵）

教総収第四八九七号

昭和二十一年一月廿一日

東京都長官 藤 沼 庄 平印

文部大臣 安 倍 能 成 殿

私立学校廃止ノ件開申

標記ノ件世田谷区世田谷一ノ一〇〇六番地國士館高等拓殖學校設立者財団法人國士館ヨリ申請有之昭和二十  
年十二月三十一日限廃止ノ件本日認可候ニ付及開申候也

## 国士館教育の原点とは・・・



国士館教育の原点を、先人の言葉から探ってみましょう。国士館が世田谷の地に移転した1919(大正8)年に開催した、国士館開館式でのこと、初代学長であった長瀬鳳輔は、「国士館の主旨」について披露します。

長瀬はまず、国士館の「主旨は極めて簡単明瞭で、即ち国士たるべき人材を養成しようとするのであります」と説明します。続いて、育てるべき「国士」像について、次のように述べます。

「士」とは、昔の「さむらい」という意ではなく、今日では「真の人格者」のことである。これに「国」が付くから「真の国家を思う大人格者」が「国士」のことである。

ところで、英国の人格者といえば「ジェントルマン」で、和訳で「紳士」と訳す。紳士は、多少資産もあり、身成りも立派でなければならないが、我々のいう「国士」は、貧富や容姿に関わらず、心さえ美しくあれば良いのだから、「ジェントルマン」より「遥かに優れている」のである。そして、国士館は、このような「真の国士」を育てるのだ、と・・・。

国士館教育が目指すもの、人材育成の原点は、この長瀬の言葉に示されています。



評伝

頭山満 (二)

— 大アジア主義への傾注 —

岩間 浩



朝鮮の金玉均亡命の際に、福沢諭吉も頭山の玄洋社も共に金を支援したが、福沢の「我が国は隣国の開明を待つて亜細亜を興す猶予なし。西洋の文明国と進退をともし」すべしとする「脱亜論」に対し、頭山らは、アジア諸国を同胞と見、あくまでもアジアの西洋植民地状態の解消と独立を支援とする「興亜論」を採った。英国を先頭とする西洋列強が、東洋諸国にとって不平等な条約を押し付け、民衆に十分な教育を与えず、かたくなな清国の鎖国的政策につけこんで、アヘン持ち込みによる民族弱体化政策を謀り、国内の勢力を分断させて国力を弱体化させる分割統治といった、巧みな植民政策が東洋諸国で行われていたが、道義を第一義とする頭山にとって、西洋列強のこうした覇権主義はとうてい我慢のならないものであった。大正一三（一九二四）年の米国による「排日法案」なども許しがたいものであった。

『頭山満翁正伝』は、頭山を代弁してこう記している。「彼らの文化は科学の文化であり、功利主義の文化である。この文化を人類社会の間に用ゐたものが即ち物質文明である。物質文明は飛行機爆弾であり、小銃大砲であつて、一種の武力文化である。歐洲人はこの武力文化を以て人を圧迫する。これを中国の古語では霸道を行ふといふのである。わが東洋においては従来霸道文化を軽蔑し、この霸道文化に勝つた文化を有してゐるのである。この文化の本質は仁義道德である。仁義道德の文化は人を感化するものであつて、人を圧迫するものではない。又人に徳を抱かしめるものであつて、人に畏れを抱かしめるものではない。斯かる人に徳を抱かせる文化は、わが中国の古語では之を王道といふ。亜細亜の文化は王道の文化である」。

頭山自身も「大西郷遺訓を読む」でこう述べている。「日

本が道義の大本とならんければならぬ。それが日本の世界に国するの大使命ぢや。そして先づ近いところで支那と印度と相提携して、立派な仁義道德の理想国を作るのぢやな<sup>(2)</sup>」。

そこで以下に、具体的に頭山らによる中国の孫文並びに蒋介石支援とインドのチャンドラ・ボース支援を中心に頭山像を追っていく。

## 1 孫文支援

孫文（字・孫逸仙）（一八六六一—一九二五）は、中国広東州の中農の家に生まれ、やがて香港の医学校を首席で卒業、マカオ・広州で開業したが、漢民族を支配する清朝に対し、民族意識を強くし、医業を離れて革命運動に専念するようになる。

日本では、議会政治家の犬養毅（一八五五—一九三二）が、中国における革命の動きに強い関心を持ち、大隈外相を説いて外務省から調査費を出させ、宮崎滔天（一八七〇—一九二二）らに南中国の実情を調査させた。宮崎らは孫文がロンドンを離れて日本に来ることを知り、急遽帰国して、明治三二（一八九九）年三月に孫文と待望の会見を行うことができた<sup>(3)</sup>。宮崎滔天は、熊本出身で、徳富蘇峰の大正義塾、東京専門学校（のちの

早稲田大学）英学部、熊本英語学校などで学び、兄の影響で中国革命を支援し、革命的アジア主義者になろうという志を立てていた。この会見で宮崎は孫文の思想、見識、情念に強く魅了され、以後同志となり、孫文の日本拠点作りに狂奔する。この年、犬養は、清国との関係悪化を気遣う外務省を説き伏せて、孫文の東京滞在の許可をもらい、彼を玄洋社の平岡浩太郎、頭山満らに紹介し、その協力を求めた。その結果孫文は、日本における有力な援助者を得ることになる<sup>(4)</sup>。かつて犬養は民党の立場、頭山は政府寄りの立場と、立場を異にしたが、以後、両者はその立場を離れて、アジア諸国の独立のために共働することになる。宮崎は孫文を伴って頭山を訪れ、両者は相知りあい、終生固い信頼を保ち続けた。頭山は孫文と会うなり、その人物の尋常ならざるを見抜いた。彼は孫文について、「日本に来た時の孫先生は三十台、蒋介石は四十ちよつと。孫さんは一見してその人を知る。志は、天下にあり。一身、一家を念とせず。楽しみは読書、金銭は念とせず<sup>(5)</sup>」と評している。また、頭山を通して、玄洋社員で炭鉱事業に成功した平岡浩太郎や安川敬一郎らが、亡命中の孫文の財政支援を行うに至る。頭山はこのころのことをこう語っている。

「孫か、あれは近来での人物じゃ。自ら信ずる所厚き

ものがあつた。俺の行く方について来いという風じゃつた。私欲の念などは絶えて無かつたね、その辺なども他とは異なつておつた。人の先に立つ男じゃつた。孫は俺の家の隣に住まわせた。往き来の出来る様に隣家と俺の家の間の壁を打ち抜いて、そこから往き来して朝晩話し合つた。孫は(合計)四年間程居つた<sup>6)</sup>。(一部現代かなづかいに改めた著者)。

東京を拠点とする明治三〇年のフィリピン独立運動支援の失敗や、明治三三年の広東・惠州での蜂起失敗の後、明治三八年、東京での三派(興中会、華興会、光復会)合同による「中国革命同盟会」が結成され、孫文が総理に選ばれ、機関誌『民報』を発行して政治綱領として民族・民権・民生の「三民主義」を掲げた。このころ、日本には清国留学生が多数おり、その中に黄興、蒋介石など革命を志す者がいた。この会の結成式のための秘密会議は、赤坂の玄洋社員・内田良平(一八七四—一九三八)宅で行われた。日本における革命志士の動向を警察などが監視していたが、霊南坂の坂本金彌氏の別荘をこっそり借りて、首尾よく「中国同盟会」を組織し、孫文は総裁に、黄興が実行部長に、宋教仁・張継らは幹事となつて、各地方との連絡、運動の実行に当たることになり、東京に本部を、上海、香港、新嘉坡<sup>シンガポール</sup>らに支部を設け、革

命工作を促進し、後に、機関誌『民報』を発行して、章炳麟<sup>へいりけん</sup>(一八六九—一九三六、孫文、黄興と並ぶ「革命三尊」の一人)、汪兆銘<sup>わうせうめい</sup>(一八八三—一九四四、一時孫文の側近)らが首脳となつてこれに力を注ぎ、日本その他から中国内部に続々同志を派遣して革命運動を進め、その



神戸オリエンタル・ホテルでの頭山満(前列右)、孫文(中央)、大久保高明(前列左)、後列右より藤本尚則、李烈鈞、戴傳賢、山田純三郎(藤本尚則『頭山満翁写真伝』より)



結果第一革命になった。その際、頭山などが上海に赴き、孫や黄等の革命運動を陰で援助した。<sup>(7)</sup> なお、ちょうど明治三八年の五月に、日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を殲滅させるということがある、この事件は孫文はもとより、東洋の独立を志す人々を大いに鼓舞した。

孫文は、大正一三（一九二四）年一月に日本を再度訪問したときに、後世に残る神戸での演説「大アジア主義」中で、日露戦争が始まった時、自分はヨーロッパにおり、（日本軍勝利を）全ヨーロッパは悲しみ、英国人は眉をひそめたが、スエズ運河で働くアラビヤ人たちは、歓喜したことを述べ、「ヨーロッパの文明は進歩し、科学も工業も進歩し、武器も強大で、どうしてもアジアはヨーロッパに抵抗できず、永久にヨーロッパの奴隷にならないかならないと考えていました。ところが、日本人がロシア人に勝ったのです。ヨーロッパに対してアジア民族が勝利したのは最近数百年の間にこれがはじめてでした。この戦争の影響がすぐ全アジアに伝わりますと、アジア全民族は、大きな驚きと喜びを感じ、とても大きな希望を抱いたのです」（一部簡略化した著者）と振り返っている。

日露戦争は明治三七年二月に始まり、これに呼応して「満洲義軍」が形成され、翌年八月のポーツマス条約調

印によって終結したが、超えて明治四四年「辛亥革命」時期には、「満洲義軍」参加者の蒼野らが東京から武昌へとせ参じる。大連からも参加者があり、湖北・湖南から毛沢東を含める大勢の学生が集まる。これに対して北京政府は袁世凱<sup>えんせいがい</sup>の革命軍討伐軍を派遣する。組織編成も弱く、訓練も少ない革命軍は敗れたが、南京では革命軍が勝利し、中国全土に革命の機運が満ちる。

この情報を得た孫文は、急ぎ米国から帰国し、南京で臨時大統領に選ばれ、翌年一月一日に中華民国が発足した。いわゆる「辛亥革命」である。

中国革命同胞会メンバーに、日本から玄洋社メンバーや宮崎滔天、北一輝ら<sup>(8)</sup>が加わり、革命支援に奔走した。明治四四年一月にまず犬養が中国に渡り、続いて二月に頭山が渡った。五七歳の時である。頭山の影響力は、革命を目指す中国人及び在留日本人に及んだ。上海租借地を拠点に活動中の、利権中心の日本不良浪人たちが租借地の治安を乱していたが、「頭山満が玄洋社の一行をつれて到着したというだけで、その威風は不良浪人の策動を制圧した。まじめに革命を援助しようとする志士浪人は、革命党に対して、大きな発言権のある頭山の周辺に結集して、その意見を統合することになった」<sup>(9)</sup>。「革命戦線を擾乱する不良浪人には剛勇無双の玄洋社壯士を使

者に立てて、即時退去を命じてまったく鎮圧した<sup>10</sup>。この時、中国に渡った頭山と犬養は、袁世凱との妥協に走ろうとする「南北妥協案」に反対だった<sup>11</sup>。

また、もしこのとき、フランス革命時のように、外国の国家権力が革命制圧を目的に干渉の軍を動員すれば、革命勢力はこれに対抗すべくもなかった。日本陸軍の將軍たちは、山縣有朋をはじめとして、すべてとわいていほど中国の共和主義に反対で、中国に共和政が出現するのを望まなかった。そこで、陸軍の要人を歴訪して、日本の中国への干渉的出兵反対を強く主張したのが、玄洋社の別組織「黒竜会」(その名は満洲とロシアの間を流れる黒竜江に由来する)の内田良平と玄洋社の頭山の僚友・杉山茂丸すぎやましげまる(一八六四—一九三五)であった。ついに、時の西園寺内閣は、不干渉政策を表明して出兵しなかった。このように内田や杉山の説得工作が成功した背後には、頭山・犬養が自ら渡海して、革命戦線に臨んでいる事実、その指導下の日本浪人らが決死敢闘して革命を援助している事実があった。これが軍部への説得工作に、大いに迫力をもつことになった。頭山にとつて、隣国が共和政になろうと、日本国体への信仰が絶対的なものであつて、革命援助の信念は微動だにしなかった<sup>12</sup>。

南京での孫文に対し、北方にいた軍閥の袁世凱は、革

命政権との妥協を申し入れてきた。頭山をはじめとする日本の浪人たちはこぞつて、このマキャベリストとの妥協に反対し、頭山は、東京帝大の国際法学教授の職をなげうって革命政府の顧問になっていた寺尾亨(一八五八—一九二五)と共に、南京に孫文を訪ね、袁世凱との妥協反対、北上中止の勧告を行った。「孫文が北京に乗り込むことになると、下手をすれば殺されかねず、決して孫文は北京に行くべきではなく、反対に袁世凱を南京に呼び寄せるがよい」と頭山が孫文に諄々と説いた<sup>13</sup>。犬養もまた、後に同様の勧告をした。頭山にとつて袁世凱は、韓国独立党の盟友・金玉均を追放した当事者であり、金暗殺の扇動者と考えられていたのである。結局この忠告に従つて孫文は北京行きを思いとどまったものの、軍資金不足で人材も不足していた孫文は、袁世凱と妥協せざるを得ず、日本側をいたく失望させた<sup>14</sup>。この時を以つて頭山はいったん帰国し、革命の破たんを予言した。

結局、妥協の結果孫文は大統領職を袁世凱に譲り、袁世凱は独裁支配を強化した。孫文は、大正二年春、前中華民国臨時大統領として来日し、日本各地で大歓迎され、二月から三月にかけ約四〇日間滞在した。この間、福岡市の玄洋社や、熊本県荒尾市の宮崎滔天家を訪れて歓迎を受けた。頭山は東京での歓迎会で孫文と再会した。

孫文が中国に帰ると、事態は暗転していた。三月二〇日に孫文と並ぶ革命家の同志・宋教仁が上海で袁世凱の刺客に暗殺された。この結果、革命派は反袁世凱で結束し、七月に孫文を中心に各地で挙兵し、「第二革命」を起したが、武力、資金力で勝る袁の軍に鎮圧された。救いを求めて孫文は日本に向かったが、袁との関係を深めていた日本政府は、孫文の入国を認めない方針であった。神戸港からの電信で事態を知った萱野長知の相談を受けた頭山は、彼に金銭を持たせ神戸港に急行させた。菅野は、刑事や新聞記者の目をかいくぐって孫文を信濃丸から小舟で連れ出して逃れた。一方で頭山は、犬養に依頼して首相・山本権兵衛を説得させ、山本にしづぶ孫文の亡命を認めさせた。船が岸壁につくころ、きわどいところで内密に上陸させるといふ許可が下りた。<sup>(16)</sup>このようにして、孫文は、東京・靈南坂（現・港区赤坂）の頭山邸、隣接する海妻邸、寺尾邸という三名の福岡出身者の家にかくまわれ、暗殺の危機から救われた。この時、隠れ家・海妻邸で日夜、袁世凱の放った刺客から、護衛として守り抜いたのは、「玄洋社の豹」と呼ばれた中村三郎（天風）であり、滞在費は玄洋社社員で明治鋳業社長の安川敬一郎（一八四九—一九三四）がもった。<sup>(17)</sup>

孫文は東京で、大正三年に国民党を改組して「中華革

命党」を組織し、党総理に就任する。また、東京の梅屋庄吉邸で、梅屋夫妻が媒酌人となり孫と宋慶齡との結婚式が行われ、犬養、頭山、内田良平、宮崎滔天、小川平吉ら五〇名ほどの日本人が出席してその結婚式を祝わった。<sup>(18)</sup>結局孫文は「第三革命」のために帰国する大正五年四月まで、二年と二六〇日間日本に滞在し、その生命が頭山らによって守られたのである。その後、大陸に渡った孫文は、「第三革命」を起して、袁世凱の帝政運動を挫折させる。やがて彼は、大正一三年、中国国民党第一回全国代表大会に臨み、連ソ、容共、扶助工農の三大政策が決定され、反帝国主義・反軍閥を明確にし、また、各地の演説で「三民主義」政策を明らかにした。彼は一月に日本を再度訪問し、神戸オリエンタル・ホテルで頭山と会見した。頭山はこの時、日華両民族が結んで、インド独立のために闘えば、日華の国民感情は友好的なものになること、だが、この共同戦線は、ただ西洋への敵愾心で結ばれただけではいけない、解放戦勝利ののちは、決して敵愾報復の精神などに支配されない高度の文明世界を築かなければならないことを語った。<sup>(19)</sup>これが孫文と頭山の最後の会談であった。その後、孫文は神戸で歴史的「大アジア主義」の演説を行ったが、その論旨は、言葉こそ違っても、この会談で頭山が孫文に語ったとこ

ろと、ほとんど同じであったと言える<sup>(20)</sup>。主旨は、アジア諸国は、西洋の覇道的民族支配を廃して、アジアに共通な王道思想に基づく、連帯と諸国の自立を目指すべしというものであった。この演説後、孫文は帰国し、四か月後に北京で病に倒れた。頭山は友人総代として、菅野長友を派遣しなぐさめめたが、孫文は大正一四年三月一二日に肝臓がんで逝去した。享年五八歳であった。最後の言葉として、「革命いまだ成らず」が伝えられた。新中国国父として、孫文の壮大な中山陵(中山は孫文の号)が南京で造営され、「英霊奉安祭」が昭和四(一九二九)年六月一日にその場所で営まれたとき、頭山・犬養らは国賓として迎えられ、南京国民政府主席・蒋介石ら要人と共に参列し、また、同夜の感謝の歓迎晩さん会にも出席した<sup>(21)</sup>。その後、昭和一〇年三月一二日には、東京・明治神宮外苑の日本青年会館で孫文「十周年忌慰霊祭」が行われ、哀悼の神事が執り行われた。頭山は賛助代表として出席、上野精養軒における追悼の晩餐会では、中華民國公使らの謝辞ともに頭山は約二〇〇名の参加者の前で挨拶した。挨拶嫌いの頭山にとっては異例のことであった<sup>(22)</sup>。

頭山は、同志らと共に後に国父と呼ばれる孫文を困難な時期を通して、終始一貫支え続け、アジア諸国独立の

英雄らを通して、アジア諸国の独立を強く願っていたのである。したがって、明治四三年八月二日に調印された日韓併合に頭山は不満を感じていた<sup>(23)</sup>。

## 2 インド独立運動の志士ビハリ・ボースへの支援

東洋諸国への先進列強国による植民地支配に憤慨し、東洋諸国の独立運動を支援しようとする頭山の意図は、中国・孫文を越えて、インド、フィリピン、ベトナム、アフガニスタン、エチオピアへと広がった。ここでは、特にインド独立運動の志士ラーズ・ビハリ・ボース(Rash Behari Bose 一八八六一一九四五)を取り上げる。

ボースは、明治一九(一八八六)年にインド・ベンガル地方に生まれ、幼少期にカルカッタ(現コルカタ)北部の仏領シャンデル・ナゴ(現チャンドン・ナガル)で育つ。彼が一五・六歳のころ、インドの大乱を描いた『サラット・チャンドラ』を読み、インド独立運動に目覚める。その小説は主人公が国のために命を捨てるというテーマを扱ったものであり、ボースはこれを読んで、国のために犠牲になろうと決心し、軍人になって英国に対して革命を起そうと考えた。軍人になる夢は果たせなかったが、仲間たちにこの理想を語った。折しも、日露戦争が起こり、日本の勝利に力を得、多くのインテリ青

年が、インドが独立国になるべきだと考えるようになったので、ボースは青年運動の指導者となって、武力革命を計画し、大正九（一九二〇）年に日本に亡命するまでその計画実行に従事した。<sup>24</sup>この間彼は、インドの森林研究所化学部門で働き、明治四三年には、森林研究所営林署長に昇進する。翌年、ベンガル地方の独立運動指導者 M・L・ロイ（一八九三—一九五四）と出会い、また、英国の文化・思想を批判する宗教的愛国者オーロビンド・ゴシユ（一八七二—一九五〇）を知り、大きな影響を受ける。大正元年一二月、デリーへの遷都を祝うパレードの最中、ハーディング総督に爆弾を投げつけ重傷を負わす事件を起こす。翌年五月、イギリス官憲にボースの素性が知れたため、逃亡生活に入り、彼の身には多額の懸賞金がかけられる。大正四年二月二日に、ラホール兵営の決起を発端とする北部インド全域にわたる革命を企てたが、事前にこれを英国側が察知したために失敗に終わり、日本への亡命を目指す。

それまでの首都カルカッタ（現コルカタ）は民衆における独立の機運が強く、植民地政府はカルカッタを危険地帯と見て、首都をデリーに移すに至った。

ちょうどこのころ、著名なインドの文学者・思想家の R・タゴール (Rabindranath Tagore 一八六一—

一九四一) が日本に行くというインド紙の予告記事を読んだボースは、この機会を利用して、自分がタゴールの親戚で、日本に学びに行くこととして、P・N・タゴールという偽名を使って切符を購入し、大正四年五月、日本郵船の讃岐丸に乗船しカルカッタを出港した。これは功を奏し、カルカッタやシンガポールでの官憲の調査をすり抜け、香港でも危ういところをなんとか通過し、神戸の税関もパスし、新橋に到着した。ボースは、昭和一四年初版の、藤本尚則『頭山精神』（大日本頭山精神会発行）収蔵の、彼の回顧録「頭山先生に助けられた話」で、頭山とボースの出会いを以下のように述べている（一部現代かなづかいに改めた）著者。

「丁度その頃に支那の孫文が日本へ亡命して来て頭山先生、寺尾先生などの世話になっておりました。その孫文のところへ米国に居る支那人の友人から私が日本に来るといふ手紙が来て居った。（中略）孫文は前から私を捜して居りました。所が私は知らないのです。（中略）それならどんな人か逢ってみよう、印度の問題には多少共鳴するかもしれぬと考えて、孫逸仙の所に行きました。逢つて見ると非常に喜んで、あなたが何処に来て居るか」と、東京中をサンバぐ探して居った。と話してくれた。『どうせこの儘では隠れて居られない。其中暴露てしまうか



ら今の中に日本の色々な指導者に会って置いたら宜からう。第一は頭山満、それから寺尾さんなどを私が紹介しましょう」と、孫文が例の宮崎滔天氏(宮崎龍介氏の父)―日本の孫文の友人でありました。其人に連れられて、初めて頭山先生のところへ行つた。その時は日本語も何も分らないので英語で話した。宮崎滔天氏が少し宛頭山先生に通訳する。それから寺尾さんにも会って色々話しました。頭山先生に会って十日と経たない十一月二十八日に退去命令が来た。その退去命令にはビー・エヌ・タールと書いてあるがどうして私であるということが日本政府に分つたかと色々想像もし、調べもして見た。(中略)直ぐ孫逸仙のところへ行つたら、『それは危ないく、もう見付かった。余程気を付けなければならぬ』。それから一週間も経たない中に六本木警察署から呼出があつた。(中略)直ぐ孫逸仙の所へ行つて相談し、頭山先生の所へ行つて、先生暫ういう訳です。とその命令を出しました。頭山先生は斬く考えて居られて、『できる限りお力沿へします』と静かに言われた<sup>(25)</sup>。

のちにボースをかくまうことになる中村屋の相馬黒光は、「先生はいつもの大きな静かさで聴かれて「そうか」それから「できるだけ尽力しましょう」とほつりと言われた。先生はそういう風の方で、一言でも余計なことは

仰しやらない。孫逸仙から聴いて知っているボースは、先生の一言を力強く感じた。先生が一言でもやって見ようと言われたら、ほんとうにやる考えがあつた<sup>(26)</sup>。決して軽々しく口を開く方ではない」と回顧している。

その後、ボースが新聞人の有力者を訪問したことなどで、この件で各新聞が政府を攻撃し、閣僚の中には内閣がつぶれても退去させるべきではないと強く主張する者があり、大隈首相は病氣になつて寝込んでしまった。期限が切れる前日の一二月一日に頭山からボースに来るように連絡があり、(赤坂靈南坂の)頭山邸に行くと、刑事が四名ほど付いてきて、頭山家に入ると、外で待つていた。頭山宅にはすでに二〇人ほどが詰めており、ボースと、同志のインド人青年ハランバ・L・グプタが入室するとすぐ、いきなり二重マントを着せられ、(玄洋社員)の宮川一貫に連れられ、台所を通り、狭い路地を抜けると大きな(やはり玄洋社員)の杉山茂丸の自動車に乗せられた(頭山家と寺尾家は隣接し、つながっていた)著者。中には、支那浪人の佃信夫と(新宿パン店)中村屋主人の二人がいた。その後、明るい夜店に案内されすこし休んだ後、今度は番頭に、ボースが着用したマントを着せて乗らせ、再び自動車で東京中をぐるぐる廻つて、半蔵門かどこかで車を降りた。運転手に人物を

わからせないための替え玉工作であった。

一方、頭山宅では、刑事が待くたびれており、夜二二時ころに女中が門を閉めようとすると、刑事が女中にインド人の客について尋ねたが、もう帰ったとの答である。刑事は頭山に、先生、逃がすとなると私どもの首が飛びます、と言うと、「君たちの首はどうなってもよいじゃないか。そのためにインド四億人の民がすくわれるではないか」との返事であった。

三か月後、時の外務大臣・石井菊次郎及び小池政務局長と、頭山及び寺尾亨（元東京帝国大学法科大学教授）の四名が赤坂の三河屋で会見し、英国大使館にわからないように、ボースを政府として保護することになった。このようにいきさつをボースは述べた後、少年時代に抱いた夢であるインド及びアジア諸国の独立のために努力する旨の意気込みを語っている。<sup>(28)</sup>

当初、ボースと、インド人のもう一人の同志グプタとが新宿中村屋敷地内裏にある西洋館二階の六畳間（アトリエ）にかくまわれることになったが、トイレはあるものの、日中もカーテンでしめきられ、外出もできず、形は牢屋に幽閉されたような状態であったため、グプタは耐え切れず、大川周明宅へと疾走してしまう（彼はその後渡米してメキシコへ渡った）。しかし、ボースはその

環境を意に反さず、耐え忍ぶことができた。<sup>(28)</sup> このようにして、ボースは、新宿中村屋（パン食店）の相馬愛蔵・黒光夫妻の家のアトリエに隠れ住み、相馬家の庇護を受けるとともに、他所を転々として、六年間ほどの地下生活を送ることになる。

ボースは逃亡生活のあいだにほとんど独力で日本語習得に努め、小学国語読本巻一二を読破するまでになっていたが、英語が話せる連絡役がどうしても必要であった。しかしその仕事に頭山配下の者が当たれば目につく。かといって事情の知らぬ者には頼めない。ちょうど相馬夫妻の娘・俊子が女子学院の高等科に進み、寄宿生活をするうちに英語が堪能になっていた。

隠れ家に通ううちにある日、頭山からボースとの結婚を頼まれていた俊子は、自らボースとの結婚を決意する。<sup>(29)</sup> 大正七年のことであった。媒酌人は、頭山満夫妻がつとめた。こうして、長男・正秀、長女・哲子が生まれた。ボースは大正一二年に日本に帰化し、晴れて表に出られる身になったが、それまでの練り返された転居に、狭い部屋、日光の当たらない生活と、心身の過度の緊張から、妻俊子は弱り、大正一四年に亡くなってしまった。

その後ボースは、『月刊日本』に評論を書いたり、昭和元（一九二六）年の全亜細亞民族会議（長崎会議）に

インド代表として出席したりすると共に、日本に滞在するインド人青年同胞の面倒を見た<sup>30</sup>。国士館でも教鞭をとった。昭和二年、中村屋に喫茶部ができると、本場インドカレーを教え、この文化サロンの人々と交流する。インドカレーは今では新宿中村屋の看板商品である。昭和一二年七月に日中戦争が勃発し、日本は、昭和一六年一二月、太平洋戦争に突入した。ボースは昭和一七年五月のバンコク会議でインド独立連盟の総裁に就任。インド国民軍の最高司令官に就任するも、インド国民軍内で、ボースは日本の傀儡だという不協和音が表面化し、また結核に侵される。翌年、ベルリン亡命中の、ナチス・ドイツに庇護されたインドの大物革命家・チャンドラ・ボース (S. Chandra Bose 一八九七—一九四五) が秘密裏に來日すると、六月、ビハリー・ボースは東京・帝国ホテルでチャンドラ・ボースと対面し、自ら進んで、自分より年少であるが、新進気鋭のチャンドラ・ボースにインド独立連盟総裁の座を譲り、七月のシンガポールでの独立連盟大会で、総裁の交代が正式に決定された。これによってインド国民軍が内部統一された<sup>31</sup>。

個人的にはボースは、長男正秀を第二次世界大戦末期の沖繩戦での玉碎で亡くし<sup>32</sup>、哲子のみが残された。

ボースは頭山らに保護されたことに終生感謝の心を抱

き、恩人たちを毎年一度は招待して、新宿・中村屋で謝恩の会を開き、日本語で心のこもった挨拶をした。『頭山満翁写真真伝』には、昭和七年における謝恩の会の写真と感謝の言葉を話すボースの言葉が残っている。彼は以下のように語った (一部現代かなづかいに改めた著者)。

「私は一九一五年政治上の理由の下に変名して日本に亡命避難した。(中略)「頭山翁に会った時、丁度印度の昔の仏教聖人に会ったような感じがした。白い髭を生やしてじっとして沈黙を守ってすわって居られる頭山翁の姿は、印度の古代の聖者を思い出させたのだ。其後日本政府から退去の命令を受け、危い所を頭山翁に匿くまわれ、後に自由になって今日に至って居る。私が頭山翁を一番尊敬する点は、頭山翁の人類に対する愛情と云う事である。日本人であつても外国人であつても、何所の国の人でも悩み苦しんで居る人の為に頭山翁は何時でも心配されて居るのだ。(中略)一度私は或る米国人の友人を連れて行って翁に紹介したことがあつた。其時、『先生此の人は人間が非常に好くて人にだまされてばかりいます』(と云うと)翁はそれを聞いて静かに次の如く云つた。『そうですか、それはだますよりだまされた方が好いのです』。私が其の事を英語で米国人の友人に通訳する





ボースによる謝恩の会（於新宿中村屋、昭和7年）  
 右から頭山夫人、犬養毅、ボース（後列）、頭山満、内田良平、大崎正吉  
 （藤本尚則『頭山満翁写真伝』より）

と、友人は涙を流しながら、「斯ういう言葉は私として始めて聞いたのだ、斯ういう場合に一般的な人は将来に於てだまされぬ様にと云うべきものなのに、翁の「だますよりだまされた方がよい」と云うた事を聞いて翁が精神的にどれ程進んで居られるかと云う事を確信した」というのであった。（中略）人によつては、翁を浪人の親方或は政治家である様に解する者も居るが、然し翁は其等よりずっと優しくて全人類に対する愛情を持つて居られる」。

ボースの娘・樋口哲子（ボース哲子の結婚後の姓名）は、『父 ボース』の中で、「父が最も落胆したのは、（昭和一九年著者）一〇月に頭山先生がお亡くなりになったときでした。その知らせが入ったとき、私は勤めに出ていたため父のそばにいませんでしたが、父は「そうか」と一言つぶやいて、流れ落ちる涙をタオルでぐっと押さえていたそうです。「病名は何か?」「胃潰瘍だそうです」「ではお苦しみになっただろうな、奥様はお傍におられたか?」「おられたようです」それきり、何も聞きませんでした。父は、一度でいいから、頭山先生を独立したインドにお連れしたいという思いを持っていたようです。できれば、復興が叶ったアジアを、先生とともに廻りたかった。それまでは、何とかがんばろうという

思いでいたにもかわらず、先生がついにお亡くなりになり、がっかりしてしまつたようでした」と回想している。ボースが原宿の自宅で亡くなったのは、昭和二〇年一月二一日のことで、頭山逝去後わずか三か月弱のことであつた。享年五八歳である。

ボースが日本で厚遇を受けたことにより、多くのインド人志士や青年が日本を訪れ、ボースや頭山を頼つた。ボース、孫文、金玉均以外にも頭山満が世話をした外国の人物は多い。ボースの関係では、アフガニスタン政府顧問R・M・プラタープ(プラタップ)、ガンデイ主導の第一次非暴力運動に参加した国民会議派活動家A・M・サーハイ、柔道を習うために来日し、のちボースを支えたデーシユ・パーンデーがある。ほかに、フィリピンの革命指導者で後の大統領アギナルド、フィリピン独立軍の老将リカルテ将軍、情熱的な反米革命家のB・R・ラモスらはたびたび頭山の励ましを求めた。ベトナム独立運動の先駆者コンデイも頭山と親しい関係にあつた。先のチャンドラ・ボースも渋谷の頭山家で大アジア主義の理想について強い励ましを受け、頭山を師父と仰いだ。また、トルコのイブラヒム、ロシアから追放され、東京や神戸に滞在していたイスラム教僧正らを支援し、彼らの回教連盟作りを援助した。イタリアに併合されようと

するエチオピア支援にも乗り出している。

### 3 蒋介石との約束と平和への願い

頭山は、明治三二(一八九〇)年に父亀策を病気で失い、明治二五年に居住地を福岡から東京に移し、明治三〇年には峰尾夫人が子ども達と共に上京し、牛込・納戸に住むようになり、にぎやかになる。このあと、永田町(二丁目六五番地)に一時居を移した後、明治三九年には、北海道夕張炭鉱を売却した資金の一部を使って赤坂・靈南坂(二四番地)に転居し、一七年間ほど住み、ここで孫文やボースらを庇護した。大正四(一九一五)年、頭山が還暦を迎えたころ、破損著しい頭山の家を玄洋社系の実業家・相生由太郎が資金を引き受けて改装した。大正七年に頭山は夜中卒倒し、一時人事不詳になつたことがあつたが、回復した。大正一二年九月に関東大震災があつた。頭山夫妻はこの時、御殿場の小規模な山荘にいて無事であつたが、自宅を焼失し、世田谷の国士館の敷地内の教員住宅に住む長男立助氏など息子らの家を転々とした。しかし、親交のあつた銀行家が土地と屋敷を提供してくれ、旧黒田藩の土地であつた渋谷・常盤松(一二番地)に居を移した。頭山六九歳のときである。以後、亡くなるまで約二〇年間ここに住まつた。

この常盤松時代、すなわち頭山の晩年は、アジア諸国の独立と共存共栄という頭山の想いに反し、日中戦争への突入などの情勢に入っていく。この時代、頭山らは蒋介石、黄興、汪兆銘（汪精衛）など数多くの中国留学生と親交を結び、かれらの独立運動を支援した。

孫文没後の後継者となったのは、文事面では、胡漢民と王精衛、軍事面では蒋介石である。

蒋介石（一八八七—一九七五）は、上海に近い浙江省で塩商人の息子として誕生。九歳で父が死去し、一九歳で革命家孫文の名を知る。二〇歳で渡日、半年ほど東京の清華学校で学び、日露戦争勝利後の日本の情勢を知る。明治四〇年、日本陸軍士官学校留学。このころ「中国革命同盟会」に加入し、孫文を知った。明治四四年の辛亥革命に参加し、先鋭隊の指揮官の一人として杭州を占領した。大正一三年には大本営参謀長となり、のち黄埔軍官学校の校長となる。孫文は国共合作方針を打ち出した後、大正一四年に他界。大正一五年七月、蒋介石は国民革命軍総司令として、全国統一を目指し、広東（現広州）から革命軍を率いて中国北部の軍閥を倒すべく北伐を開始した。翌年四月、「反共政変」を起し、四年間の国共合作を終わらせた。

国共合作を終わらせ、反共路線に転じた蒋介石だが、

その地位は不安定であった。さらに反帝国主義ナショナリズムの沸騰による長江一体の外国人租害地の襲撃（南京事件）や排日運動の中にあつて、彼は党内抗争を避けるべく、昭和二（一九二七）年一〇月、長崎経由で東京に来た。当時の日中関係から、日本ではおおむね彼に冷ややかな反応ではあつたが、彼は頭山家の隣の川野長成宅に数日住み、先師孫文の親友である頭山を朝夕訪ねてその大アジア主義の精神について教えを乞うと共に、その周辺の浪人と親交を得て、将来の日華友好提携を約束した<sup>46</sup>。この時、頭山は蒋介石に、日本に背いてはならないこと、赤化を防止すること、アジアは「徳と力」で一つに団結しなければならないことを強く説いた<sup>47</sup>。

やがて蒋介石は国民党の要請によつて一二月に帰国の途についた。帰国後彼は、翌年四月に第二次北伐戦を行い、七月にそれを完遂した。翌昭和四年、中国を統一した国民政府は、南京に国父孫文のための壮大な中山陵を建設し、六月一日の孫文奉安祭に、頭山満と犬養毅らに革命の援助者・国父の親友として、国賓として招待し、篤く礼遇した。その際、萱野長友<sup>48</sup>ら明治以来の革命支援者十数名が随行し、また、陳少白、胡漢民、戴天仇らの友人が一行を歓迎した。

この日華友好のシンボルというべき孫文奉安祭が行わ



南京における孫文奉安祭(昭和4年6月1日)の前(同年5月29日)の記念写真。右から一人おいて蒋介石、犬養毅、左端頭山満(藤本尚則『頭山満翁写真伝』より)

れた年を最後に、事態は憂慮ある方向に進んでいく。中国国民党のナショナリズムは、孫文が嫌った英米と結び、かつ、友好であった日ソ排撃に向かったのである。国民党政権下の満洲において、張作霖・長作良親子は、ソ連との戦闘を企てたが失敗し、今度は、米英の支援を受け

て矛先を日本帝国に向けて至った。ついに、満洲の関東軍は、日本政府の意図を無視して、昭和六年九月に満州事変を発生させた。頭山にとって最悪の事態であった。折りしも同年一二月、第二次若槻内閣崩壊の後を受けて、頭山とともに三十数年間日華問題の同志として手を携えてきた同じ年の犬養毅が首相として内閣を組閣した。

満洲国建設反対の犬養毅は、就任式が行われたその日に、孫文の支援者であった萱野長友を首相官邸に招き、ただちに南京に飛び、知己の中国要人らと会って、問題解決の端緒をつかむよう依頼した。中国語に堪能な萱野は国民党長老らと懸命な地下工作を行い、和平協定が結ばれる寸前の昭和七年五月一五日、犬養首相が暗殺されるといふ「五・一五事件」が発生した。頭山にとって長年の同志を失うと共に、日華和平の道が閉ざされるといふ痛恨の事態になった。しかも頭山の三男の秀三がこの事件に関与していたのである。「犬養さんとは心を許し合っていた。あの時の祖父は立ち上がれないほど衰弱していました」と孫の大藤実(50)は振り返っている。なんとか日華の直接戦争を回避していた蒋介石は、昭和一二年の盧溝橋事件以来、米英の後ろ盾の下にやむをえず抗日に転じ、日中戦争に突入することになった。日中が相い戦うのは米英を利するばかりであるとして、頭山は病中自ら

書をしたため近衛首相に対し、南京攻略と共に速やかに自らいっさいの行きがかりを放擲して時局收拾にあたるべきだとの進言をするとともに、玄洋社社員・萱野を上海と香港に派遣して、事変の推移を監視させた。しかし頭山の預言に違わず、米英は常に蒋介石の勢力を裏面から操縦して、一歩一歩深みに引き入れ、事変は拡大に向かう。頭山の息子頭山秀三は、日中間を行き来し、中国革命に尽くした萱野と共に和平工作に奔走し、国民党と妥協点を見つけて準備が整ったところで、頭山の登場を求める計画であった。

事実秀三は、昭和一四年春に家族四名と共に上海に滞在し、和平工作を進めた。また、玄洋社社員で朝日新聞副社長の緒方竹虎（一八八八—一九五六）も東久邇宮とともに和平のために、頭山の力を借りようとした。

東久邇宮は、大正九年、兄・久邇宮邦彦親王の娘・良子女王と皇太子裕仁親王殿下とのご婚約問題への頭山の関わり以来、頭山と親交が厚く、昭和四年の国史館専門学校（33）の設置に関し、一二月に国史館視察に及び、以来、国史館並びに頭山らと交流を深めていたのであり、また、日中が戦ってはならないという考えでも、東久邇宮と頭山らとは気脈を通じていた。

東久邇宮稔彦親王（終戦直後の内閣総理大臣）は『私

の記録』にこう回顧している。

「昭和一六年九月のある日。私は頭山満翁に特に来邸を求めて、日華問題について懇談した。日華事変が、年を累ねて解決しないのが憂慮にたえなかつたからである。

頭山翁は、辛亥革命に際し、大養毅氏と共に上海にわたり、旧誼によって孫文、黃興等を援助した。元來、頭山翁は、人の国の衰運に乗じてその領土を盗むようなことが非常に嫌いで、朝鮮の併合も反対、満洲事変も不賛成であったが、殊に日華事変に対しては、日本の軍閥やその亜流の政治家が、独善的な新秩序論を唱えて、非道の侵略を企てることを心から憤っていた。（中略）翁の口から蒋介石に国際平和の提言をすゝめてもらうことを考えたのである。（中略）

こうした考えから、私は頭山翁に

—日華が牆に相せめぐ今日の状態は、お互いに憂慮にたえない。このまゝ、推移すれば、世界の禍乱にならぬとも限らぬ。あなたも既に老齡ではあるが、最後のご奉公として、日華の和平のために一肌ぬいでもらえまいか。重慶に出かけて行ってひと働きやってほしいと思うが、どうだろうか—

というと、頭山翁は、しばらく黙考していたが、やがて



重い口を開いて、たゞ一言

—最後のご奉公をいたしましょう。

と答えた。(中略)

ところが、当時の東条陸相にこのことを話すと、彼は、いやな顔をして言下に

—その時期ではない。そんなことはやめてほしい。と、いう。

東条陸相に話をつけない限り、すべての問題は動きがつかぬからであった。」(一部現代かなづかいに改めた著者) 太平洋戦争が勃発した時も、東条総理に蒋介石に話を進めることを提案したが、彼は、絶対反対であった。

頭山秀三によると、(和平工作に中国に行こうとする秀三に)「中国に行くか。元気で行ってこい。中国が米英と協力して日本と戦う、これは真実ではない。おれは孫文、蒋介石と約したことが真正なる中国の心と信じて疑わない」と頭山は語った<sup>(55)</sup>という。蒋介石は「頭山となら会ってもよい」と伝えてきた。蒋介石が一四年前に頭山邸を訪れ、「両国の交わりを失ってはいけない」と約束したことを忘れてはいなかった。しかし、近衛内閣が総辞職し、陸軍の東条英機が首相になっており、会談は実現しなかった。<sup>(56)</sup>一方、親日派の汪兆銘の対日和平工作は、昭和一五年に南京政府を樹立したまでではよかったが、

謀反者の烙印を押され、失敗に帰した。

いかなる和平工作もかなわず、日中戦争が勃発すると、頭山は息子の秀三を部屋に呼んでこう語った。「ばかなことが始まった。蒋介石氏は日本と中国が助け合わねばならぬことを最も解し得る中国人であることはおれが一番よく知っている。いかなる耐え難い問題が持ち上がるうとも、日華の交わりを失ってはいけない。そのことをおれは蒋介石氏と固く約して別れたのだ<sup>(57)</sup>。また、孫の大藤は、「祖父はいつも、日本と中国は兄弟だ。けんかをするのはいいが、深入りはいかん。最後は日本を救うために、おれが出ていく。蒋介石と会う、と言っていたが、しかし、軍部が祖父を取り囲み、動けなかったのです」と述べている。<sup>(58)</sup>

#### 4 晩年

晩年の頭山は、よく御殿場の山荘に滞留した。そこは富士山が一番よく見える場所を役場の人が見つけ、地元の人が土地を譲ってくれたものであるという。毎朝、百枚もの揮毫をし、終わってから山荘より約一キロの二岡神社に参拝するのを日課とした。昭和一六年に頭山の精神的後継者の長男立助(国士館高等部第二期生)が病没する。昭和一九(一九四四)年一〇月四日、頭山は山荘

の居間で囲碁の棋譜を見ながら、碁盤に向かっている時に倒れ、妻の峰尾に看取られて他界した。享年九〇歳の長寿であった。これを知った中国では、重慶や南京などで弔旗が掲げられ、死を悼む行事が営まれたとい<sup>59</sup>う。

### おわりに

改めて頭山満の生涯と活動とを振り返ると、頭山は、筑前・福岡勤王の志士たちに育てられ、西郷隆盛を敬愛し、その道義主義・徳治主義を受け継ぎ、板垣退助の自由民権思想に感化され、やがてそこから転じて、国権主義へと傾き、最後に、金玉均や孫文やボース支援などを通して、大アジア主義へと軸足を移すダイナミックな人生であった。その底には、一貫して、弱者を励まし支援する道義精神と、徳によって収めることを理想とする東洋的徳治主義が流れていたと言える。

性格を分析すると、終始政治問題にかかわったということ、リーダーシップを主体とする政治家タイプであることは間違いない所であるが、一生、無位・無官を貫いたのであって、代議士になって政権の座にいたり政治の表舞台で活動する政治家タイプではない。無位・無官ということは、一方で「浪人」に分類されるであろうが、

単なる「浪人」とは全く異なる存在であった。無位・無官の人物は、あらゆる地位・肩書がないことであり、純粹に人格そのものがむき出しになって踊り出ている状態にある。つまり、人がその人物と関係を結ぶのは、地位や金銭や権威が目的ではなく、その人物の人格そのものの魅力に魅かれるからである。頭山は、いわゆる右翼と呼ばれるナシヨナリストのみならず自由民権派や左派の人々と人脈があり、政治家、経営者、軍人、文人、庶民などあらゆる階層の日本人に慕われ、ネットワークを築いた。のみならず、韓国、中国、インド、そのほかのアジア諸国の人々と広いネットワークを築いた。それらの数限りない人脈の支援を受けて、彼は、自己の政治的理想念現に向かったのである。西郷隆盛の、「命もいらず、名もいらず、官位もいらぬ人は、しまつに困るものなり」と述べた人物像を頭山に当てはめることができるであろう。

頭山はたびたびの勧めにも拘らず、どのような職にも就くことはなかったが、広い同志的ネットワークから必要な時に必要な経済的支援が常に与えられた。そして人が欲しいと言えば、大切なものであるとうと、お金であるとうとあげてしまった。経済観念がまったくないかと思うと、自然に経済のやりくりがなされた。経済人ではなかつ

だが、金銭を使う達人であった。一時炭坑で八十万両ほど儲けたことがあったが、ひと月と経たないうちに必要ならにあげてしまふ<sup>(60)</sup>という具合であった。彼は、また、芸術やスポーツ方面にもかかわりがあり、決して無粋、無趣味な人物ではなかった。漢詩を吟じ、碁を愛し、囲碁仲間が多数いた。雄渾な書を毎日のように揮毫した。革命家・宮崎滔天は一時浪花節で生計を立てていたことがあったが、彼が中国から康有為及び陳白を伴って頭山邸をたずねると、頭山は琵琶を弾いて彼らを歓待した<sup>(61)</sup>。そして、頭山は絶えようとする筑前琵琶の普及に努めた<sup>(62)</sup>のであり、日本の伝統文化をとぎらすことなく後世に長く伝えたいという思いを頭山は抱いていた。古来九州は相撲の盛んなところであり、頭山は少年時代に近隣の仲間と盛んに相撲を取っていた時期がある。成人してからも自ら相撲をとったのであり、晩年の常盤松の自宅には土俵を持ち、相撲の大好きな国士館の柴田徳次郎とも相撲趣味で気脈が通じていた。彼は、「相撲こそ国技ぢや。全力を打ち込んで、花々しく勝負を決するあの呼吸は武道の気合と同じであり、剣も禅も一如ぢや。(中略)こゝ、二三十年、どんなことがあつても、相撲だけは欠かさん様に観に行きよる<sup>(63)</sup>」と述べている。また、猫をかわいがっていた<sup>(64)</sup>。

性格タイプで、人への愛情価値に生きる人々がいる。医師、看護師、教師、そして母親などである。頭山は海外人を含め多くの人々を愛し、友とした。そういう意味で、愛情・友愛の人と言うことができる。酒は全く飲まず、タバコも吸わなかったが、多くの友人や彼に師事する人、慕う人が周囲に集まった。彼は、政治的価値に生きるタイプではあったが、むしろ権力よりも愛に傾いた珍しいタイプではなからうか。また、いわゆる真理追求に生きる学者タイプではないが、記憶力抜群で、若い頃学問した内容を終生覚えていた。成人してからもよく学んで漢文の素養を磨いた。その学問の仕方は、緻密・綿密かつ実証的に積み重ねるのではなく、直観によって真実を見極めるタイプであり、同じように、人物の真相を瞬間的に見極めた。

頭山は、若い時仙人修行したが、晩年に至り、敬神の人となった。自宅に安置した西郷隆盛の像の上の神棚の前で毎日手を合わせ、毎朝神社に参った。「敬天愛人」を地で行ったのである。諏訪神社を訪れたときには、社前で足袋裸足になり、額を社頭の砂にすりつけんばかりにして礼拝すること極めて丁寧にし、しばしの間頭を上げず、並みいる人は、その敬虔な姿に打たれ、森閑とたたずんでいたが、澄んだ拍手の音に我に返った<sup>(65)</sup>。



以上のように、人がどういう価値を主軸にして生きるのかを分析する了解心理学に基づいて頭山の性格を分析すると、政治家タイプであるのはもとより、それに愛情的要素と敬神的宗教的要素を晩年に色濃く備えた特異なタイプであったと言えよう。柴田徳次郎が頭山と出会ったのは、まさにこの頭山の壮年期後期から老年期にかけての時期であった。この時期の人間関係は、年長者から年少者への教育的感化が強く及ぶ時期である。そのことが、両者の絆を強くしたに違いない。この点は別の機会に論じたいと思う。

しかしまだこれだけでは、頭山という人物を語り尽くしてはいない。西洋的性格分析に加えて、東洋的人格要素に着目した分析を加える必要がある。

頭山を深く信頼した中江兆民は頭山を「頭山満君、大人長者の風あり、かつ今の世、古の武士道を存して全き者は、独り君あるのみ、君言はずして而して知れり、けだし機智を朴実に寓する者といふべし」と評している。

この「大人長者」あるいは「武士道」の権化といい、その表現は東洋の理想的人物像を示している。その理想像は、孟子の「富貴も淫すること能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈すること能わず」とする志を持った「大丈夫」に値する人物像であり、頭山自身が強者を圧する

だけの気魄と力を備えた東洋的「豪傑」あるいは「国士」のモデルであったと言えるのではないか。彼は、寡黙であったがゆえに、無言のうちに伝わる感化力を身に着けていた。また、両極端の思想を包み込むような懐の深さ、深遠さを持っていた人物であった。そしてまた、勤王の伝統を受け継ぎ、皇室を尊敬する念を生涯持ち続けた人物であった。

(完)

\*これまで頭山の大アジア主義との関連で、朝鮮の志士金玉均、中国の改革者・孫文、インドの志士・ビハリ・ボースを象徴的に取り上げたが、この他に頭山が関与したヨーガに基づく実践哲学者・中村三郎(天風)、インドの詩聖タゴール、及び後の昭和天皇の婚約者・良子殿下に関する「宮中某重大事件」などについては、紙幅の関係でここに掲載することが出来なかった。ご理解を賜りたい。

註

(1) 頭山満翁正伝編纂委員会(西尾陽太郎解説)『頭山満翁正伝 未定稿』(葦書房、一九八一年)二七二頁。

(2) 頭山満『頭山満言志録』(書肆心水、二〇〇六年)一  
二九頁。

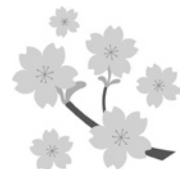
- (3) 前掲註(1)二四三頁。
- (4) 葦津珍彦『大アジア主義と頭山満』(葦津事務所、二〇〇五年) 六五～六六頁。
- (5) 柴田徳次郎編『頭山翁清話』(大民社出版部、一九四〇年) 一五七頁。
- (6) 鈴木善一『興亜運動と頭山満翁』(照文閣、一九四二年) 五五頁。
- (7) 同前五七頁。
- (8) 前掲註(4)一一九～一二二頁。
- (9) 同前一二二頁。
- (10) 頭山統一『筑前玄洋社』(葦書房、一九七七年) 二三一頁。
- (11) 同前二二九頁。
- (12) 前掲註(4)一二四～一二七頁。
- (13) 前掲註(1)二四六頁。
- (14) 前掲註(6)一三〇～一三一頁。
- (15) 前掲註(4)一二八～一二九頁。
- (16) 前掲註(6)五六頁。
- (17) 井川聡・小林覚『人ありて―頭山満と玄洋社』(海鳥社、二〇〇三年) 一七五頁。
- (18) 田所竹彦『孫文 百年先を見た男』(新人物往来社、二〇一一年) 六〇頁。
- (19) 藤本尚則『頭山満翁写真伝』(葦書房、一九八八年) 二六頁。
- (20) 前掲註(4) 一八九頁。
- (21) 前掲註(19) 三七頁。
- (22) 前掲註(17) 一八〇～一八一頁。
- (23) 長谷川義記『頭山満評伝』(原書房、一九七四年) 九五頁。
- (24) 藤本尚則『頭山精神』(大日本頭山精神会、一九三九年) 二三〇～二三二頁。
- (25) 同前二三五～二三七頁。
- (26) 相馬黒光「ラス・ビハリ・ボース覚書」竹内好編『アジア主義』現代日本思想体系9 (筑摩書房、一九六三年) 一七五頁。
- (27) 前掲註(24) 二三七～二四〇頁。この原文は、昭和八(一九三三)年五月の『現代』による。
- (28) 前掲註(26) 一八四～一八五頁。
- (29) 同前一九三頁。
- (30) 相馬黒光「義母となって親しく見たラス・ビハリ・ボース」相馬黒光・相馬安雄『アジアのめざめ』(東西文明社、一九五三年) 三三九頁。
- (31) 前掲註(17) 一八八頁。
- (32) 前掲註(30) 三四一頁。

- (33) 前掲註(19)五四頁。
- (34) 樋口哲子『父 ポース』(白水社、二〇〇八年) 一四二〜一四三頁。
- (35) 同前一七六頁。
- (36) 同前一九二〜一九三頁。
- (37) 浦辺登『靈園から見た近代日本』(弦書房、二〇〇一年) 一〇六頁。
- (38) (39) 前掲註(4)二二九〜二三〇頁。
- (40) 前掲註(19)五五頁。
- (41) 前掲註(23)一二五頁。
- (42) 前掲註(17)一八九〜一九二頁。
- (43) 前掲註(23)九〇頁。
- (44) 同前一一六頁。
- (45) 同前一三四頁。
- (46) 前掲註(4)一九八〜一九九頁。
- (47) 前掲註(19)四〇頁。
- (48) 萱野長知(一八七三―一九四七)は、土佐藩の山内家の系列出身の自由民権論者で、日露戦争時に満洲義軍に参加、長く中国にとどまり、中国通になった人物。
- (49) 前掲註(1)二七六〜二七八頁、久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』(汲古書院、二〇一一年) 三六四頁。
- (50) 前掲註(17)二三一〜二三三頁。
- (51) 前掲註(1)二八一頁。
- (52) 前掲註(17)二三四頁。
- (53) 創立80周年記念事業運営委員会『国士館80年の歩み』(学校法人国士館、一九九七年) 三三三頁。
- (54) 東久邇宮稔彦『私の記録』(東方書房、一九四七年) 五九〜六四頁。
- (55) 前掲註(17)二三五頁。
- (56) 同前三七頁。
- (57) 同前三四頁。
- (58) (59) 同前二五〇頁。
- (60) 前掲註(6)一一四頁。
- (61) 宮崎滔天『三十三年の夢』(岩波書店、一九九三年) 二六頁。
- (62) 前掲註(17)一九四〜一九七頁。
- (63) 前掲註(6)三〇頁。
- (64) 前掲註(23)二一三頁。
- (65) 前掲註(6)六九頁。
- (66) 中江兆民『二年有半・続一年有半』(岩波書店、一九九五年) 八九頁。
- (67) 前掲註(2)九八頁。

調査報告

理事長室企画課所蔵資料調査報告

福原 一成



はじめに

二〇一七（平成二九）年の創立百周年記念事業として、法人が推進している「国士館百年史」編纂事業の一環として国士館史資料室では、基本資料の調査を、法人組織の内外で実施している。法人内部（法人事務部門及び教育学組織）各部署で保存する文書その他の資料が、学校法人の歴史を編纂する上で貴重な記録であることは言うまでもない。

このため国士館史資料室では、一九一七（大正六）年の国士館創立以来、法人内で起案（決済）・発行（発送）・接受された文書（関係書類を含む）の保管状態の把握を行うことを目下の急務としている。しかしながらものによつては、保管文書の検索を可能とする帳簿類が整って

いないものもあることから、その実態を学内各部署について調査することとなった。一昨年度の教務部教務課所蔵資料調査に続き、昨年度は、関係部署の協力を得て、春期に総務部総務課所蔵資料、太宰府キャンパスに所蔵されている太宰府校地関係書類、国士館大学福祉専門学校の設置申請関係書類等、秋期に理事長室企画課所蔵資料の調査を行う計画を立て実施に移した。ここでは、昨年度秋期より本年度春期に実施した理事長室企画課所蔵資料調査の概要を報告する。

調査方法

検索用の保管帳簿がなかったため、調査にあたっては、保管されている現状を変更することのないよう慎重を期して、まず保管容器であるキャビネット内の現状を、デジ

タルカメラで撮影記録した上で作業にとりかかった。すべて配架順など現状を崩さないよう十分留意しつつ、資料を一冊ずつ取り出し、各資料の内容をパソコンでデータ入力し目録化することとした。あわせて、資料には厚紙の表紙などがつけられていることから、表紙ごとにデジタルカメラで撮影し、資料の把握を行った。

この調査の実施期間と担当者は、次のとおりである。

・調査期間

平成23年9月13日～平成24年4月4日

(実施時間…14時～17時)

・調査日及び担当者

9月13日(火)	福原一成	浪江健雄
10月13日(木)	福原一成	浪江健雄
10月20日(木)	福原一成	浪江健雄
2月29日(木)	福原一成	浪江健雄
3月7日(水)	福原一成	浪江健雄
3月28日(水)	福原一成	浪江健雄
4月4日(水)	福原一成	浪江健雄

合計21時間

調査結果

「理事長室企画関係書類」は、理事長室企画課の管理のもと、スチール製キャビネット四台(1～4)に、おおむね時系列に配架されており、かつ保管の状態は、ほぼ良好であった。ここに保管されたものは、一九八九(平成元)年から二〇〇五(平成一七)年までのもの二五一件であった。

今後の課題と展望

次年度については、短期大学の設置申請関係書類等、また、中学・高等学校(全日制、定時制、通信制)の設置申請関係書類等の調査を、逐次進めていく予定である。

上塚司は、大正・昭和期の政治家として、またその半生をブラジルのアマゾン開拓事業に心血を注いだ事業家として、その名が知られている。特に政治家としては、高橋是清の秘書官として、また『高橋是清自伝』（千倉



上塚 司

国士館を支えた人々

上塚 司

熊本 好宏



書房)の編者として有名である。加えて「アマゾン開拓の父」と称され、ブラジル日本人移民の功労者であることもよく知られているところである。

一方、国士館との関わりにおいては、アマゾン開拓事業に係る教育機関として上塚司が校長となり設置した高等拓植学校が、創設後二年で国士館を離れたためか、本学との密接な関係はあまり知られていないようである。しかしながら、上塚司は、国士館の草創期を知る上では欠くことのできない人物であるとともに、国士館の運営に深く関わってきた功労者のひとりでもある。

上塚司は、一八九〇(明治二三)年五月、熊本県下益城郡杉上村赤見(現熊本市南区城南町)に秀輝の六男として生まれた。

そもそも上塚家は、「下の上塚」と称される本家と、司の家系である「上の上塚」の分家があり、それぞれ著

名な人物を輩出している。司の周辺には、「ブラジル移民の父」と称される従兄上塚周平がおり、大民倶楽部の熊本支部を主宰し国士館との関係も深い上塚秀勝は実兄にあたる。また、アガサ・クリスティーの翻訳などを多数手がけた小説家・翻訳家の乾信一郎（本名・上塚貞雄）は、司の甥にあたる。近代の熊本においては、高名な家系の出自である。

上塚は、熊本商業学校（現熊本商業高等学校）を経て、一九一二年に神戸高等商業学校（現神戸大学）を卒業した。卒業論文で「太平洋問題」をテーマに取り組む中で、中国大陸の情勢に強い関心を持ち、同年、南満洲鉄道株式会社に入社することとなる。

満鉄では当初、大連本部の会計課に配属の後、一九一五（大正四）年夏頃に興業部販売課に移り撫順炭の販売に従事、翌年五月には朝鮮京城事務所勤務を経て、一九一七年六月から本部に復帰、総務部調査課に配属となった。この満鉄時代には特に、一九一六年八月から満州・朝鮮をはじめ印度支那に至るまで経済調査に従事、また一九一八年には外務省および農商務省の嘱託となり、中国揚子江沿岸の商工業を中心とした経済調査にも従事し、多数の報告書を作成している。これらの調査を基にして、後に自著『揚子江を中心として』（織田書店、

一九二五年）を出版した。

この満鉄時代には、上塚と国士館との関係がはじまった。上塚が興業部販売課に移った一九一五年の夏、中国の大連に渡っていた柴田徳次郎と出会ったことが契機であった。当時の柴田は、早稲田大学専門部を卒業後、相生由太郎を頼って大連の福昌会社に勤務していた（野田大塊文書）。後年、上塚は柴田との出会いを、自身の回顧録「私の満鉄時代」（『満鉄会報』第五九号、一九六九年一月）で、次のように振り返っている。

販売課に移って間もなく、弧影飄然として一人の青年が東京からやって来た。胸に満腔の熱血を感し面は禅僧のように静であった。旧友が一夜小会を催して彼を迎えた。集まるもの五、六に過ぎなかったが彼は盛んに時世を説き教育を論じ政治を批判し意気軒昂純真なる青年の奮起を促した。

私は最も強く彼と共鳴した。それ以後毎週日を定めて時事を論じ、理想を語ろうと協議がまとまった。

（中略）

集会の日は、夕食を終えたと六人の若人達は必ずそこに集まった。雨の日も雪の日も唯一張りの卓子を囲んで胸中の磊塊を吐露した。談論風発興に乗ずれ



は熱気発刺として室内に溢れ、天地正大の気澎湃として湧くの思いがあった。

吾等は互に手を取って誓った。身を挺して君国のために尽そう、期到るを待って中央に集まろう。と。

(中略)

残れる盟血の内更に一名が東京に、一名は大阪に、一名は安東に移った。私は大沢(通宏、筆者注)君と共に満鉄に残り、大民団の成立を喜び、約に従い熱意を以てこれを応援し、資金を送り又毎月の雑誌に原稿を書いた。この大民団が今日の国士館総合大学の前身であり、ここに言う東京の人こそ現国士館総合大学総長柴田徳次郎君である。

上塚晩年の追懐ではあるが、その柴田評はまさに信念に燃える「国士」そのものであり、また上塚も同じく理想に燃える志士の様である。奇しくも、共に一八九〇年の生まれであり、二〇代半ばの若き二人が、肝胆相照らす仲となったことは想像に難くない。

後に国士館創立の母体となる青年大民団は、柴田を中心として一九一三年に発足していたが、一九一六年六月の機関誌『大民』の創刊をはじめとする大民団の本格的な活動は、柴田の帰国後のことであった。

また、この機関誌『大民』には、上塚も多数の論考を寄せた。現在のところ、一九一六年六月の創刊号から第二巻第二号までは、残念ながら所在や内容が不明なため確認できない。確認できる最初の寄稿は、第二巻第三号の論説「胡麻の花」(『大民』一九一七年三月)であるが、先の上塚の回顧録から推し量れば、創刊号から原稿が掲載された可能性はある。以後、ほぼ毎号、時には「上塚眠虎」のペンネームで、『大民』に寄稿を続けている。特筆すべきは、前述の上塚著『揚子江を中心として』の一部が、既に『大民』誌上に掲載されている点である。例えば、「東亜のエルサレム」(第三巻第一号)、「江蘇遍歴記」(第四巻第三号)、「江西東部舟行記」(第四巻第九号)などで、満鉄の調査行程とともに最新の中国情勢を大民団の関係者に、逐次詳細に知らせていたことがわかる。中国の揚子江調査を直前にひかえた一九一八年秋頃、上塚は東京へ足を運び、大民団員と交流を持っている。同年十一月一日発行の『大民』第三巻第一号は、あたかも上塚司歓迎号の様相で、多数の関連記事が掲載されている。青年大民団は、九月二八日に上塚の歓迎を兼ねた時局問題大講演会を早稲田劇場で開催し、上塚自身は「支那大陸の形勢と帝国の地位」と題して演壇に立った。次いで、一〇月一八日には、送別を兼ねて、神田青年会



館で興国大講演会を開催し、上塚は「帝国之自給自足と支那の将来」と題して三時間にわたる熱弁をふるった。また、一〇月六日には、麻布笄町の青年大民団本部で一宴が催され、大民団員の大歓迎を受けている。さらに同号には、「大民同人」名で「上塚司氏を送るの辞」も掲載され、「将来の支那問題、此人を俟つてその解決を見るべきあるを信じ、同人ために邦家の至幸を慶祝して措かざる所なり」として、揚子江調査へ向かう上塚に大きな期待を寄せている。

満鉄の揚子江調査を終えた上塚は、満鉄を退社し、政界へ進出する一九二〇年五月、上塚は、第一四回総選挙で政友会系として熊本県第五区に出馬し、最年少の三〇歳で当選、衆議院議員となる。これにともない満鉄を退社、政界へ進出した。以後、政友会系の議員として、戦後は自由党系議員として、計七回（第一四・二六・二八・一九・二二・二五・二六回総選挙）の当選を果たしている。一九二三年には、デンマークのコペンハーゲンで開催された第一二回万国議員会議に衆議院議員代表として参加し、欧州諸国を歴訪するとともに、帰国時には米国も周遊した。その見聞を基に上塚は、『理想的農業国デンマーク土産』（泰文館書店）を一九二九年に出版している。

この時期の上塚は、政界で一定の地位を築く傍ら、国士館との関係も深めていく。既に一九一七年七月には青年大民団の名誉理事（満洲之部）に名を連ねていたが、政界進出後の一九二二年には大民倶楽部の評議員に就任、一九二三年には理事に就任している。また、一九二一年七月の「国士館維持委員会」の発足時には会計を担当し、国士館の支援にも傾注するようになった。加えて、一九二二年には、財団法人国士館の理事および評議員に就任し、運営そのものに深く関わりを持つようになる。このように一九二〇年の帰国後の上塚は、政治家として多忙な日々を送りつつも、国士館の運営にも深く関わったのである。

さて上塚は、一九二四年の第一五回総選挙には落選するも、同年、農商務省大臣高橋是清の秘書官に就任した。以降、上塚は特に高橋に重用されることとなる。農商務省が分離廃省となった一九二五年には、商工大臣高橋是清および野田卯太郎の下で、大臣官房秘書課長に就任する。一九二八（昭和三）年には、田中義一内閣で大蔵大臣を務めた高橋および三土忠造の下では大臣秘書官を、一九三一年の犬養毅内閣で高橋が大蔵大臣となった際にも大臣秘書官を、翌一九三二年の斎藤実内閣でも大蔵大臣に留任した高橋の下で大蔵省参与官および大臣秘書

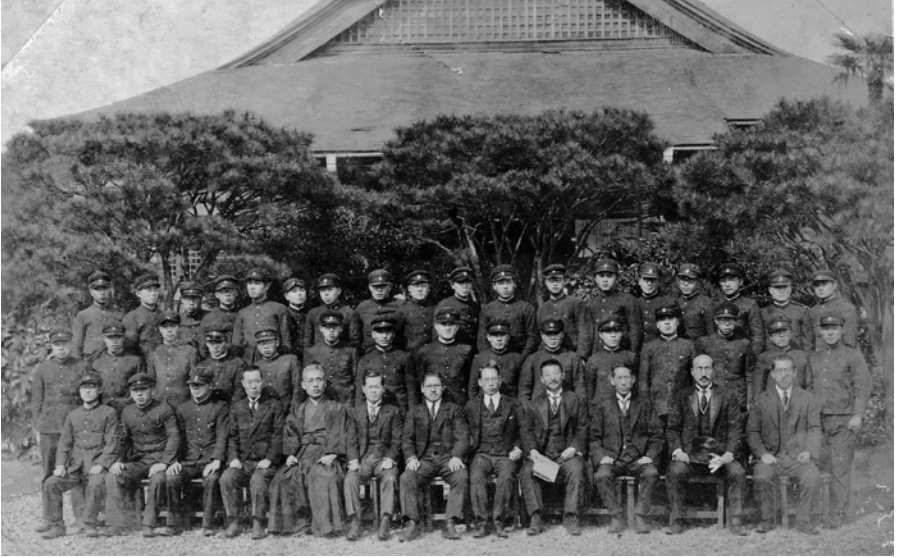
官事務取扱に就いている。一九三六年の二・二六事件で、高橋が陸軍青年将校に暗殺された後、上塚は高橋の口述を編集して『随想録』、『高橋は清自伝』、『高橋は清経済論』（全て千倉書房）の三冊を、同年中に逐次出版した。高橋が生前、自身の口述を託していたことは、いかに上塚を高く信頼していたかを窺えるだろう。この上塚との関係から高橋は、国士館をたびたび訪れ、一九二七年に「創立一一年回記念日」に参列し、また翌一九二八年には大講堂で講演も行っている。

上塚がこの間、広く政財界の知遇を得たことは、容易に推察できる。これを背景として上塚は、少なくとも一九二八年七月頃より、ブラジルのアマゾン開拓事業に乗り出すことになる。その契機は、神戸高等商業学校の後輩で同郷熊本出身の粟津金六らが、日本人移民を熱望するブラジルのアマゾナス州政府との間で、一〇〇万ヘクタールの土地無償譲渡契約を締結し、この話が上塚のもとに舞い込んだことであった。当時のアマゾンは未開の地であったが、直ちに上塚は、外務省に働きかけて第一次調査団を派遣し、選定地の譲渡等をアマゾナス州政府と締結させた。上塚自身も、外務省の補助を受け第二次調査団の団長として一九三〇年六月にアマゾンへ渡伯、入植地「ヴィラ・アマゾニア」を設定するとともに、「ア

マゾニア産業研究所兼附属実業訓練所」を設置し、帰国する。

時を同じくして一九三〇年四月には、財団法人国士館の一教育機関として新設した国士館高等拓植学校の校長に就任した。この国士館高等拓植学校の詳細は、本誌前三号の拙稿「国士館高等拓植学校と移民教育」を参照いただきたいが、その設置の経緯は少々複雑であるので概略を記しておきたい。

国士館は、一九二九年に国士館専門学校の設置とともに、国士館実務学校を設置した。この実務学校は、商科（昼夜開講）と拓植科を設け、修業年限一年の定員各五〇名の各種学校であった。その設置には、一九二五年設置の国士館商業学校が第一回卒業生を輩出するにあたり、その後の高等教育機関が求められていたことが背景にあった。加えて前述の通り、上塚が一九二八年以降にアマゾン開拓事業に関わりはじめていたこともあり、実務学校には拓植科も設けられた。ところが実務学校は文部省の認可は受けたものの、当初、肝心の学生募集を行わず、教育機関としての実態は皆無であった。このため実務学校拓植科を独立するかたちで、一九三〇年に、定員五〇名、修業年限一年の高等拓植学校が設置されたのであった。文部省への申請手続上、大規模な新規の施設・



国士館高等拓植学校第1回卒業式（上塚芳郎氏提供）

設備が必要でないことも、実務学校拓植科を引き継いだ一因であるだろう。国士館高等拓植学校では、明確にアマゾンへの入植を目的として実践的な移民教育が行われた。卒業後は渡伯し、アマゾンア産業研究所附属の訓練所で農業等を一年間学び、州契約の譲渡地へそれぞれ入植することとなった。

しかし、第二回卒業生を輩出後の一九三二年五月、上塚は国士館から離れ、現在の神奈川県川崎市生田の地に、日本高等拓植学校を新たに設立し、自ら校長となる。同年一月には、財団法人国士館の理事職からも離れ、以降、上塚と国士館との関係は希薄となった。

その後の上塚は、衆議院議員として政治活動を行いつつ、アマゾンア産業研究所の拡大・発展に精力を注ぐ。上塚は、一九三二年二月にアマゾンア産業研究所の財団法人化を果たし、次いで一九三五年一〇月には株式会社化して社長に就任、あわせて翌一九三六年一月に現地ブラジルでも会社登記を行い、その事業を進展させた。アマゾンでは、当初の大苦難をようやく脱して、一九三四年以降はジュート栽培で大成を取めつつあった。しかし、一九四二年のブラジルの対日宣戦布告で、その全てを接収された。

戦後、上塚は一九四六年の第二二回総選挙で衆議院議

員に復帰し、第一次吉田茂内閣で大蔵政務次官を務めた。一九五一年には熊本県知事選挙にも出馬した。一九五三年五月には衆議院外交委員長に就任するなどしたが、一九五五年の第二七回総選挙で落選し、政界から身を引いた。一方、一九五二年の日伯国交回復以前より、ブラジル移民の再開に尽力する。日伯中央協会の理事長を務めながら、接収されたアマゾン産業研究所の回復とアマゾン開発に情熱を注いだ。一九五四年二月には新たに設立された日本海外協会連合会（現JICA／国際協力機構の前身）の副会長に就任した。一九五五年にブラジル政府より南十字星大勲位章を授与、また一九六五年には勲二等瑞宝章を授与された。一九七八年一〇月、八八歳で逝去した。

これらの上塚司の略歴を見れば、多方面で活動した人物であることがわかる。その生涯の中でも、国士館との関係は、一九一五年から一九三二年までの約二〇年間にわたった。上塚が、一九三〇年四月に国士館が設置した国士館高等拓植学校の校長として、その教育と運営の全てを担ったことは言うまでもない。ここでは最後に、上塚が国士館創立期において、運営の中核を担ったことを強調しておきたい。

上塚は、満鉄時代に柴田徳次郎と親交を深めたことで、

国士館創立前の青年大民団発足時より、遠く中国の地からその活動を支えた存在であった。当然、一九一七年に創立した国士館への期待も大きく、常に動向を見守っている。例えば、上塚は香港から柴田宛に書簡を送り、「国士館建築の進行に就ては野田通相より雲南吾城宛にて詳しく書状到来、既に承知、祝福に不堪候」（『大民』第六卷第一号）と、大講堂をはじめとする世田谷での校地整備の遂行を祝している。

上塚の帰国後の一九二〇年以降は、衆議院議員としての多忙な身を賭しつつ、国士館運営の一翼を担った。財団法人国士館の理事・評議員を務めたことをはじめ、特に会計担当として国士館維持委員会の運営にも関わったことは、それを顕著に示している。例えば、福岡の実業家麻生太吉宛に、上塚は柴田との連名で書簡を送り、たびたび募金を依頼するなど、実際に運営の労を担っている。上塚は、政界に身を置き素性も明確である。特に、政界で一定の地位を築く大人物に対して国士館支援を得る際、上塚の果たす役割が大きかったことは容易に推察できるのである。

# 雑誌『大民』を探しています！

# 大民

国士館の淵源は、青年大民団の結成にあります。  
青年大民団の機関誌、1916年創刊の雑誌『大民』は、  
本学の沿革を知るための大切な資料です。  
しかし本学では、残念ながらほとんど原本を所蔵して  
おりません。

ついでに、雑誌『大民』の原本を探しています。  
ご提供または所蔵先の情報などをお寄せ下さい。  
皆様のご協力を、何卒よろしくお願いたします。

西蔵館蔵書/機関誌/非営利団体の機関誌/地域史資料館/北海道大学図書/法政大学入道社会科学研究所/神戸大学社会科学系図書/大宅壮一文庫

## 雑誌『大民』の概要

創刊：1916年6月15日、月刊誌  
発行：青年大民団（後に大民団・  
大民俱樂部・大民社へ変遷）  
注記：1924年7月（第11巻）より  
『生存同業』に改題

## ご連絡先

国士館史資料室

TEL 03-3418-2691

E-MAIL [archives@kokushikan.ac.jp](mailto:archives@kokushikan.ac.jp)

1916 ▶ 1917 ▶

『大民』創刊

国士館創立

国士館を支えた人々

水野 錬太郎



写真 1 水野 錬太郎

一九二九（昭和四）年、国士館は創立以来の宿願であった高等教育機関設置への先駆けとなる国士館専門学校を創設し、その校長に水野錬太郎（写真1）を迎えた。水野は、貴族院議員、朝鮮総督府政務総監、内務大臣、文

部大臣など、様々な要職を歴任し、また著作権法制定の草分けとなった大人物である。

水野錬太郎（号を香堂）は、一八六八（慶応四）年一月一〇日、江戸詰秋田藩士の父水野立三郎と母八重の長男として、東京浅草鳥越町の秋田藩邸に生まれた。水野が生まれた当時の東京は、まさに「明治元年の上野の戦争の時」であり、「父母の話によれば家は浅草鳥越の佐竹藩邸内に在ったので、砲声が殷々と聞こへ、実に恐かった」（「懐旧録 前編」尚友俱樂部・西尾林太郎編『水野錬太郎回想録・関係文書』山川出版社、一九九九年）という状況であった。明治維新後、父の帰藩にともない一家そろって秋田に移り、幼年期を秋田岩崎町で過ごしたが、一八七二（明治四）年の廃藩置県により、一八七四（明治七）年頃より家族とともに再び東京へ戻った。

東京へ戻ってからは本所の私塾に入學したが、正規の

漆畑 真紀子





「学校で教育を受けた」との気持ちから、その後、共立学校（後の開成中学）へ入学し、当時同校で教員をしていた高橋是清のもとで英語を学んだ。毎月の試験では「優等」の成績をおさめていたという（松波仁一郎編『水野博士古稀記念 論策と随筆』水野鍊太郎先生古稀祝賀会事務所、一九三七年）。共立学校在学中から大学への進学を考えており、それには「大学予備門に入るのが宜い」（前掲『論策と随筆』）という友人同志の話から、一八八四（明治一七）年には大学予備門（後の第一高等学校）を受験し合格した。この大学予備門で、水野は夏目金之助（漱石）や山田武太郎（美妙）など、異彩を放つ多くの学友に恵まれた。後年水野は両人を「吾輩の同級生の異彩」と評している。特に山田とは文学上の趣味から、卒業後もよく交際していた（「夏目漱石と山田美妙齋」前掲『論策と随筆』）。大学予備門卒業後は希望どおり、帝国大学法科大学法律学科に入学した。

一見華々しくみえる学歴ではあるが、水野の回顧録にこのようなエピソードがある。

明治維新の改革は政治上社会上の一大変革であった。——内政に於ては武士階級がなくなり四民平等となり、多年封建制度下に生活したる武士は職を離れ

失業者となった。——政府は金録公債なるものを発行し、是等離職士族の救済に充てた。併し其額は極めて微々たるものであった。自分の家にとつて見ても、自分の家は廿五石の扶持を受けて居つたが金録公債は僅かに八百三十円であった。この公債丈けでは逆も生計を維持しては行けぬ。（前掲「懐旧録 前編」）

士族困窮の時代にあつて、水野一家の生活状況も例外でなく、辛酸をなめた。書物もろくに買うことが出来ないうこの生活難のなか、水野は苦学生として勉学に励んだようである。新山虎治編『水野鍊太郎閣下と其故郷』（誠光堂、一九三五年）には、学資を得るために水野が筆耕や牛乳配達などをしていた話が掲載されている（「牛乳配達から大臣」）。くしくも、国士館の創立者柴田徳次郎も同じく「牛乳配達」などをしながら学校を卒業した苦学生であった（熊本好宏「野田卯太郎」『国士館史研究年報 楓原』第二号、学校法人国士館、二〇一一年）。水野は苦学の末、一八九二（明治二五）年七月、帝国大学法科大学法律学科を首席で卒業した。

大学卒業後は、大学時代の恩師穂積陳重の紹介で渋沢栄一の知遇を得たことから、彼が頭取を務める第一国立

銀行に入行した。水野は入行早々、銀行事務職をこなす一方で、東京商業会議所（後の東京商工会議所）の会頭でもあった洪沢に依頼され、三菱本社管事莊田平五郎、明治生命保険創業者阿部泰蔵など財界の錚々たる面々に、週に一、二回民法や商法の講義を行った。しかし、一年もたらずして同じく大学時代の恩師で当時農商務省参事官であった梅謙次郎の推挙により、農商務省に転じ官界入りすることとなった。農商務省では次官金子堅太郎のもとで鉱業法改正や森林法制定に従事した。半年ほど農商務省にて勤務すると、次に内務省の都筑馨六から声がかかり、一八九四（明治二七）年五月には内務省に転じ、参事官となった。以後、一九一二（大正元）年一二月に内務省を辞するまで同省に勤務した。

内務省在職中には大臣秘書官、文書課長、神社局長などを務める傍ら、時の内相樺山資紀の直々の指示により、著作権法案の起草に奔走し、欧米諸国を歴訪して制度の調査をし、列国著作権同盟の事務局で資料収集をした。帰国後は同属の赤司鷹一郎、小倉正恒らとともに法案の起草に着手し、全文五〇条からなる著作権法を完成させ、同法案は第一三帝國議會に提出、可決された。

著作権法について、以後水野は多くの論文を書き、講演を行っている。一九〇三（明治三六）年一月には「著

作権ノ基礎及性質著作権保護ニ関スル模範的法案ト日本」と題する学位論文を提出、母校より学位博士号を得ている（西尾林太郎「官僚政治家・水野鍊太郎」前掲『回想録』）。またこの頃から講師として早稲田専門学校（後の早稲田大学）、日本法律学校（後の日本大学）、英吉利法律学校（後の中央大学）、また母校の帝国大学、第一高等学校などで行政法、破産法、著作権法等を教授した。長く官僚生活を送った水野も、大正期に入り、依願免官し、同時に貴族院議員に勅選された。水野が政界に足を踏み入れるきっかけとなったのは、原敬との邂逅であった（前掲西尾論文）。水野が内務省神社局長兼大臣秘書官であった時代に、時の内務大臣原に仕え、同時に原の政治的人脈の中に組み込まれていった。一九一六（大正五）年からは内務次官を務め、一九一八（大正七）年には寺内正毅内閣において内相に就任し、初の入閣を果たす。翌年には原敬内閣のもとで朝鮮総督府政務総監に就任、一九二二（大正一一）年には加藤友三郎内閣に内務大臣として入閣し、一九二四（大正一三）年の清浦奎吾内閣においても内務大臣を務めた。その後一九二六（大正一五）年には立憲政友会に入会している。

一九二七（昭和二）年、田中義一内閣のもとでは文部大臣に就任したが、これが最後の入閣となった。外相の



後任人事に端を発し、水野に対する天皇の勅諭が貴族院にて問題化した、いわゆる「水野文相優待問題」により、水野は辞任に追い込まれた。一九二八（昭和三）年五月のことであった。

水野錬太郎と国士館の関わりはこの後から始まる。水野が文部大臣を務めていた際、文部省政務次官であった山崎達之輔が、水野と国士館とを結びつけた。

山崎達之輔は福岡県大川出身の官僚で、どのような経緯から国士館と繋がりを持ったのかは史料不足のため不明な点が多いが、一九二七（昭和二）年に国士館維持委員会委員に選出されている。

国士館は一九二五（大正一四）年の中学校設置を受けて、創立以来の宿願であった高等教育機関、特に大学設置へ向けて本格的に動き出していたが、この計画の中心的役割を担った野田卯太郎の急逝により専門学校の設置へと計画変更をした。大きな期待を寄せられての専門学校の門出に、山崎が手引きして水野錬太郎を校長に推したのである。

山崎委員より前文部大臣水野錬太郎氏を学長に迎へたき旨提案、是亦満場一致承認の上散会致し候。

依つて本月一日山崎、徳富両委員及柴田理事同道、水野氏を訪問、委員一同の希望を開陳の結果、同氏の快諾を得候。（国士館維持委員会経過報告につき書簡）一九二八年十一月、渋沢史料館所蔵資料）

委員一同の希望が叶い、国士館専門学校校長に水野が就任した。これをうけて、水野は一九二九（昭和四）年三月一六日付で「国士館専門学校設立挨拶文」（国士館史資料室所蔵、法人記録史料No.一九六六）を関係各所に送付している。そのなかで水野は、当時の軽佻浮華な世相を鑑み、「東洋固有の文化の精髓を發揚し、質実剛健の士風を興起し」て、「武道に依りて心身を鍛錬」し、世界で活躍する有為の人材を育成することが最も肝要であると説き、そのために「心身修養の道場として」国士館専門学校の統率に尽力していく決意を述べている。

一九二九（昭和四）年四月一五日、大講堂における専門学校開校式典で、校長の水野は教育勅語および式辞を奉読した。

かねてより、水野には独自の「国士」認識があり、随筆のなかで、板垣退助や杉浦重剛を「真の国士」と評している。水野のいう「国士」とは、「人格崇高にして峻

厳清廉」であり、「国事に奔走し常に国家を以て念とし、一家の計をなさず」、「一茅屋に住み、赤貧洗ふが如く、子孫に対して何等の計を立てず、一身を国家のために捧げ」る人物をいった。つまり、自らの利権を求めることせず、一心に世のため人のための事業を全うする人物こそ、「誠に国士たるの自分を完うした人」（「国士の典型板垣伯」前掲『論策と随筆』）であるとしている。

このことから、西洋の智識偏重教育ではなく、東洋の精神教育を基調とした真の人格者「国士」の養成を教育目的として掲げる国士館に、自身の「国士」理想を重ねたことは、想像に難くない。校長を快諾したことの背景には、国士館教育への大きな期待があったと思われる。

水野は、専門学校と同年に設置認可を受けた国士館実務学校の校長も引き受けている。その後の本学においての具体的な職務については、残念ながら史料が不十分のため、足跡を辿ることは難しい。本学所蔵資料からは、一九二九年頃専門学校剣道科学生からなる「大民団遊説隊」が結成した際に、国士館顧問の頭山満や徳富猪一郎（蘇峰）らとともに後援者を務めたこと、また一九三二（昭和七）年一月二四日の「鏡泊学園設立賛同趣旨文」への署名から、鏡泊学園設立にも協力していたことがうかがえる。さらに、一九二九（昭和四）年二月五日に本

学に東久邇宮稔彦親王一行が来学した際には、校長として、学園の案内をした（写真2）。

水野が国士館に籍を置いていたのは一九三七（昭和一二）年頃までである。昭和一〇年代半ば戦時体制が序々に強化されていくなかで、水野は一九四一（昭和一六）年には大日本興亜同盟結成に参加、さらに副総裁、総裁事務取扱を経て統領となった。しかし、そのことが災いし、戦後の一九四五（昭和二〇）年二月に「A級戦犯」容疑者に指定され、公職追放となり、自宅拘禁を余儀なくされた。その後一九四七（昭和二二）年には容疑者指定を解除されたが、一九四九（昭和二四）年、神奈川県大磯町の別邸慕賢堂で病にて八二年の生涯を閉じた。勲一等旭日大綬章、勲一等旭日桐花大綬章受章。公職追放は解除されないままでの、まさに不遇の晩年であった。

一九三五（昭和一〇）年八月二四日、水野は地元秋田県岩崎町民有志の寄附で完成した自身の胸像除幕式に出席するべく、郷里に帰っている。その除幕式挙行記念パンフレット（前掲新山編著）中に「青年学校と図書館」という記事が掲載されている。一九一八（大正七）年三月三十一日に創立した岩崎青年学校についての記事だが、この学校は水野の巨額の寄附により創設されたもので



写真2 東久邇宮稔彦親王来学時の水野錬太郎（左端）（昭和4年12月5日）

あった。また校内には水野の寄贈による「水野文庫」が設けられている。その学校のある郷里の気風について、水野は後年「真摯健実であり、余の最も快とする所」と述べ、

文化は軽佻浮華であつてはならぬ。何處までも質実剛健でなければならぬ。地方の麗はしき醇美の気風は之を保持し之を奨励し、以て我が国民性の堅固なる精神を涵養することは最も必要なることである。教育家為政者は深く茲に思ひを致されたいと思ふ。

（後略）（「恵澤荘」前掲『論策と随筆』）

と言及している。この言はまさに国士館が目指す教育にほかならないものであった。

水野はあらゆる方面からの人望を集め、法律家や内務官僚政治家として広く名を馳せた人物である。そしてまた、当世の教育を案じ、地域・国にその一生を捧げ、激動の時代を駆け抜けた真の「国士」であり、国士館教育の一翼を担った傑人であった。

## 『国士館百年史』編纂事業中期計画要旨

国士館百年史編纂委員会

はしがき

『国士館百年史』編纂事業中期計画は、具体的刊行計画を立案するため、国士館百年史編纂委員会専門委員会が原案を作成し、平成24年9月21日開催の国士館百年史編纂委員会専門委員会、平成24年11月24日開催の国士館百年史編纂委員会に諮り、審議の後承認された。それを受けて、平成25年1月30日開催の理事会に上申し、承認されたものである。

### 1. 編纂の基本理念

『国士館百年史』編纂は、国士館創立百周年を記念し、創設より今日に至る国士館教育研究の歩みを、客観的歴史資料による学術研究に基づいて明らかにしようとするものである。編纂にあたっては関係史資料を博搜し、その成果を次代に継承するよう万全を期するとともに、国

士館発展の足跡を通史にとりまとめ、自校史教育の教材等として活用するものとする。

### 2. 編纂の基本方針

- (1) 第一次史料による学術的な調査研究の成果に基づき編纂する。
- (2) 創立以来築かれてきた建学の精神と、私学としての特徴ある学風・伝統に注目する。
- (3) 国士館の歩みを、同時代の日本歴史、社会的背景との関連を重視しつつ編纂する。
- (4) 国士館と地域社会との絆、協力関係の歴史を重視する。

### 3. 編纂事業の構成

- (1) 『国士館百年史』の構成と刊行年次計画

- a. 本編 史料編 上・下巻 2分冊 平成25・26年度  
通史編 全1冊 平成28・29年度
- b. 普及教育版 全1冊 平成27・29年度
- c. 附属出版物 平成30年度以降

(2) 『国士館百年史』の概要

- a. 本編『史料編 上・下』(2分冊)  
内容あらまし

創立から百周年までの歴史を三部構成とし、第一部は創立から昭和20年まで、第二部は戦後至徳学園時代から総合大学化した昭和40年代まで、第三部は高等教育改革の開始から創立百周年までとし、第一部を上巻、第二部と第三部を下巻とする。

但し、平成26年度までに刊行する『史料編 上・下』に収載できなかった重要史料が新たに発見された場合は、記念事業完了後の継続事業として、『史料編 補遺』を刊行することを検討する。

- b. 本編『通史編』全1冊  
内容あらまし

全体を三部構成とし、第一部は創立から昭和20年まで、第二部は至徳学園時代から総合大学

化まで、第三部は高等教育改革から創立百周年までとする。

- c. 普及教育版(ブックレット)『国士館の歴史(仮称)』  
内容あらまし

本編『通史編』『史料編』の内容にもとづき、創立から百周年までの足跡を、写真や図版を豊富に入れて、平易に読みやすく解説する。全4章の構成とし、第1章は創設期から大正末期、第2章は昭和初期、専門学校の創設から昭和20年まで、第3章は戦後の復興期から総合大学化まで、第4章は改革期から百周年までとする。

〔附記〕

編纂事業は、多くの方々の様々な声やご協力をいただくことにより、より良いものとなります。編纂事業へのご意見ご提案等がございましたら、国士館史資料室までお寄せくださいますようお願い申し上げます。

# 1 国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会

国士館百年史編纂事業を進めるため平成一五年から、国士館百年史編纂委員会が発足、同委員会の下に百年史のための調査研究・執筆を担当する専門家組織として、新たに平成二一年に専門委員会が発足した。平成二四年度の国士館百年史編纂委員会並びに専門委員会の委員会名簿と各委員会の開催日程及び審議事項は次の通りである。

## (1) 国士館百年史編纂委員会

### 国士館百年史編纂委員会名簿

(任期…平成23年6月～平成25年5月)

委員長 阿部 昭 理事(年史編纂担当)

国士館史資料室長

(3月31日迄)

副委員長 安西 博見 常任理事(総務、広報担当)  
副委員長 南 克之 理事

委員 角田 直也 体育学部教授

委員 三浦 信行 政経学部教授  
副学長(11月30日迄)

委員 朝倉 利夫 体育学部教授  
委員 柴田 英明 理工学部教授  
委員 高野 敏春 法学部教授  
委員 佐々 博雄 文学部教授

(4月1日より国士館史資料室長)

委員 原田 信男 21世紀アジア学部教授

委員 白銀 良三 経営学部教授

委員 平木 茂 高等学校定時制課程教頭  
 委員 平木 邦雄 法人事務局長  
 庶務 国士館史資料室事務長 福原 一成  
 国士館史資料室 熊本 好宏

専門委員長 阿部 昭 国士館史資料室長  
 副専門委員長 佐々 博雄 文学部教授  
 (4月1日より国士館史資料室長)  
 (3月31日迄)

平成24年度の編纂委員会開催と審議事項

第14回 平成24年6月8日(金) 10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス1号館3階

第1会議室

審議事項 平成24年度以降の国士館百年史編纂事

業計画について(案)

庶務

国士館史資料室事務長 福原 一成

国士館史資料室 熊本 好宏

国士館史資料室 浪江 健雄

国士館史資料室 漆畑真紀子

第15回 平成24年11月24日(土) 10時30分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス1号館3階

第1会議室

審議事項 『国士館百年史』(仮称) 編纂事業中期

計画(案)について

平成24年度の専門委員会開催と審議事項

第15回 平成24年1月27日(金) 14時より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 平成24年度事業計画について

(2) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会

国士館百年史編纂委員会 専門委員会名簿

(任期…平成23年6月～平成25年5月)

第16回 平成24年3月22日(木) 14時より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館3階



会議室

審議事項 『国士館百年史（仮称）』史料編編集方

針について

次年度調査計画について

『国士館史研究年報―楓原―』第4号

の発刊について

第17回 平成24年4月27日（金）14時より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 史料編編集方針について（案）

『国士館史研究年報―楓原―』第4号

の発刊について

第18回 平成24年6月8日（金）14時45分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 平成24年度以降の国士館百年史編纂事

業計画について（案）

『国士館史研究年報―楓原―』第4号

の発刊について

第19回 平成24年9月21日（金）15時15分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 『国士館百年史』（仮称）編纂事業中期

計画

『国士館百年史』（仮称）史料編構成並

びに編集担当者（案）

『国士館史研究年報―楓原―』第4号

発刊計画（案）

第20回 平成24年11月24日（土）16時20分より

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

審議事項 翻刻要領について（案）

史料編の構成について（案）

『国士館史研究年報―楓原―』第4号

について

(3) 国士館百年史編纂委員会 専門委員会 研究会

本年度より国士館百年史編纂委員会専門委員会開催時にそれまでの調査・研究成果の相互共有を目的として研



研究会を開催する運びとなった。研究会の開催日程及び発表者・テーマは次の通りである。

第1回 平成24年3月22日(木) 専門委員会終了後

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

発表者 浪江健雄(資料室室員)

テーマ 至徳学園について

第2回 平成24年4月27日(金) 専門委員会終了後

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館3階

会議室

発表者 浪江健雄(資料室室員)

テーマ 飯塚新吾寄贈文書にみる終戦直後の国士館

第3回 平成24年6月8日(金) 専門委員会終了後

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

発表者 漆畑真紀子(資料室室員)

テーマ 国士館専門学校興亜科について

第4回 平成24年9月21日(金) 専門委員会終了後

会場 国士館大学世田谷キャンパス柴田会館1階

同窓会会議室

発表者 山崎真之(専門委員)

テーマ 「教育統計書」にみる国士館諸学校(戦

前編)

## 2 国士舘史資料室の活動

### 1 調査・収集

#### (1) 平成24年度の主たる資料調査

今年度、実施した資料調査ならびに収集の主な活動は以下の通りである。

#### 学外調査

#### (1) 雑誌『大民』原本等調査（於国立国会図書館、神戸大学図書館）

・新収集『大民』第4巻2号・5号・6号（中央図書館経由収集）。

・高等拓植学校（上塚司）関連掲載雑誌の複写。

日 時：平成23年12月20日・平成24年6月21日

（28日）

#### (2) 鏡泊学園関係資料調査（於槻木瑞生氏宅）

調査者：熊本好宏

・『昭和十四年度旧満洲国全縣略史』借用（平成24年3月9日返却）。

・『山紫水明の鏡泊湖と学園健児の実況』（写真葉書複製12枚セットカ詳細不明、現在調査中）ほか。

日 時：平成24年1月20日・3月9日

調査者：漆畑真紀子

#### (3) 上塚秀勝（熊本大民）関係資料（於熊本市歴史文書資料室）

・熊本市歴史文書資料室（熊本市史編纂資料）所蔵資料の複写↓上塚秀勝書簡ほか約23点。

日 時：平成24年3月30日

調査者：室長佐々博雄

④ 上塚司関係資料調査（於個人宅）

・資料所蔵を確認（但し分量は不明、現憲政資料室所蔵は提供の一部）。

借用：「大アマゾンを拓く」関連16mmフィルム

ム映像資料 計14点↓電子化。

提供：小冊子「俳人上塚周平」（平成20年、上塚周平顕彰イッペイの会発行）。

第1回高等拓植学校渡航写真ほか計9

点（電子媒体複写物）。

「大アマゾンを拓く」（複写物）。

上塚司宛徳富蘇峰書簡（複写） 4点

日 時：平成24年4月7日・7月28日

調査者：熊本好宏

⑤ 国士館専門学校興亜科関係資料調査（於国立国会図書館）

図書館

・関係書籍の縦覧。

日 時：平成24年6月4日

調査者：漆畑真紀子

⑥ 上塚秀勝関係資料調査

・新聞『熊本大民』第113号（昭和14年6月）受贈、

上塚高弘氏旧蔵上塚周平顕彰会会長米原尋子

氏経由。

熊本大民倶楽部創立15周年事業ほか（昭和

元年倶楽部支部発足）

日 時：平成24年6月21日

調査者：熊本好宏

⑦ 大原社会問題研究所蔵大民団関連調査（於国立国会図書館）

国会図書館

・『大民要覧』（昭和6年カ、大民倶楽部）複写。

・大林一之『大支那は狂はん』（昭和6年9月、大民倶楽部）複写。

・新聞『大民』第18年2号・3号（昭和7年2

月・3月、大民倶楽部）複写。

・新聞『大民』第20年1号通521号（昭和9年7

月5日、大民社）複写。

日 時：平成24年7月10日（中央図書館経由取

集）

調査者：熊本好宏

⑧ アジア歴史資料センター公開資料調査

・計 88 件(外交史料館蔵、防衛省防衛研究所蔵、国立公文書館蔵) 整理収集。

日 時…平成 24 年 8 月

調査者…熊本好宏

⑨ 鏡泊学園関係資料調査(於神奈川県立図書館)

・『月刊満洲』(月刊満洲社発行)の閲覧・部分複写。

鏡泊学園第二期生喜多川連「鏡泊学園回想

記(一)〜(三)」(14 巻 8 号・14 巻 9 号・14 巻 11 号)。

日 時…平成 24 年 8 月 28 日

調査者…漆畑真紀子

⑩ 水野鍊太郎及び鏡泊学園関係資料調査(於国立国会図書館)

・新山虎治編『水野鍊太郎閣下と其故郷』(昭和 10 年 11 月) 全複写。

・松波仁一郎編『水野博士古稀記念論策と随筆』(昭和 12 年 6 月) 縦覧。

・昭和 11 年 8 月立案調査書類第二編第二卷第二

号 南満洲鉄道株式会社経済調査会『満洲農

業移民方策』内「鏡泊学園調査報告 其の一

〜其の三」全複写。

日 時…平成 24 年 10 月 30 日

調査者…漆畑真紀子

⑪ 京都大学農学部図書館所蔵『鏡泊学園調査報告書』調査

・全頁複写。

日 時…平成 24 年 11 月 13 日(中央図書館経由収

集)

調査者…漆畑真紀子

⑫ 関西学院大学図書館所蔵雑誌『鏡泊』調査

・全頁複写。

日 時…平成 24 年 11 月 13 日(中央図書館経由収

集)

調査者…漆畑真紀子

⑬ 国士館高等拓植学校関係資料調査(於国立国会図書館)

・資料概要の確認(予備調査)。

日 時…平成24年12月6日

調査者…熊本好宏・漆畑真紀子

〔14〕鏡泊学園関係資料調査（於立教大学図書館、昭和館）

・立教大学図書館所蔵『昭和八年八月 満洲鏡泊学園渡滿者名簿』閲覧、複写依頼。

・東京朝日新聞社『朝日映画ニュース』（昭和9年5月頃）視聴

↓「帝国の生命線を護り民族発展の第一線に立つ満洲吉林省「鏡泊学園」学生生活」

映像（1分15秒）確認。

日 時…平成24年12月14日

調査者…漆畑真紀子

学内調査

〔1〕企画課保管資料の概要調査（於世田谷キャンパス1号館）

1号館

・前年度よりの継続作業。理事会・評議委員会関係資料ほか↓全二五一件、資料目録作成完了。

日 時…平成24年2月～4月 計4回

調査者…福原一成・浪江健雄

〔2〕企画課保管「諸規程整備委員会」等資料調査（於世田谷キャンパス1号館）

世田谷キャンパス1号館

・「諸規程整備委員会」ほか計8綴の借用。

日 時…平成24年4月12日

調査者…委員長阿部昭・福原一成・熊本好宏

〔3〕学長室保管資料調査（於世田谷キャンパス5号館）

・「学部長会会議録」ほか計82綴借用（平成24年10月3日・5日返却）。

日 時…平成24年6月18日

調査者…室長佐々博雄・福原一成・熊本好宏

浪江健雄

〔2〕オーラル調査

〔1〕アンケート調査

次の5名の方にアンケート調査を行った。

・海老名諭氏（昭和36年3月体育学部卒）

・本田和利氏（昭和25年国士館高等学校卒）

・斉藤 毅氏（昭和40年3月政経学部卒）

・森戸征哉氏（昭和40年3月政経学部卒）

・佐々木正行氏（昭和44年3月工学部電気工学

(2) 聞き取り調査

次の方に聞き取り調査を行った。

科卒)

・上塚司親族

(3) 主な寄贈資料

- ・「国士館武道少年部員之章」(バッジ) 1点  
寄贈者：澤田正夫氏
- ・柴田徳次郎より譲受の竹刀1本(含刀掛け)  
寄贈者：矢野博志氏(元体育学部教授)
- ・書籍99点、雑誌切り抜き1点、「国士館大学維新会」  
腕章(昭和60年頃) 1点、のれん(白字「国士館」、  
昭和60年頃) 1点  
寄贈者：吉田康浩氏(昭和60年3月政経学部二部  
卒)
- ・『熊本大民』(昭和14年6月発行) 1点  
寄贈者：上塚高弘氏
- ・文学部史学地理学科東洋史学専攻修了証・同国史  
学専攻修了証(未使用)、学生の出席簿、教務関  
係資料、計4点  
寄贈者：藤田忠氏(文学部教授)
- ・『大場家歴代史』、『大場家歴代史(統)』、『あゆみ  
―財団法人大場代官屋敷保存会40年史』、『新東京  
百景国の重要文化財 世田谷代官屋敷』ポスト  
カードセット、「東京都指定無形民俗文化財世田  
谷ボロ市」パンフレット、「重要文化財都史跡世  
田谷代官屋敷」パンフレット、計6点  
寄贈者：大場信秀氏
- ・廣戸勘仁氏(昭和22年3月至徳専門学校国漢弓道  
科卒)旧蔵個人アルバム(昭和14年〜22年頃) 1  
点、昭和20年頃国士館専門学校弓具一式(竹弓1  
点、矢筒(含竹矢8本) 2点、弓懸袋(含弓懸  
二点・中懸一点) 2点)  
寄贈者：廣戸康二氏(廣戸勘仁氏長男) ※高野護  
氏(昭和19年3月国士館中学校卒) 寄贈仲介
- ・兼子義晴氏(昭和10年3月国士館専門学校国漢剣  
道科卒)旧蔵賞状「寒稽古皆勤賞」(昭和10年1  
月29日) 1点、講義教本「論語 白文」(昭和8年)  
1点、大日本武徳会「扇子」(昭和10年頃) 1点、  
国士館専門学校時代写真(昭和6年〜昭和10年)  
19葉  
寄贈者：兼子正道氏(兼子義晴氏子息)
- ・柴田梵天館長使用の時計(昭和35年米国留学時購

入) 1点、眼鏡(昭和50年頃) 1点、角帽、制服(夏・冬)、学位授与式用マント、ブラジル訪問団上着

寄贈者…柴田徳文氏(政経学部教授)

昭和43年度国士館大学要覧(入学案内)、入試関係資料(昭和42年度、昭和45年度)、教科書10冊、ノート3冊、大学新聞3冊、館長訓話資料5件、明治祭パンフレット2冊、吹奏学部第4回定期演奏会パンフレット1冊、昭和45年度文学部便覧、人文学会紀要第1号(第3号)、「昭和45年度 日本地理教育学会日本政治地理学会研究発表大会並総会プログラム」、新聞記事複写2点、「明治祭文学部応援歌」(歌詞一覧)、「巡検指針」レジユメ、「国士館大学絵葉書」、「近世農村の人口地理的研究」、「館歌・寮歌/国士の雄叫び」(7インチLP)、計39点

寄贈者…菰田忠利氏(昭和46年3月文学部史学地理学科卒)

【表 1】 収蔵資料及び目録化の進捗状況

名 称	内 容	H 22 年度 目録化済	H 23 年度 目録化済	H 24 年度 目録化済
法人記録史料	法人(教学を含む)組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	4,613	5,023	6,834
出版刊行物	学内で刊行される出版物	2,504	5,506	6,225
写真・その他の映像・音声資料	国士館に関わる写真その他の映像・音声資料	3,850	4,925	5,979
物品資料	国士館に関わる物品資料	316	344	549
調査収集資料	学外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	572	1,440	2,510
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	1,136	1,218	1,309
合 計		12,991	18,456	23,406

(平成 24 年 12 月 31 日現在)

## 2 整理・保存

### (1) 資料目録作成状況

本年度（平成二四年一二月三一日現在）の国士館史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は【表1】の通りである。

### (2) 資料保存

本年度は、以下の資料について修復及び保存処置を業者に依頼し、それぞれ実施した。

- ・ 80周年記念式典等（VHS）総務課移管映像資料群40点の電子化。
- ・ 広報課移管映像資料（VHS・ベータ）電子化。
- ・ 昭和42年頃鶴川団地空撮写真（個人所蔵）借用資料の複写。
- ・ 国士館高等拓植学校関係16mmフィルム（個人所蔵）借用資料の電子化。
- ・ 昭和30年代「会報録綴」（57冊）・「アマゾンア産業研究所月報」（39点）電子化複写。
- ・ 「認可書類綴」他5点電子化複写。

- ・ 昭和4年～24年専門学校ほか卒業アルバム（17点）電子化複写。

## 3 利用・公開

### (1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

#### 【平成24年度 更新】

- ・ 収蔵資料検索システムで写真資料（二八四件）をweb公開（平成24年4月9日）
- ・ 収蔵資料検索システムで資料索引『国士館大  
学新聞』（第1号～第50号）記事検索（二七五八  
件）をweb公開（平成24年11月1日）

### (2) ホームページ

#### 【平成24年度 更新】

#### 「お知らせ」

- ・ 梅ヶ丘校舎で「国士館の歴史」展を開催（平成24年2月17日）
- ・ 国士館史研究年報 楓原第3号を刊行しました（平成24年3月10日）
- ・ 「収蔵資料検索システム」更新 写真資料検索を追加しました（平成24年4月9日）
- ・ 梅ヶ丘校舎で「大講堂―国士館のシンボル―」



展を開催（平成24年5月23日）

・夏季の一時閉室について（平成24年7月13日）

・創立95周年記念展「国士館の歴史」を開催（平成24年10月25日）

・「収蔵資料検索システム」更新 資料索引『国士館大学新聞』記事検索を追加しました（平成24年11月1日）

・創立95周年企画展「国士館の歴史」を開催しました（報告）（平成24年11月5日）

・梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」を開催中（平成24年11月7日）

〔刊行物〕

・国士館史研究年報 楓原第3号の全頁（電子ブック）掲載（平成24年3月31日）

アドレス

<http://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html>

(3) 教育普及活動

① 常設展示

国士館史資料室では、柴田会館四階に展示室を設け、国士館の歩みを示す貴重な関係資料を一般公開している。国士館の創立者柴田徳次郎

にゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する資料などを展示している。

開室日時…月曜～土曜 10:00～16:00

（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

平成二四年一月～二月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数	224名
・学生・生徒	175名
・教職員	49名
・学外者数	341名
・卒業生	71名
・一般	270名
・総観覧者数	565名

② 梅ヶ丘展示ルーム企画展

世田谷キャンパス三四号館（梅ヶ丘校舎）一階の展示ルームにおいて、次の企画展を開催した。

・平成24年2月～5月「国士館の歴史」展  
 ・平成24年5月～9月「大講堂―国士館のシ



釜石市の中学生の大学見学

### ③ イベント企画展「国士館の歴史」

本年度のオープンキャンパス及び父母懇談会開催時に世田谷キャンパス大講堂において、写真パネルによる企画展示「国士館の歴史」を開催した。「国士館の歴史」を写真で紹介すると共に、「国士館九十年の軌跡」(DVD)等を上映した。それぞれ実施日及び入場者数は、次の通りである。

ンボル」展

・平成24年11月～平成25年1月「世田谷の今  
昔—国士館ゆかりの地—」展



「大講堂」展ポスター

平成24年3月25日(日)オープンキャンパス 219名  
 平成24年6月3日(日)オープンキャンパス 135名  
 平成24年7月15日(日)オープンキャンパス 433名  
 平成24年8月5日(日)オープンキャンパス 953名  
 平成24年9月16日(日)オープンキャンパス 358名  
 平成24年10月28日(日)オープンキャンパス 197名  
 平成24年11月11日(日)父母懇談会 648名

(4) 追悼記念展示「学校法人国士館館長 柴田梵天先生の足跡」

学校法人国士館 館長 柴田梵天先生が、平成二四年一〇月一四日、逝去された。御年九五歳。先生のご功績を偲び、一〇月一九日(金)の葬儀にあわせて世田谷キャンパス大講堂において追悼記念展を開催した。入場者数は一〇六名であった。

(5) 二〇二二創立95周年記念展示「国士館の歴史」

平成二四年一〇月二八日(日)～十一月四日(日)を会期に、世田谷キャンパス大講堂において、企画展を開催した。「国士館の創設」「諸学校の設立と戦争」「復興と総合大学へのあゆみ」

「広がるキャンパスと現在」の四コーナーに分けて写真パネルを展示した。創立95周年に際し、特別企画としてオリジナルポストカードが当たるクイズコーナーを設けた。入場者数は一六八一名であった。

(6) レファレンス

本年度のレファレンスは、学内・学外合わせて五二件(平成二四年一月～二月)であった。学内からは、政経学部50周年記念誌編集のための資料提供や国士館学生の写真パネル展示依頼等があった。学外からは満洲鏡泊学園に関する資料閲覧等があり、閲覧室の利用も増加した。また、政経学部基礎ゼミナールほか、博物館学芸員課程(博物館資料論)の講義支援も実施した。

さらに本年度は、海外協定校や修学旅行に伴う中学校による資料展示室の観覧もあった。

(7) 中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から生徒の職場体験学習についての依頼があり、三回にわたり受け入れ

を行った。資料室では仕事の一環である「歴史を編む」ことの体験や展示体験を中心として課題に取り組んでもらった。

日時、学校名及び学年・受入人数

平成 24 年 7 月 23 日（月） ～ 25 日（水）

世田谷区立松沢中学校 2 年生 1 名

平成 24 年 9 月 19 日（水） ～ 21 日（金）

世田谷区立梅丘中学校 2 年生 2 名

平成 24 年 11 月 28 日（水） ～ 30 日（金）

世田谷区立玉川中学校 2 年生 1 名

#### 4 室の構成

##### (1) 職員（平成 24 年度）

室長 佐々 博雄（文学部教授）

事務長 福原 一成

職員 熊本 好宏

準職員 浪江 健雄 漆畑 真紀子

パート職員 稲葉 彩香

アルバイト学生

篠塚広海 大庭裕介 近藤充 小安智子

逸見千種 西村安奈 佐藤理沙 鎌田真緒

滝沢永将 山口有希 渡邊真帆 十文字元気  
森美幸 佐藤玲 平林佐和子 勝又美貴  
田中くるみ

##### (2) 施設の概要

所在地 〒154-0023 東京都世田谷区若林 4・31・10

名称 柴田会館

構造 鉄骨鉄筋コンクリート造、地下 2 階、

地上 4 階

資料室施設面積

2 階：館史事務室 21.1㎡、館史研究室 36.8㎡、

第 1 史料収蔵庫 63.8㎡、第 2 史料収蔵

庫 21.5㎡

4 階：室長室 13.7㎡、学術調査員室（兼閲覧

室）13.7㎡、展示室 119㎡

#### 5 活動日誌

##### 【1月】

（平成 24 年 1 月～12 月）

17 日 第 78 回全国大学史資料協議会東日本部会研究

会（於獨協大学）に福原一成が参加

20 日 鏡泊学園関係資料調査のため同朋大学名誉教

授槻木瑞生氏宅へ訪問（漆畑真紀子）

27日 第15回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
 催

【2月】

14日 若林克彦理工学部教授研究室にて学内会議資料等につき資料調査（福原一成、熊本好宏、浪江健雄）

16日 若林克彦理工学部教授研究室にて学内会議資料等につき資料調査（熊本好宏）

17日 「国士館の歴史」展開催（5月23日、於世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示ルーム）

20日 管財課保管若林克彦理工学部教授関係資料搬入

21日 若林克彦理工学部教授研究室にて学内会議資料等につき資料調査（熊本好宏）

80周年記念式典等（VHS）総務課移管映像資料群40点の電子化完了（関東インフォメーションマイクロ）納品

29日 広報課移管映像資料（VHS・ベータ）電子化を関東インフォメーションマイクロに依頼  
 理事長室企画課管理書類調査（於1号館）（福原一成、浪江健雄）

【3月】

6日 第79回全国大学史資料協議会東日本部研究会（於武蔵野美術大学サテライトキャンパス）に福原一成が参加

7日 理事長室企画課管理書類調査（於1号館）（福原一成、浪江健雄）

9日 鏡泊学園関係資料調査および借用資料返却のため槻木瑞生氏宅へ訪問（漆畑真紀子）

10日 『国士館史研究年報 楓原』第3号一〇一〇部納品

ホームページ更新（「刊行物」国士館史研究年報楓原第3号を刊行しました）

22日 第16回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
 催

第1回研究報告会開催（浪江健雄「至徳学園について」）

25日 二〇一一年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数219名）

28日 理事長室企画課管理書類調査（於1号館）（福原一成、浪江健雄）

31日 阿部昭室長退任

【4月】

- 1日 佐々博雄室長就任  
ホームページ更新（年度更新「国士館史資料概要」室長交代に伴う「室長からのご挨拶」変更）
- 3日 昭和42年頃鶴川団地空撮写真（個人所蔵）借用資料の複写依頼（ムサシ・イメージ情報）
- 4日 理事長室企画課管理書類調査（於1号館）（福原一成、浪江健雄）
- 5日 昭和42年頃鶴川団地空撮写真（個人所蔵）借用資料の複写完了納品（ムサシ・イメージ情報）
- 6日 ホームページ更新（メタデータ編集）
- 7日 個人宅にて国士館高等拓植学校関係資料調査（熊本好宏）
- 9日 ホームページ更新（「収蔵資料の検索」収蔵資料検索システムで写真資料検索（284件）を Web 追加）
- 18日 資料展示室にて政経学部松本利秋非常勤講師・工藤憲一郎非常勤講師・里賢一非常勤講師基礎ゼミナール講義支援（1年生40名、院生1名）

19日

釜石市立大平中学校修学旅行に伴う大学施設見学（於大講堂、資料展示室）（生徒61名、教諭4名）

資料展示室にて政経学部永富隆司教授専門ゼミナール講義支援（4年生18名）

広報課移管映像資料（VHS・ベータ）電子化完了納品（関東インフォメーションマイクロ）

国士館高等拓植学校関係16mmフィルム（個人所蔵）借用資料の電子化依頼（関東インフォメーションマイクロ）

20日 資料展示室にて政経学部中拂仁教授政治学演習講義支援（2年生18名）

22日 日本アークイブズ学会二〇二二年度大会（於学習院大学）に浪江健雄が参加

27日 第17回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
第2回研究報告会開催（浪江健雄「飯塚新吾寄贈文書にみる終戦直後の国士館」）

【5月】

7日 資料展示室にて政経学部永富隆司教授フレックシユマン・ゼミナール講義支援（1年生31名）

23日 「大講堂―国士館のシンボル―」展開催（

9月30日、於世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示ルーム）

ホームページ更新（「お知らせ」梅ヶ丘校舎で「大講堂―国士館のシンボル―」展を開催）

31日 全国大学史資料協議会東日本部会二〇一二年度総会に漆畑真紀子が参加（於日本女子大学目白キャンパス）

松陰神社にて政経学部永富隆司教授ゼミ講義支援（4年生20名）

【6月】

1日 吉林大学職員の本学訪問につき対応（於大講堂、資料展示室ほか）

3日 二〇一二年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数135名）

4日 国立国会図書館にて国士館専門学校興亜科関係資料調査（漆畑真紀子）

8日 第14回国士館百年史編纂委員会開催  
第18回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催  
第3回研究報告会開催（漆畑真紀子「国士館

専門学校興亜科について）

18日 学長室より「学部長会議資料」等借用（10月5日）

20日 資料展示室にて政経学部中拂仁教授ゼミナール講義支援（3年生9名）

21日 神戸大学図書館蔵『大民』原本調査（6月28日）

23日 史料保存利用問題シンポジウムに漆畑真紀子が参加（於学習院大学）

26日 昭和30年代「会報録綴」（57冊）・「アマゾンア産業研究所月報」（39点）電子化複写依頼（ムサシ・イメージ情報）

【7月】

5日 資料展示室にて政経学部小池亜子講師「日本語読解1A」講義支援（1年生6名）

10日 鶴川短期大学理事長ほか1名資料展示室見学  
15日 二〇一二年度オープンキャンパスにて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数433名）

17日 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会関東部会第267回定例研究会に漆畑真紀子が参加（於東京都北区立中央図書館）

18日 明星大学教育センター職員（2名）資料展示  
室見学

19日 第80回全国大学史資料協議会東日本部会研究  
会に浪江健雄が参加（於東京理科大学神楽坂  
キャンパス）

23日～25日 世田谷区立松沢中学校2年生（1名）

職場体験学習のため来室

26日 蘇州大学学生（学生20名ほか10名）資料展示  
室見学

28日 国士館高等拓植学校関係資料調査（個人所蔵  
資料の返却及び借用）（熊本好宏）

【8月】

5日 二〇一二年度オープンキャンパスにて「国士  
館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講  
堂、入場者数953名）

10日 昭和30年代「会報録綴」（57冊）・「アマゾニ  
ア産業研究所月報」（39点）電子化複写納品  
及び「認可書類綴」他5点電子化複写依頼（ム  
サシ・イメージ情報）

20日 国士館高等拓植学校関係16mmフィルム（個人  
所蔵）借用資料の電子化に伴う補正処理につ  
き出張（熊本好宏）

27日 昭和4～24年専門学校ほか卒業アルバム（17  
点）電子化複写依頼（堀内カラー）

28日 神奈川県立図書館にて鏡泊学園関係資料調査  
（漆畑真紀子）

【9月】

16日 二〇一二年度オープンキャンパスにて「国士  
館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講  
堂、入場者数358名）

19日～21日 世田谷区立梅丘中学校2年生（2名）  
職場体験学習のため来室

21日 第19回国士館百年史編纂委員会専門委員会開  
催

第四回研究報告会開催（山崎真之「教育統  
計書」にみる国士館諸学校（戦前編）」）

26日 昭和4～24年専門学校ほか卒業アルバム（17  
点）電子化複写納品（堀内カラー）

27日 「認可書類綴」他5点電子複写納品（ムサシ・  
イメージ情報）

【10月】

2日 法学部附属比較法制研究所第5回極東国際軍  
事裁判研究プロジェクト運営委員会にて収蔵  
資料東本文書群の報告（熊本好宏）



3日・5日 学長室より借用の「学部長会議資料」等返却

10日 昭和44年卒剣道部OB・OG会（体育学部10期生ら22名）につき『国士館大学創立50周年記念映画』（毎日映画社制作、昭和42年4月）上映

国立国会図書館にて『国士館史研究年報―楓原―』第4号編集関係資料調査（浪江健雄）  
10日～12日 全国大学史資料協議会二〇一二年度総会ならびに全国研究会（於同志社大学今出川校地ほか）に熊本好宏が参加

19日 追悼記念展示「学校法人国士館館長 柴田梵天先生の足跡」開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数106名）

28日 二〇一二年度オープンキャンパスにて「二〇一二創立95周年記念展示 国士館の歴史」開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数197名）

28日～11月4日 「二〇一二創立95周年記念展示 国士館の歴史」開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数一六八一名）

【11月】

1日 ホームページ更新（「収蔵資料の検索」収蔵資料検索システムで『国士館大学新聞』記事検索（二七五八件）をweb追加）

7日 「世田谷の今昔―国士館ゆかりの地―」展開催（～平成25年1月31日、於世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示ルーム）

8日～9日 第38回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（広島）大会（於広島県民文化センター・鯉城会館）に漆畑真紀子が参加

11日 平成24年度父母懇談会にて「国士館の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者数648名）

13日 京都大学農学部図書室所蔵『鏡泊学園調査報告書』及び関西学院大学図書館所蔵雑誌『鏡泊』複写物納品

13日～18日 国文学研究資料館史料管理学研修会に浪江健雄が参加（於福井県文書館）  
21日 資料展示室にて柿沼幹夫文学部非常勤講師博物館各論講義支援（3年生35名）

24日 第15回国士館百年史編纂委員会開催  
第20回国士館百年史編纂委員会専門委員会開催

催

28日～30日 世田谷区立玉川中学校2年生（1名）  
職場体験学習のため来室

29日 東京シテイガイド「マルシエモア」世田谷史  
跡見学に伴い資料展示室及び大講堂見学（14  
名）

【12月】

5日 福岡県朝倉市立十文字中学校修学旅行に伴う  
大学施設見学（於資料展示室）（生徒8名、教  
諭1名）

東京シテイガイド「マルシエモア」世田谷史  
跡見学に伴い資料展示室及び大講堂見学（20  
名）

6日 国立国会図書館にて国士館高等拓植学校関係  
資料調査（熊本好宏、漆畑真紀子）

13日 第82回全国大学史資料協議会東日本部会研究  
会（於東海大学湘南キャンパス）に熊本好宏  
が参加

14日 立教大学図書館及び昭和館にて鏡泊学園関係  
史料調査（漆畑真紀子）

# 国士館創立 100 周年記念事業の寄付金募集

## ■募金の趣意

本学園は、2017年に創立100周年を迎えるにあたり、国士館創立100周年記念事業により平成18年4月から教育の内容と組織そして施設・設備の両面にわたる総合的な整備を進めています。

この事業の総資金200億円のうち50億円を学生・生徒のご父母・保護者、卒業生、教職員のほか、広く各界の方々からの寄付によりご援助をいただき計画とし募金活動を進めております。お陰様で多くの方々のご賛同を賜り、貴重な浄財をご寄付いただいております。第1期の事業は予定どおり進行し学部の改組、学科の新設、教育棟の新築などそれぞれ完了し、第2期の事業に着手しております。

引き続きご協力をいただきますよう重ねてお願い申し上げます。

●募金総額：50億円 募集期間：平成18年4月～平成30年3月

●募金方法：創立100周年記念事業募金委員会から、別途ご本人あてに募金の依頼状をお送りさせていただいております。なお、申込書をご入用な方は、募金事務室あてにご請求下さい。

## ■事業の概要

期別	事業項目	事業内容
第1期 18/4～20/3	世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎 教育施設の総合整備 教育・研究組織の再整備	総合教育棟の建設 研究・教育棟の建設 新学部の設置・学科の改編
第2期 20/4～25/3	町田、多摩キャンパス 教育施設の再整備 世田谷キャンパス	教育施設・設備のリニューアル 厚生施設の充実・環境整備 中高施設・環境整備
第1期 25/4～30/3	世田谷キャンパス 再開発整備	既存建物の建て替え 環境整備
通期	教育振興 修学支援事業 年史編纂事業	奨学基金の充実 スポーツ・文化活動の振興支援 100周年史の編纂
総事業費		200億円

上記の「事業内容」は、計画の具体化により、若干の変更を伴います。

## ■資金の概要

総事業費……………200億円

うち学園資金……………150億円

うち寄付金……………50億円

## ★募金についてのお問い合わせ

学校法人 国士館 募金事務室  
創立100周年記念事業募金委員会  
(世田谷キャンパス 10号館 2階)

〒154-8515  
東京都世田谷区世田谷 4-28-1  
電話：03-5481-3107 FAX：03-3413-7420

関係法規

国士館百年史編纂委員会要綱

(趣旨)

**第1条** 学校法人国士館（以下「本法人」という。）に、国士館創設以来の歴史を記録する国士館百年史（以下「百年史」という。）を編纂するため、国士館百年史編纂委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(委員会の構成)

**第2条** 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 理事のうちから、理事長の指名する者 若干人
- (2) 国士館大学専任教員のうちから、学長の指名する者 若干人
- (3) 中学校・高等学校教員から、校長の指名する者 若干人

- (4) 法人事務局長、国士館史資料室長
  - (5) 学識経験者で、理事長が指名する者 若干人
- 2 委員は、理事長が委嘱する。
  - 3 第1項第1号、第2号、第3号及び第5号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。第4号の委員は、職務在任期間とする。

(委員長及び副委員長)

- 第3条** 委員会に、委員長及び副委員長を置く。
- 2 委員長及び副委員長は、理事長が指名する。
  - 3 委員長は、委員会を統括する。
  - 4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(顧問)

**第4条** 委員会に顧問を置くことができる。

2 顧問は、理事長が委嘱する。

3 顧問は、必要に応じ委員会に出席するものとする。

4 顧問の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(委員会の任務)

**第5条** 委員会は、次の各号の事項を行う。

(1) 百年史の編纂方針に関する事

(2) 百年史の刊行に関する事

(3) その他、百年史編纂に関する事

(委員会の運営)

**第6条** 委員長は、委員会を招集し、議長となる。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決する。

可否同数の場合は、委員長が決する。

4 委員会は、必要に応じ、委員以外の者を出席させる

ことができる。

(専門委員会の設置)

**第7条** 委員会に、専門委員会を置く。

(専門委員)

**第8条** 専門委員は、委員長の推薦により理事長が委嘱

する。

2 専門委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨

げない。

(専門委員長及び副専門委員長)

**第9条** 専門委員会に、専門委員長及び副専門委員長を

置く。

2 専門委員長は、委員会委員のうちから理事長が指名

する。副専門委員長は、委員会委員のうちから専門委

員長が指名する。

3 専門委員長は、専門委員会を統括し、代表する。

4 副専門委員長は、専門委員長を補佐する。

(専門委員会の任務)

**第10条** 専門委員会の任務は、次の各号のとおりとする。

(1) 百年史の刊行計画案の作成

(2) 百年史の執筆・編集・校訂

(3) 資料の調査収集、その他百年史編纂に関する事

(専門委員会の運営)

**第11条** 専門委員長は、専門委員会を招集し、議長となる。

2 専門委員会は、必要に応じ、専門委員以外の者を出席させることができる。

(経費)

**第12条** 委員会及び専門委員会の経費は、国土館史資料室の予算を充てる。

(委員会及び専門委員会の庶務)

**第13条** 委員会及び専門委員会の庶務は、国土館史資料室が担当する。

(改廃手続)

**第14条** この要綱の改廃は、理事長が決定する。

附 則

この要綱は、平成21年5月27日から施行する。

## 国士館史資料室規程

### (趣旨)

**第1条** この規程は、国士館史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

### (目的)

**第2条** 資料室は、国士館の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

### (資料室長)

**第3条** 資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2 資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げ

ない。

### (職員)

**第4条** 資料室に、必要な職員を置く。

### (学術調査員)

**第5条** 資料室に、学術調査員を置くことができる。

2 学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3 学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4 学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

(1) 本学の理念及び本学史に関すること

- (2) 資料の収集・整理・保管等に関する事
- (3) 年史・資料集等に関する事
- (4) その他資料室に関わる学術的事項

(専門員)

**第6条** 資料室に、専門員を置くことができる。

- 2 専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。

- (1) 資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集
  - (2) 年史・資料集等の企画及び編纂
  - (3) その他資料室に関わる専門的事項
- 3 専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

(収集資料)

**第7条** 資料室は、次の資料を収集する。

- (1) 国士館の建学の精神に関する資料
- (2) 国士館の発展の経緯に関する資料
- (3) 国士館が設置する諸学校に関する資料
- (4) 国士館の創立者及び先人に関する資料
- (5) その他国士館に関する資料

(所蔵資料の開放)

- 第8条** 資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

- 2 資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

(資料の貸出し)

- 第9条** 資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

(資料の管理)

- 第10条** 資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。



## 編集後記

平成二四年一〇月一四日、国士館館長柴田梵天先生がご逝去されました。先生は、若き頃より国士館を支えてこられました。終戦直後の混乱期には、弱冠三一歳で校長・理事を務められています。その際のご苦労たるや如何ばかりであったのでしょうか。想像すら出来ません。その後も長きにわたり、教育者として、経営者として、国士館に尽くされました。ここにあらためてご冥福をお祈り申し上げます。

『国士館史研究年報』も四号目となり、学内関係者のみならず、外部の方からの寄稿もいただけるようになりました。本誌では、長年、アジア教育史をリードしてこられた同朋大学名誉教授槻木瑞生先生から玉稿を頂戴いたしました。精緻な実証研究であり、また、学問への取り組み方の提言もなされています。是非ともご一読ください。

本年度は、室長が阿部昭先生から佐々博雄先生に代わりました。

『国士館百年史』の編纂もいよいよ佳境に入ってきました。時間との勝負でもありますので、一日一日を大切に取組んで参りたいと存じます。

(浪江健雄)

## 執筆者紹介

槻木 瑞生	同朋大学名誉教授
大澤 英雄	学校法人国士館理事長
岩間 浩	元国士館大学文学部教授
山崎 真之	国士館大学文学部非常勤講師
佐々 博雄	国士館史資料室長・文学部教授
福原 一成	国士館史資料室事務長
熊本 好宏	国士館史資料室室員
浪江 健雄	国士館史資料室室員
漆畑 真紀子	国士館史資料室室員

## 国士館史研究年報 楓原 二〇二二 第四号

平成25年3月11日発行

編集 国士館百年史編纂委員会 専門委員会

国士館史資料室

発行 学校法人 国士館

〒一五四―八五一五

東京都世田谷区世田谷四―二八―一

TEL〇三―三四一八―二六九一

FAX〇三―三四一八―二六九四

E-mail archives@kokushikan.ac.jp

印刷 株式会社リョーワ印刷



